

6区の調査

6区はA区東部を欠き、C区は地表面では半分程度しかない。6C区東壁と南壁際は深掘りを行い岩盤まで調査した。

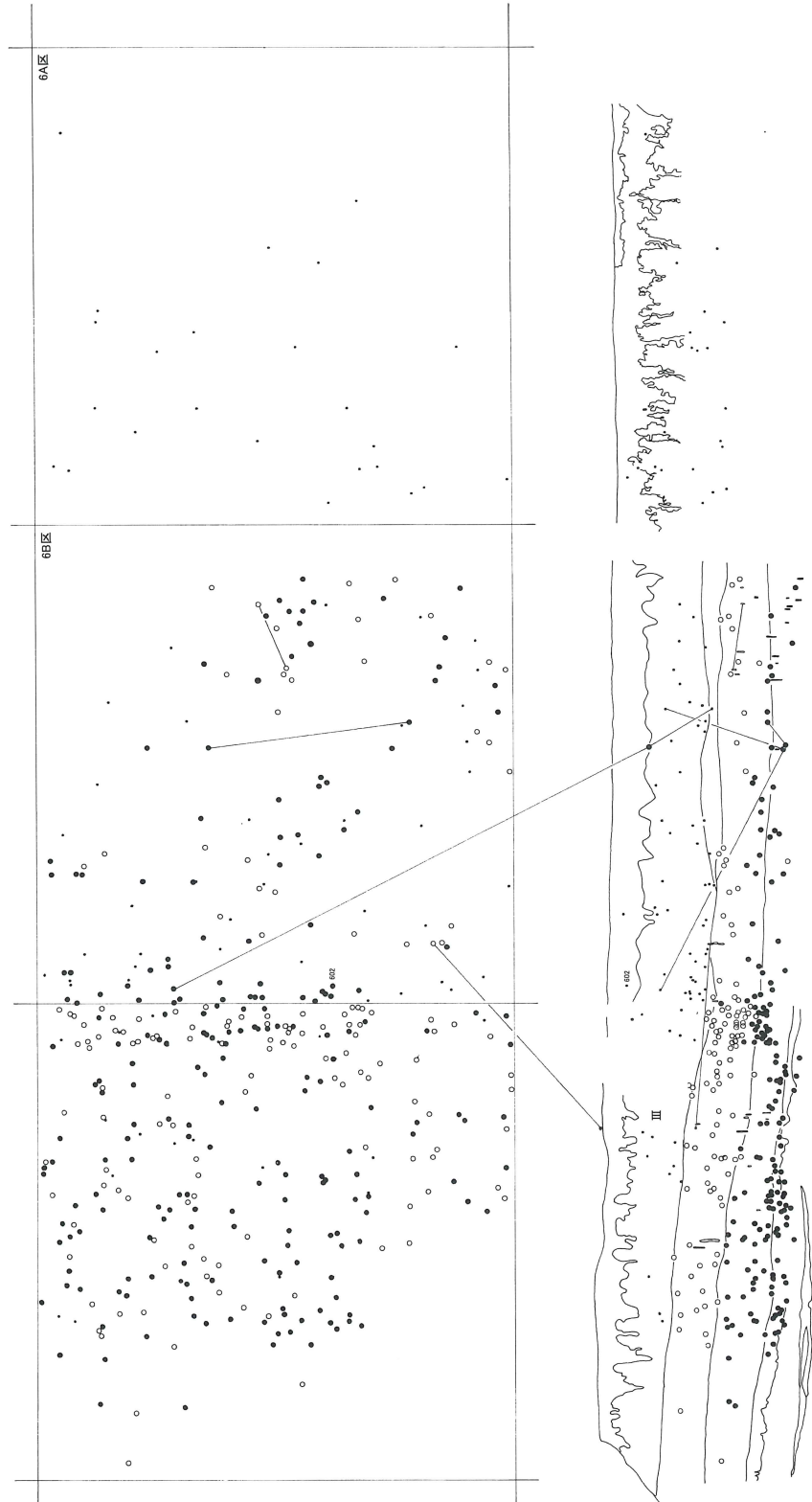
石器の分布状態

第137図に示すように、6区出土石器の分布状態は6B区に中心があるといえる。6A区には極端に少なく、6C区はある程度分布するが、6A区ほどではない。出土遺物はⅢ層のものを小さい点で、Ⅳ層を基本的に白丸で、Ⅴ層を黒丸で示した。断面見通し図には遺実測図を載せた遺物を中心に示した。断面見通し図にあるように4B区に集中する一群はⅣ層・Ⅴ層の二つの層に幅をもって接合する。しかし、Ⅴ層上部付近に集まるものも多くみられるので、Ⅴ層上部がもともとの生活面であったと思われる。

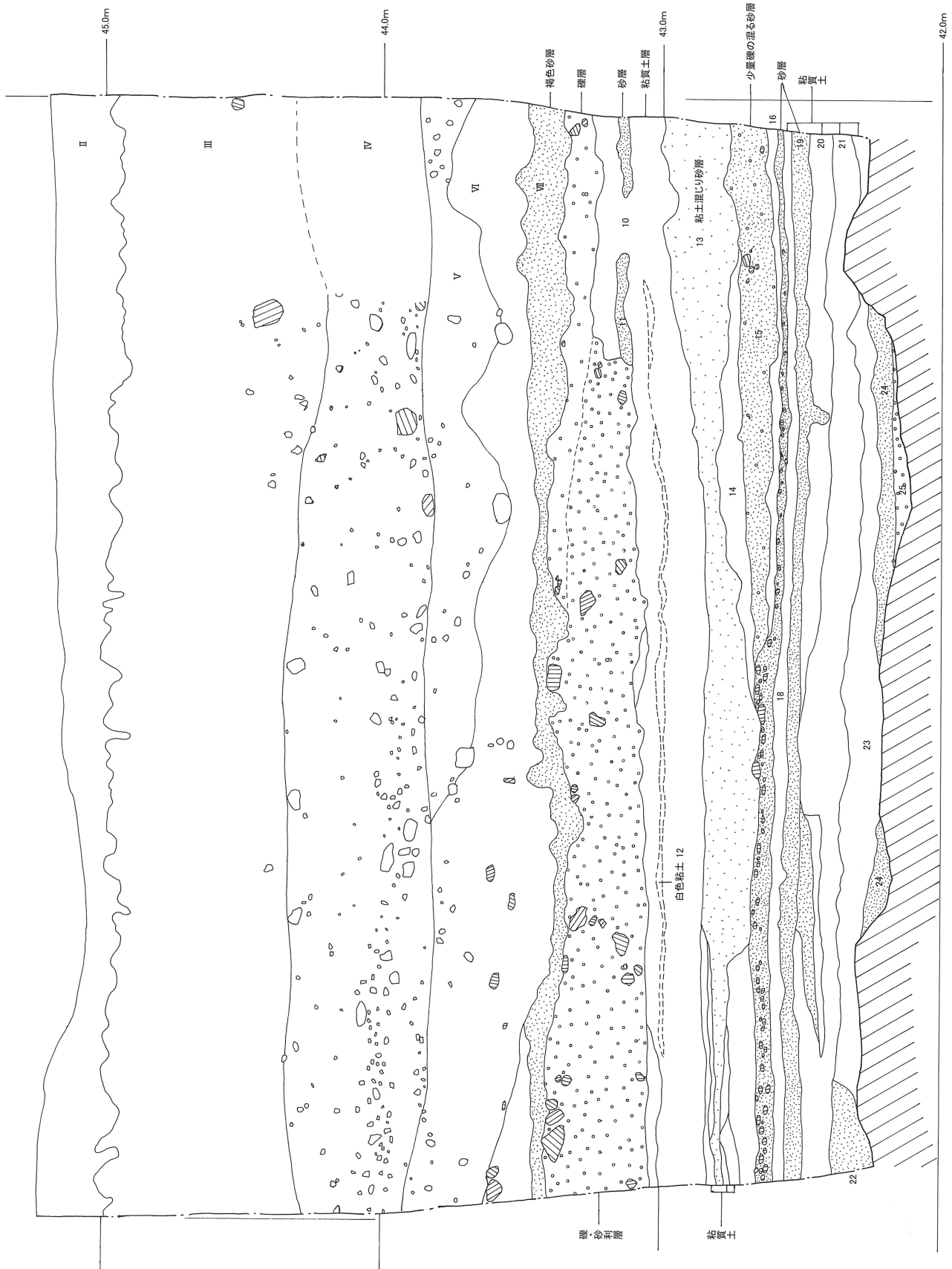
礫の分布状態

6区の礫は石器の分布状態とは異なり、6B区に多い傾向がある。石器と同様A区には少なく、B区にもある程度分布する（第138図）。

図では三層出土礫を小さい点で、四層出土礫を白丸で、Ⅴ層出土礫を黒丸で示した。C区では北壁層序図に投影して示した。C区ではⅢ層下面以下は東側に向かう傾向がある。投影図ではⅤ層の下位に重なる石器も少なからず見られる。



第138図 6区出土礫分布図



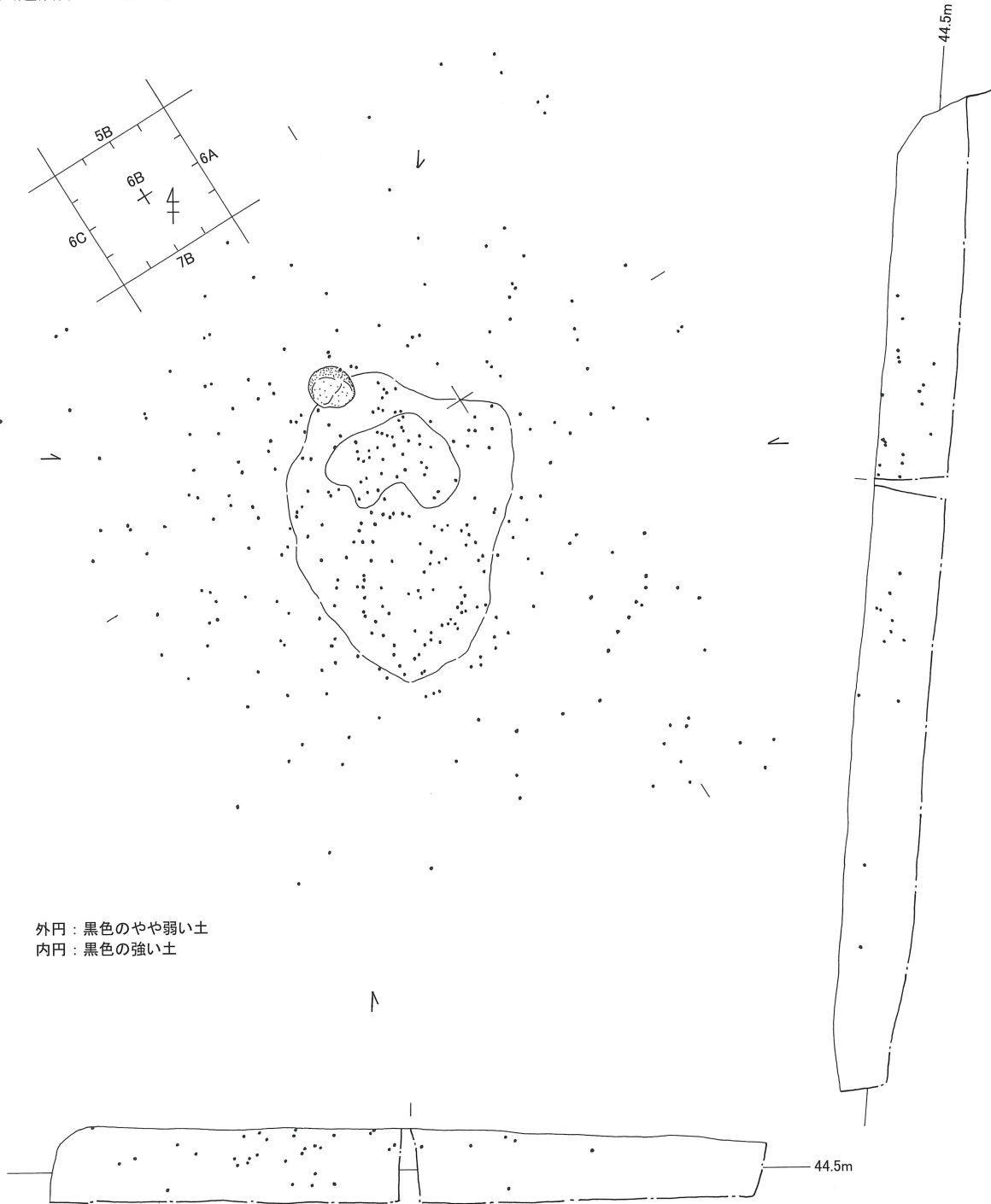
第 138-2 図 6C区東壁図

6C区東壁図を掲げ、この面だけの層番号をつけて説明する（第138-2図）。

1層は黒色土で共通層序にII層である。平均的の層厚は20cm以上ある。2層は共通層序のIII層で、層厚は60~70cmありほぼ均等に堆積する。塊状のパミスを含まない。

3層は塊状をなす黄色や青色等のパミスを多量に混入する層厚50cm前後の火山灰層である。共通層序ではIV層である。パミスの堆積状態は下半部に多い傾向がある。

4層はパミスの量は3層よりも少なく、5層よりも多いので区分した。あえて線引きすれば下面は波打つ。火山灰層である。5層はパミスがほとんど見られない火山灰層である。上面は4層と一直線で5層の下位には礫層・砂層があり、5層の下面は小さく波打つ状態である。4層と5層を合わせた層厚は40cm前後あり、4層と5層が共通層序のV層に該当する。



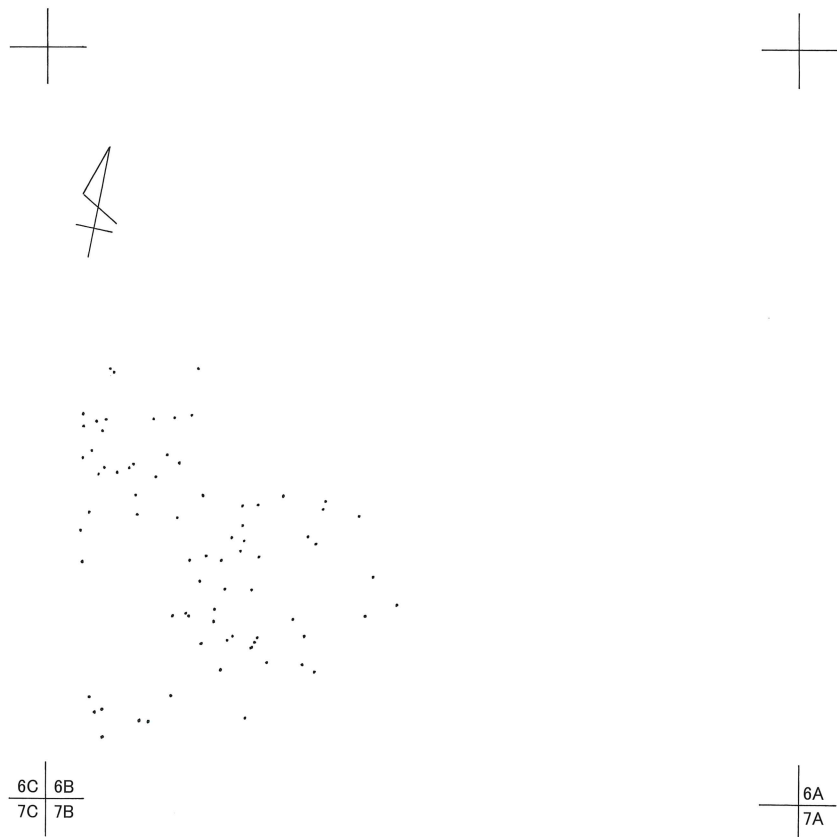
第 139 図 6B区III層炭化物分布図

6層は北部に少しだけ顔を見せる最大部分の層厚は20cmほどの礫層である。ある時点では全面を覆ったのかも知れないが、浸食されて部分的に残ったのであろう。7層は褐色の砂層で、津留遺跡全体に分布する層である。6C区では標高43.4m前後の高さに分布する。なお、同様の砂層は4C区では標高44.3~43.9m前後に分布しており、大野川に近いほど低いところに分布する。7層は上面・下面は波打ち、水流で運ばれてきたのが成因であろう。層厚は10cm前後である。7層は共通層序のVI層である。

場所によって微妙に堆積状態が異なるので8層以下は共通層序をつけていない。基本的に褐色系統の色調を示す。

8層・9層は小礫を混入する砂利層で、9層は礫の含有量が少ない。層厚は北部で約60cm、南部で約40cmである。南端では同じ高さで粘質土・砂層があり、すべて川の水が激しい時に残した堆積層であろう。10層は粘質土層で、11層の砂層や12層の白色粘土層を挟んだ状態で存在する。土色帳では10YR7/4。11層は7層に似た砂層、12層は白粘土層で土色帳では7.5YR8/2。13層は粘土混じりの砂層で、北端部では上下に粘質土が薄くあり、数枚の層が重複堆積する。7.5YR4/6。14層は北部と中央部に分布する粘質土層。7.5YR5/6。15層は礫が若干混じる砂層で東部に分布し、最大30cm。16層は14層に類似し、土色も同じ。17層は層厚10cm前後の小石混じりの砂層で、南部での層厚は約5cmと薄くなる。18層は14層・16層と同じ特徴の粘質土層である。19層は層厚10cm前後の砂層で、標高約42.5mに水平堆積する。20層(10YR4/6)・21層(10YR5/6)・23層(10YR5/6)は微妙に色調が異なる粘質土層である。それぞれの層厚は15~30cm程度である。22層は北部に少しある砂層。24層は10YR4/4、層厚約10cmの砂層で、窪地に堆積する状態である。25層は東部の窪地にある砂利層。最下層は大野川層群の岩盤である。標高43.2mから43.7mまでに凹凸をもって現れる。ある時期の大野川の川底である。

以上を言い換えれば1層から5層までが火山灰層、それ以下は大野川の水が運んできた堆積物である。火山灰層は全ての調査区に分布するが、水流堆積層は場所ごとに状態場ばらばらである。6区では最下部の石器は6B区でVI層から出土している。



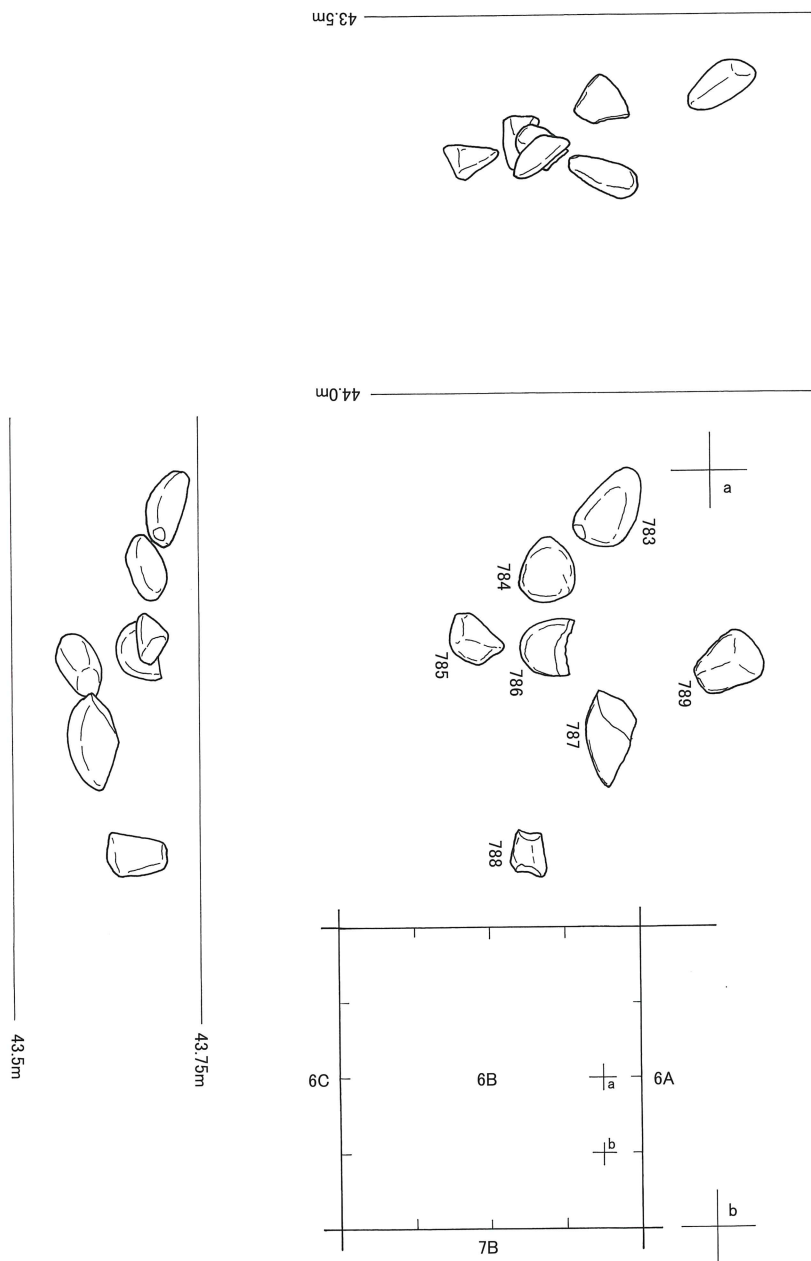
第140図 6B区IV層上面の炭化物分布状態

炭化物・変色域

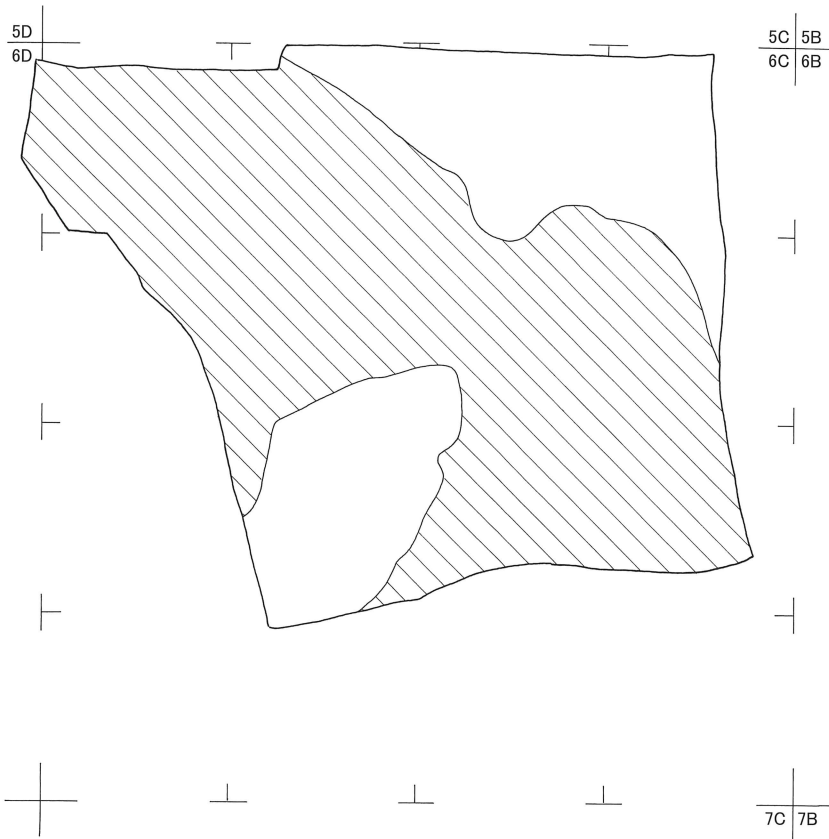
6区では直径1～2mm程度の炭化物が面的に分布する状態がⅢ層とⅣ層上部にみられた。平面的にはこの二つの分布域は重複しないので、別物である。石器・礫の濃密分布とも重なるので、この場所で火を使った痕跡だと思われる。

第139図は6B区Ⅲ層で検出した炭化物の一面における平面分布とその部分を十字に切った土層図、土層が黒く変色した範囲の1/20平面図である。外側の輪郭は黒色のやや弱い土層の分布、内側の枠内はその黒色が強い範囲である。変色域は0.9m×0.8m程度の広がりをもち、その部分に重複するように炭化物が分布する。断ち割りを行ったが土坑を見つけることはできなかった。

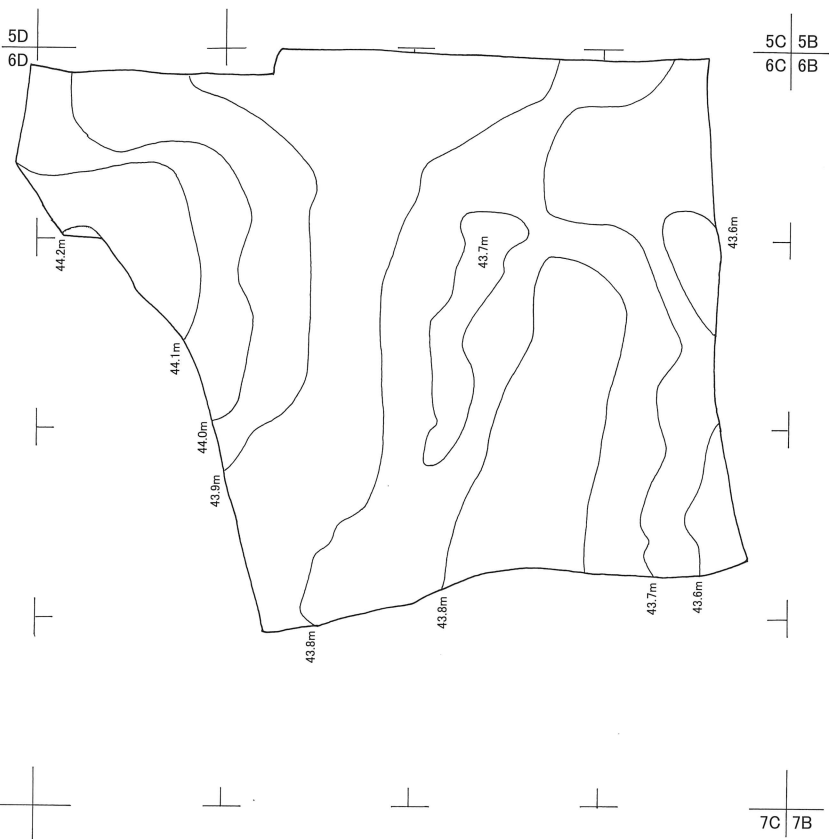
第140図は6B区のⅣ層上面南西部に分布した炭化物の状態である。



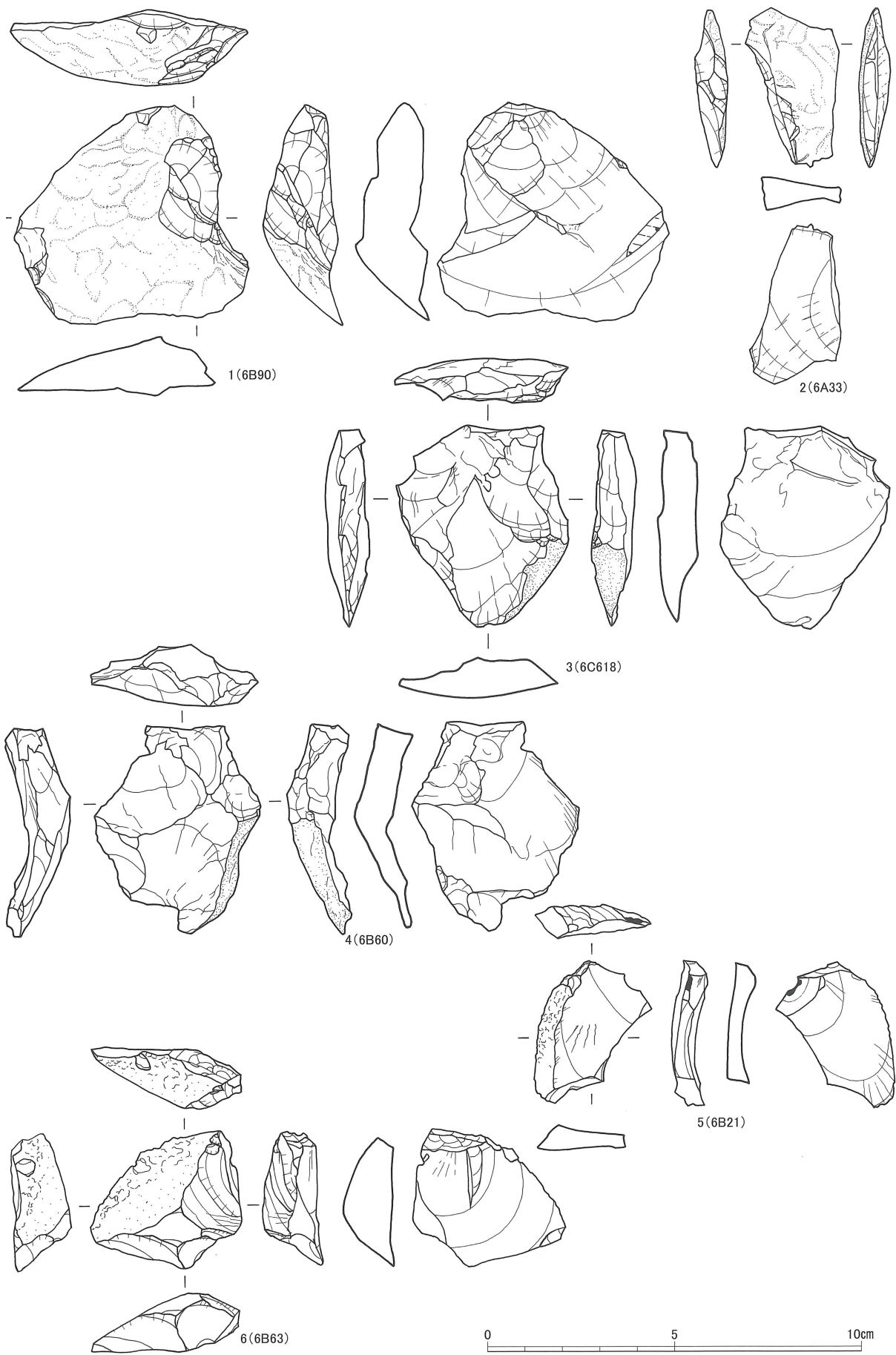
第141図 6B区Ⅳ層の礫群



第141-2図上は6C区のⅦ層の平面的な分布状態を斜線で示した。調査区自体が4m包含の全体ではないので歪な形をしているが、Ⅶ層は掘り下げた全域には分布せず北西から南東に向かって存在した。Ⅶ層を掘り上げ、Ⅷ層の上面を出した状態で等高線を入れたのが第141-2図下である。北西部が高く標高44.2mあり、中央やや東の部分に南北方向に溝状にくぼんでいる。底面の標高は43.7mである。また、その東側の壁際も周りよりも低くなっており底面はさらに10cm低い標高43.6mである。



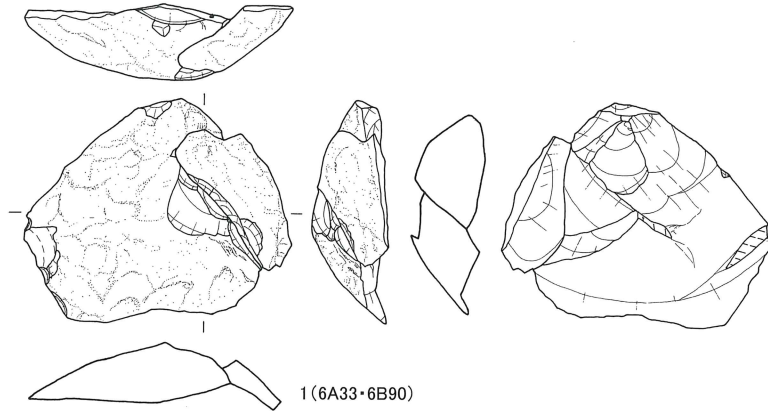
第 141-2 図 6C区Ⅶ層・Ⅷ層の状態



第 142 图 6B区Ⅲ層出土接合資料

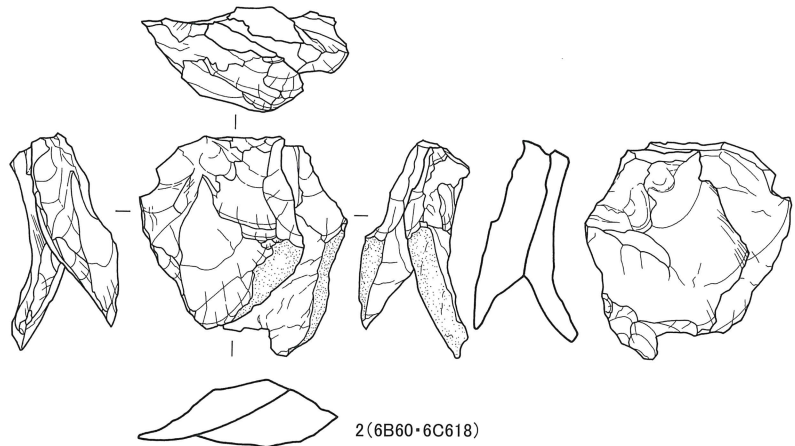
礫群

第141図は6B区の南西部において標高43.7m前後で検出した礫のまとまりである。長さ10cm前後の円礫5個・叩き石1個・石核1個からなる。円礫は3個（6B783・6B787・6B786）が割れた状態で、他の礫と接合はできなかった。図右側の6B789は叩き石である（第214図2）。また、図左下の6B788は流紋岩製の石核である（第144図1）。

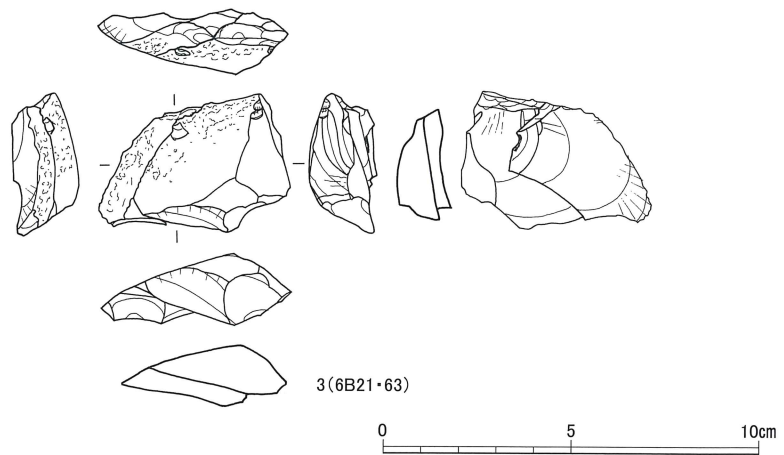


16区出土石器

第142図1（6B90）・2（6A33）は接合する剥片である。第143図1に接合状態を示すように、2が先に剥離され、その後段階を経て1が剥離されている。1は6B区の南東部に出土し、2は6A区の南西部に出土した。相互の距離は1.62m、どちらもⅢ層に包含されていた。

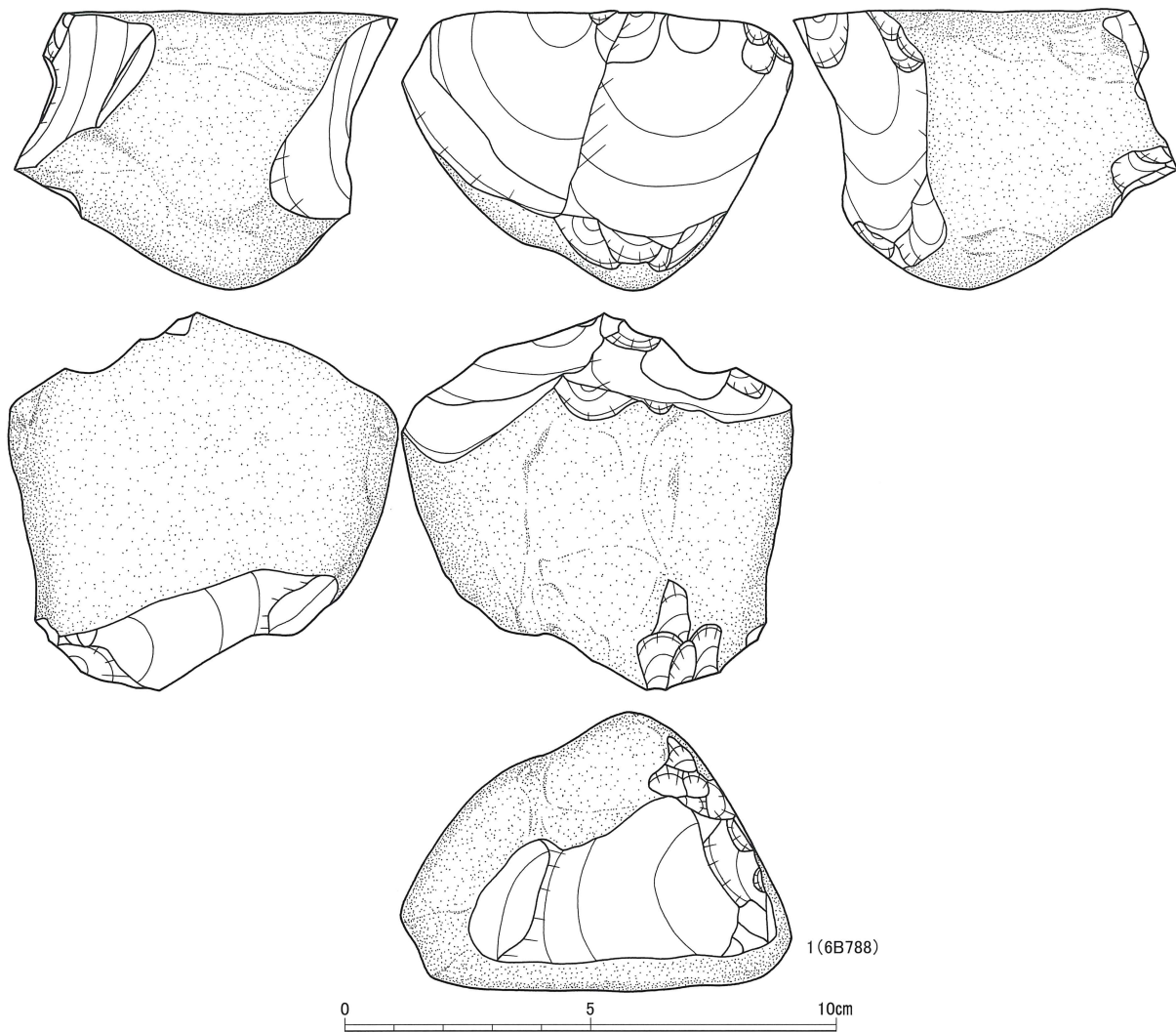


第142図3（6C618）・4（6B60）もⅢ層出土の接合する剥片である。3は6C区の南東部から、4は6B区の南部中央寄りに出土し、相互の距離は2.3mである。自然面を残す刷毛片で、第143図2のように3が先に剥離され、逆方向からの剥離の後、4が3と共通の打面から剥離されている。ふたつは共通の打撃面をもつ。



第143図 6B区他Ⅲ層出土石器接合図

第142図5（6B21）・6（6B63）は6B区のⅢ層から出土し、第143図3のように接合する。6は6B区の中心部に位置し、5は北東2.0mにあった。5の方が50cm高い場所から出土している。第143図3のように6の剥離が先行する。5は長さ3.3cm・幅2.2cm・厚さ0.6cm・重さ8.7gである。6は長さ3.5cm・幅3.7cm・厚さ1.4cm・重さ19.4gである。



第144図 6B区IV層出土石器

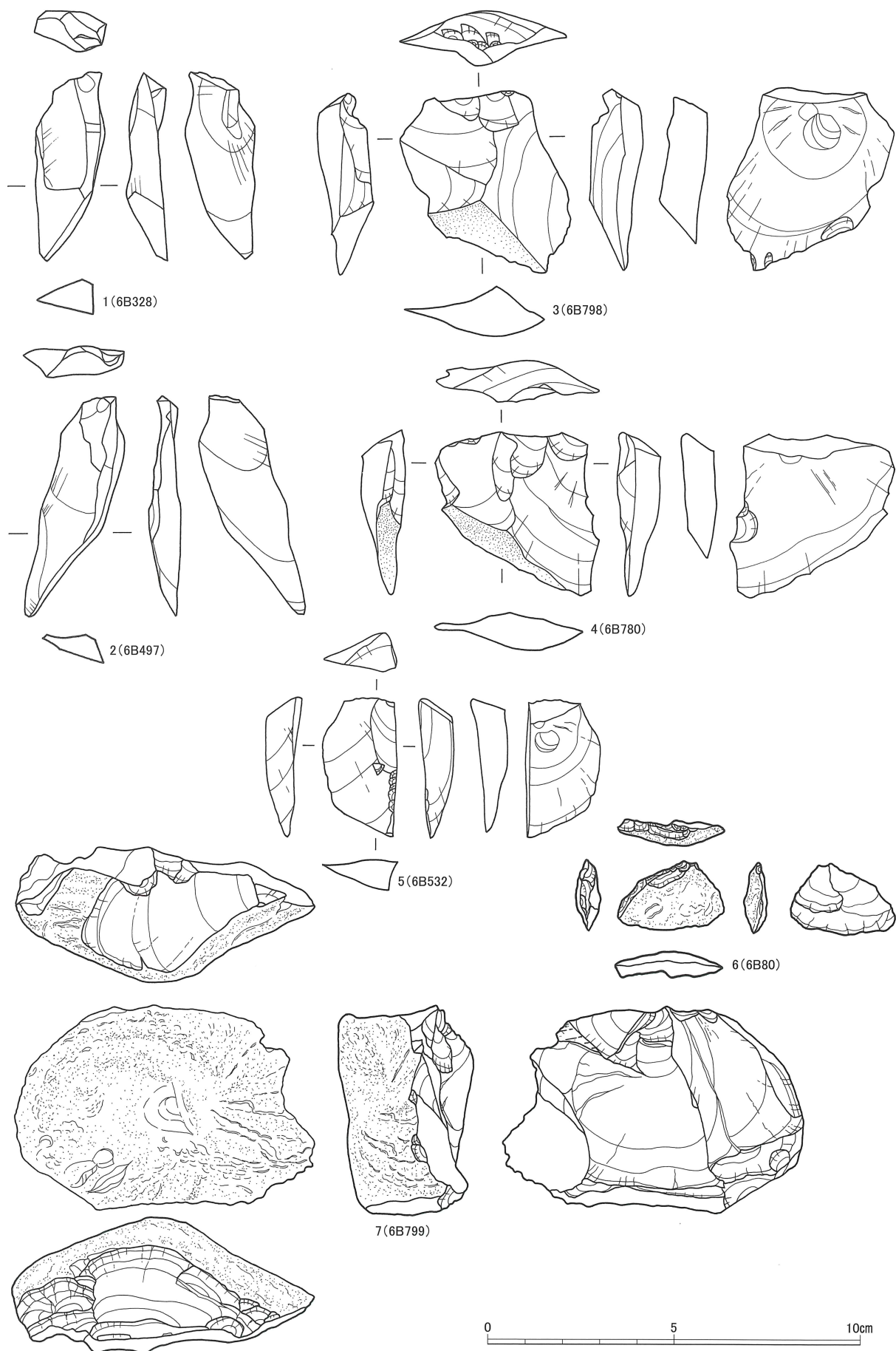
第144図1(6B788)は6B区の東部中央付近の標高43.622mV層から出土した石核である。円礫の平坦な自然面を打面とし、少なくとも2面剥離している。別に直交する面で数回剥離が行われている。長さ5.6cm・幅7.9cm・厚さ5.6cm・重さ343.8gである。

第145図1(6B328)・2(6B497)は6B区南西部に約40cm離れて出土し接合する剥片である。包含層内の上下差は約20cmある。1はIV層、2はV層出土である。1は長さ5.0cm・幅1.9cm・厚さ1.1cm・重さ6.4g。2は長さ5.8cm・幅1.7cm・厚さ0.9cm・重さ7.5g。第146図2のように1・2は打撃面を共有する。

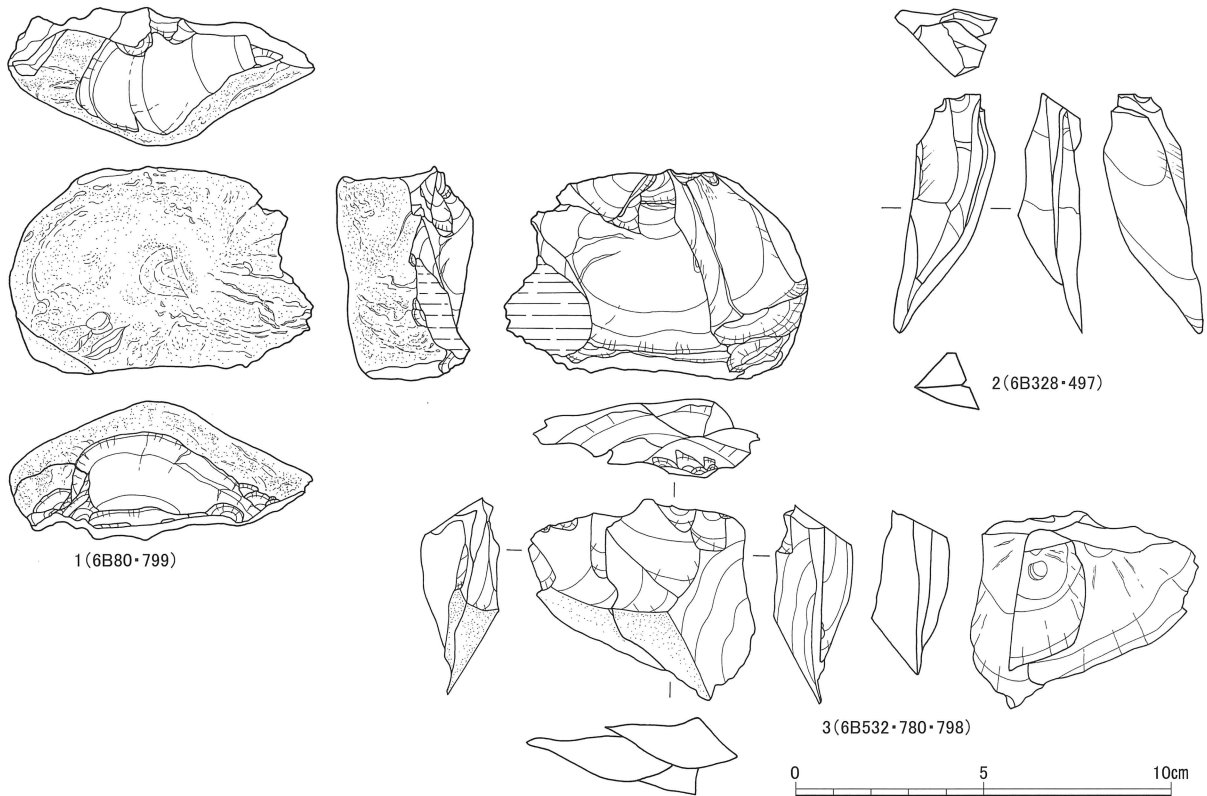
第145図3(6B798)・4(6B780)・5(6B532)は6B区のV層から出土し、接合する剥片である。6B区の南東部で40cm以内の範囲に分布した。それぞれの標高は3が43.620m、4が43.733m、5が43.907mである。剥離順序は3→4→5である(第146図3)。

第145図6(6B80)・7(6B799)は第146図1のように接合する。6B区の南東部に84cm離れて出土した。6は自然面をもつ小さい剥片。石核である7の打面調整のために7の左下図の左端に接合する。6は長さ1.8cm・幅2.8cm・厚さ0.6cm・重さ3.5g。

7は長さ5.4cm・幅8.0cm・厚さ3.6cm・重さ176.5g。



第 145 图 6B区IV層出土接合資料



第146図 6B区IV層出土接合資料

第147図は第148～150図に示すIV層出土遺物の接合状態で、本来の素材となった円礫の規模が推定できる程度に接合した。接合状態の規模は縦10.6cm・横10.4cm・厚さ5.1cm・重さ599.5gである。厚みのそれほどない扁平な円礫を素材としている。第147図の各図をA～Iとして説明する。I図はC図から第148図2・5・6を外した状態の図である。この状態では同一の面を打撃面とした剥片打面が6個残る。I図の上から第148図1→第148図3→第149図4→第150図1第149図2→第150図3である。これは剥離順序ではない。全体の一連の作業では不定形の剥片が生産されており、同じ方向の剥離面が並ぶような縦長剥片はみられない。

第148図1～8の個別資料は次のとおりである。

- 1は長さcm・幅cm・厚さcm・重さg。
- 2は長さ4.9cm・幅5.1cm・厚さ2.2cm・重さ51.5g。
- 3は長さ5.0cm・幅4.9cm・厚さ1.1cm・重さ21.3g。
- 4は長さ3.6cm・幅2.7cm・厚さ0.9cm・重さ9.4g。
- 5は長さ3.9cm・幅2.3cm・厚さ1.0cm・重さ10.5g。
- 6は長さ3.5cm・幅4.1cm・厚さ1.1cm・重さ14.0g。
- 7は片面すべてが節理面で、長さ33cm・幅3.0cm・厚さ1.2cm・重さ8.3g。
- 8は石核である。長さ6.2cm・幅5.9cm・厚さ2.5cm・重さ93.1g。

第149図1～4は次のとおり。

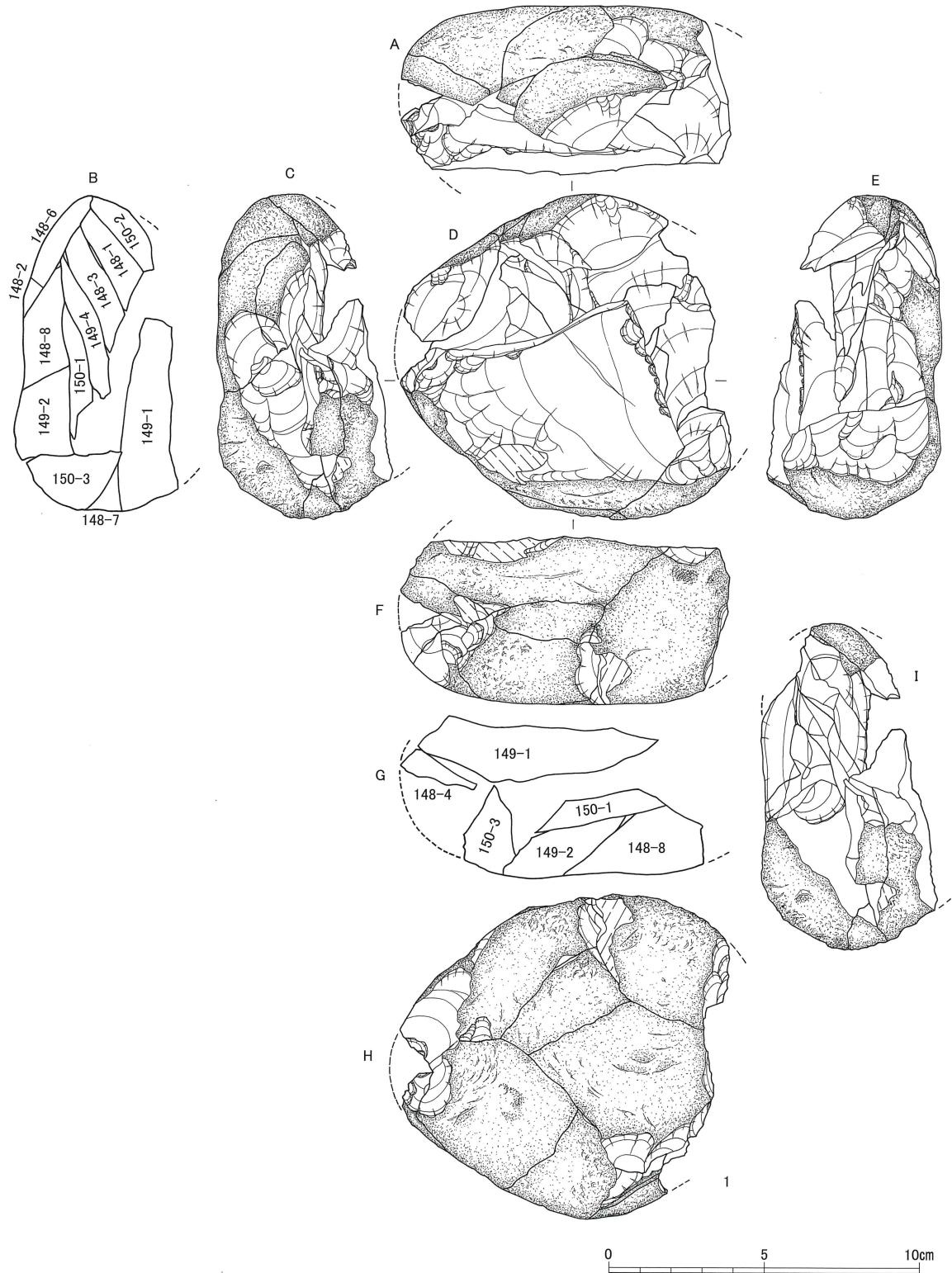
- 1は長さ7.7cm・横7.4cm・厚さ2.2cm・重さ126.4g。主要剥離面は一見、同時に剥離したものである。二面だが一側辺に使用痕の刃こぼれが並んでいる。
- 2は長さ5.5cm・幅4.0cm・厚さ2.5cm・重さ34.1g。
- 3は長さ6.0cm・幅5.1cm・厚さ2.3cm・重さ76.8g。

4は長さ5.4cm・幅4.2cm・厚さ1.0cm・重さ21.6g。

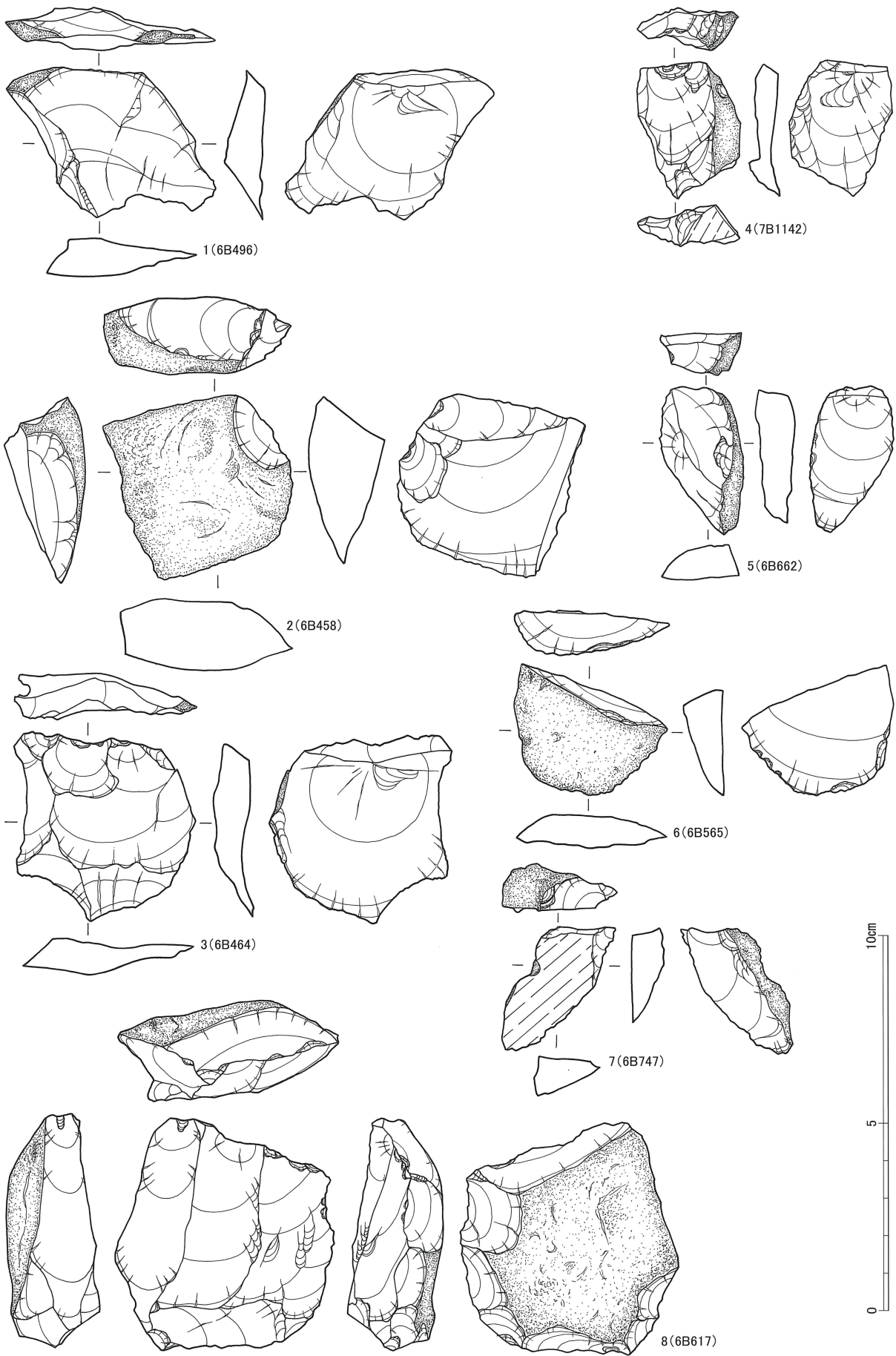
第150図 1～3は次のとおり。1は長さ6.3cm・幅4.4cm・厚さ1.1cm・重さ25.8g。

2は長さ3.8cm・幅4.9cm・厚さ1.3cm・重さ21.4g。

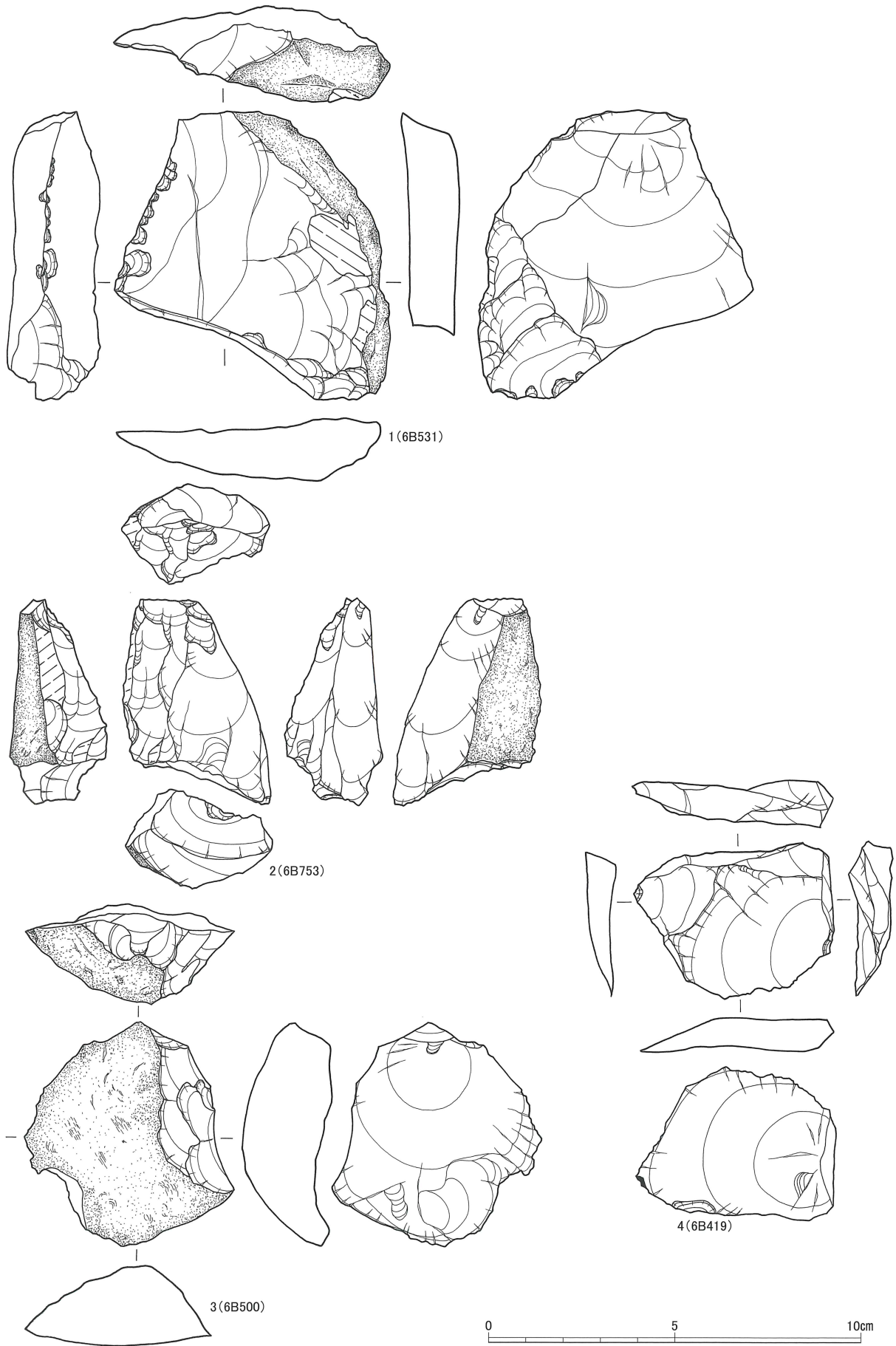
3は長さ5.8cm・幅4.4cm・厚さ2.8cm・重さ58.9g。



第 147 図 6B区IV層出土石器接合図

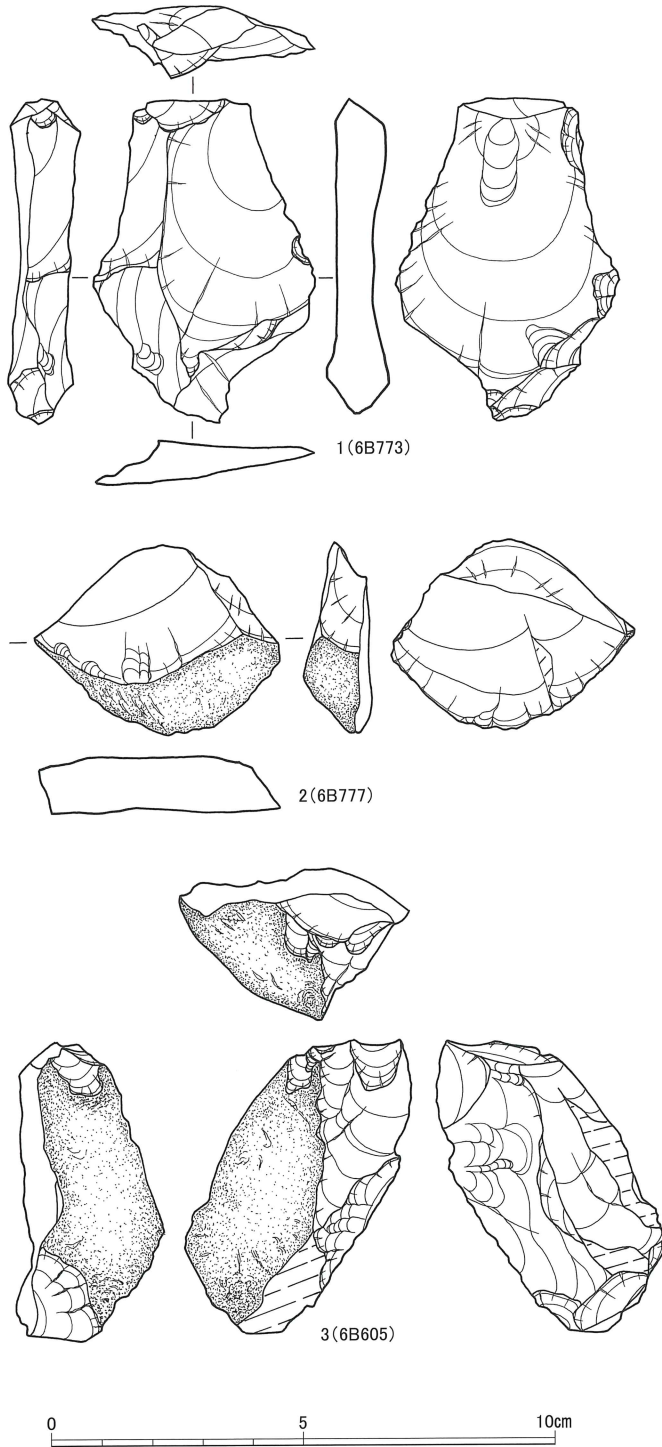


第 148 图 6B区IV層出土接合資料

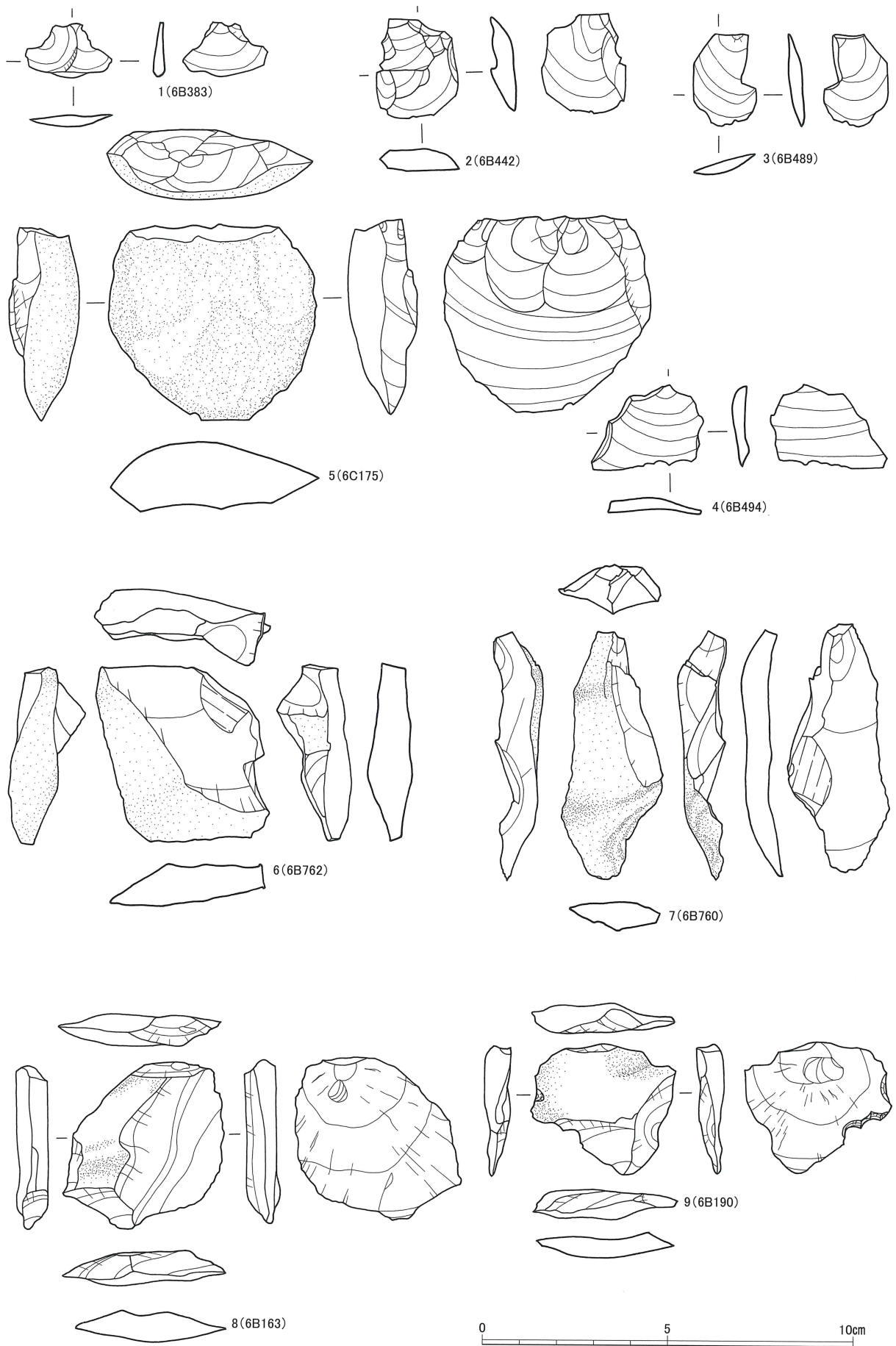


第 149 图 6B区IV層出土接合資料

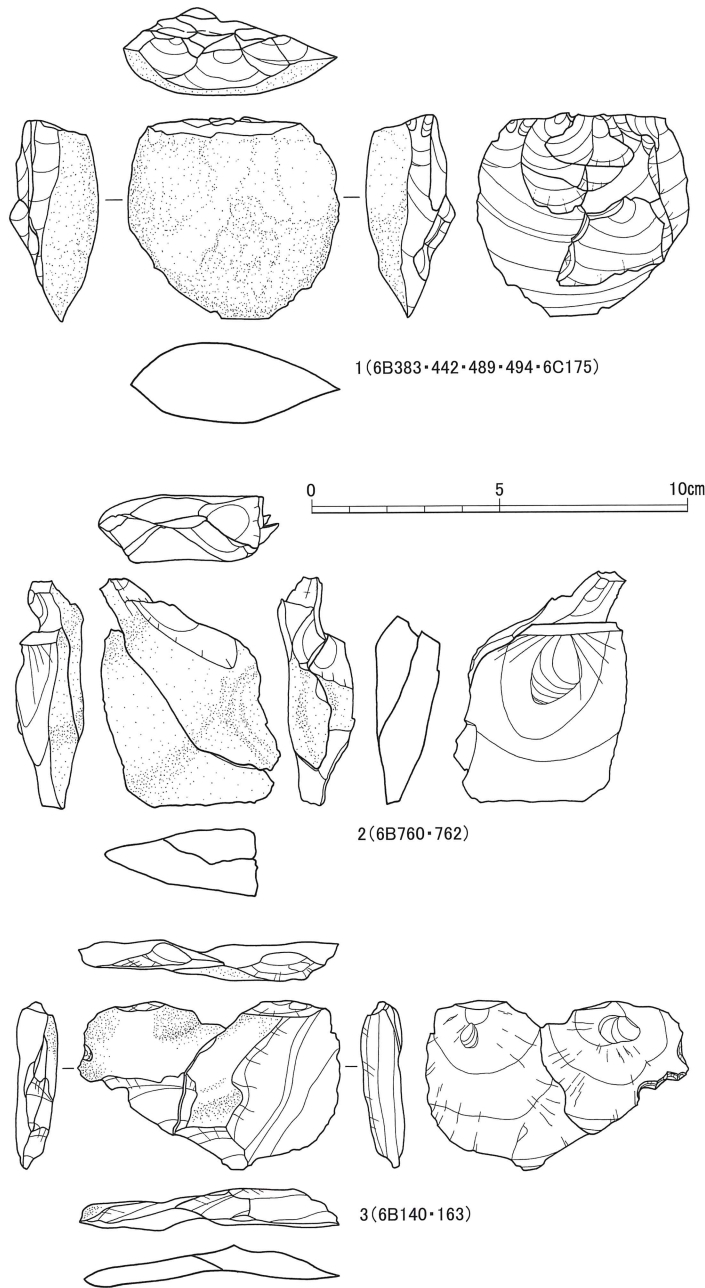
第151図 8・9は6B区Ⅲb層から出土した剥片である。8は長さ4.4cm・幅4.4cm・厚さ0.9cm・重さ16.4gである。9は長さ3.5cm・幅3.9cm・厚さ0.8cm・重さ8.5gである。



第150図 6B区Ⅳ層出土接合資料



第 151 图 6B区IV層出土接合資料



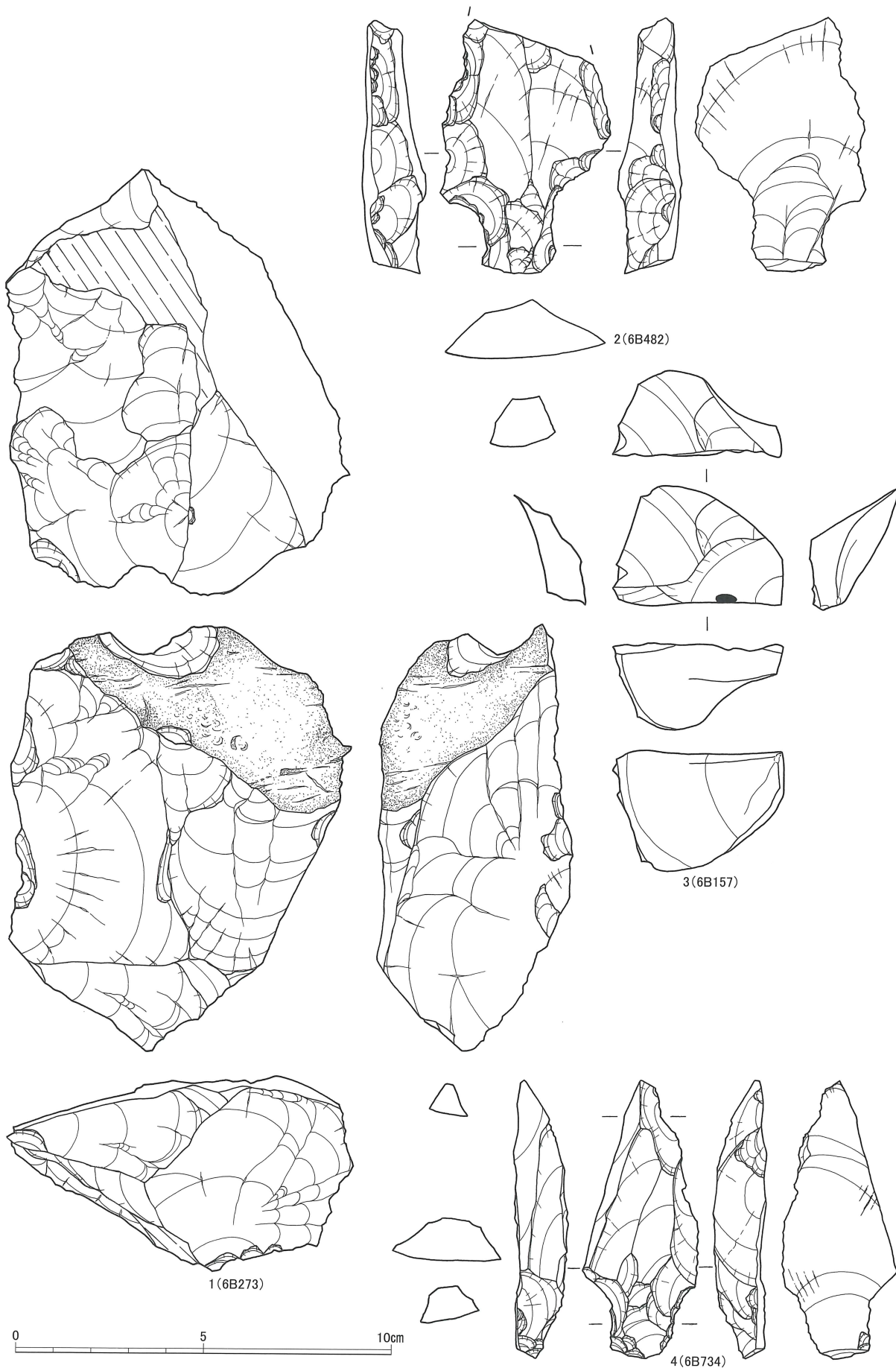
第 152 図 6B区IV層出土石器接合図

第153図 1 は石核である。長さ9.2 cm・幅11.3cm・厚さ5.2cm・重さ460.0 gである。

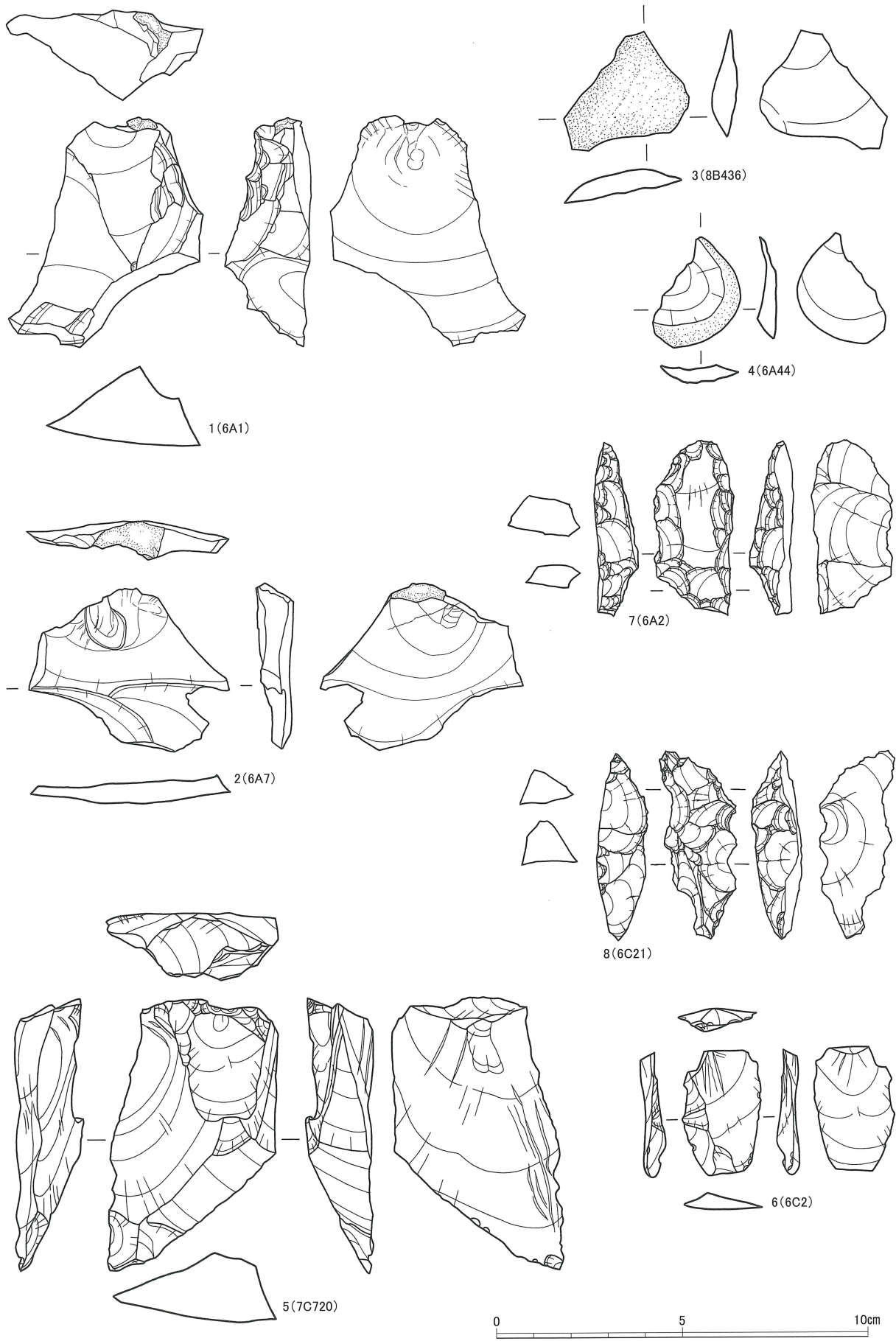
第153図 2 は先端側を欠く剥片尖頭器である。素材の打撃部分を残し、茎部の両側と両側辺も主要剥離面側から二次加工している。長さ6.7cm・幅4.6cm・厚さ1.7cm・重さ43.6 gである。

第153図 3 は6B区Ⅲ層から出土した剥片である。長さ4.5cm・幅3.1cm・厚さ1 cm・重さ19.4 g。

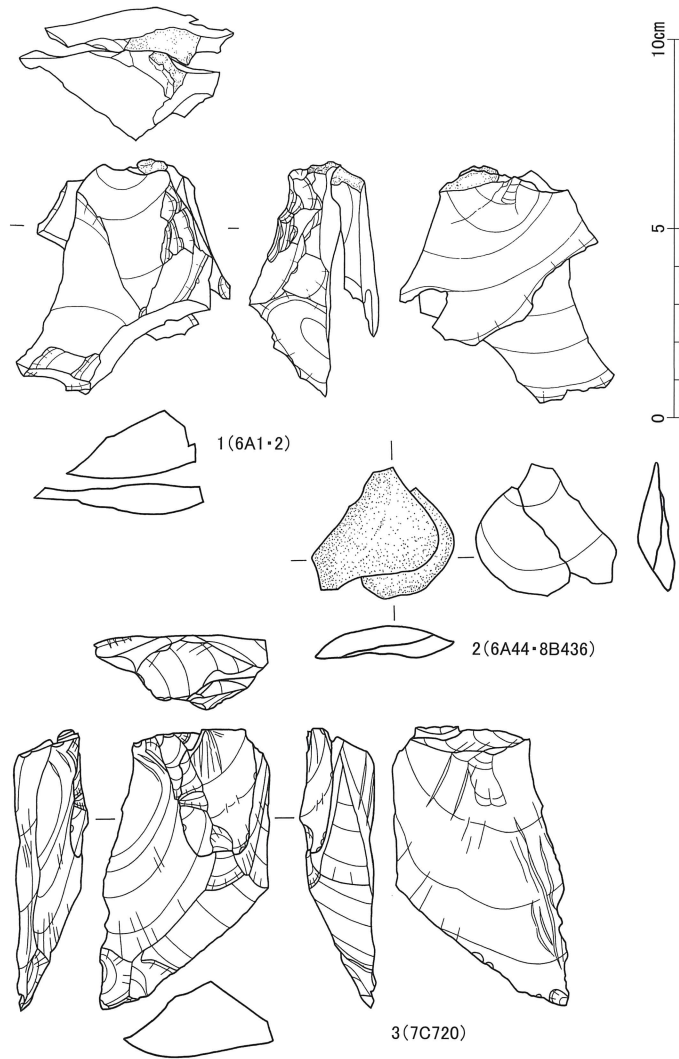
第153図 4 は長さ7.4cm・幅3.1cm・厚さ1.4cm・重さ28.5 gの剥片尖頭器である。素材の剥片基部を尖頭器の基部とし、その両側に二次加工して細く整形している。先端に近い一側辺に少しだけ二次加工を加えている。



第 153 图 6B区IV層出土石器



第 154 图 6A·CB区他Ⅲ層出土接合資料



第 155 図 6A・CB区他Ⅲ層出土接合資料

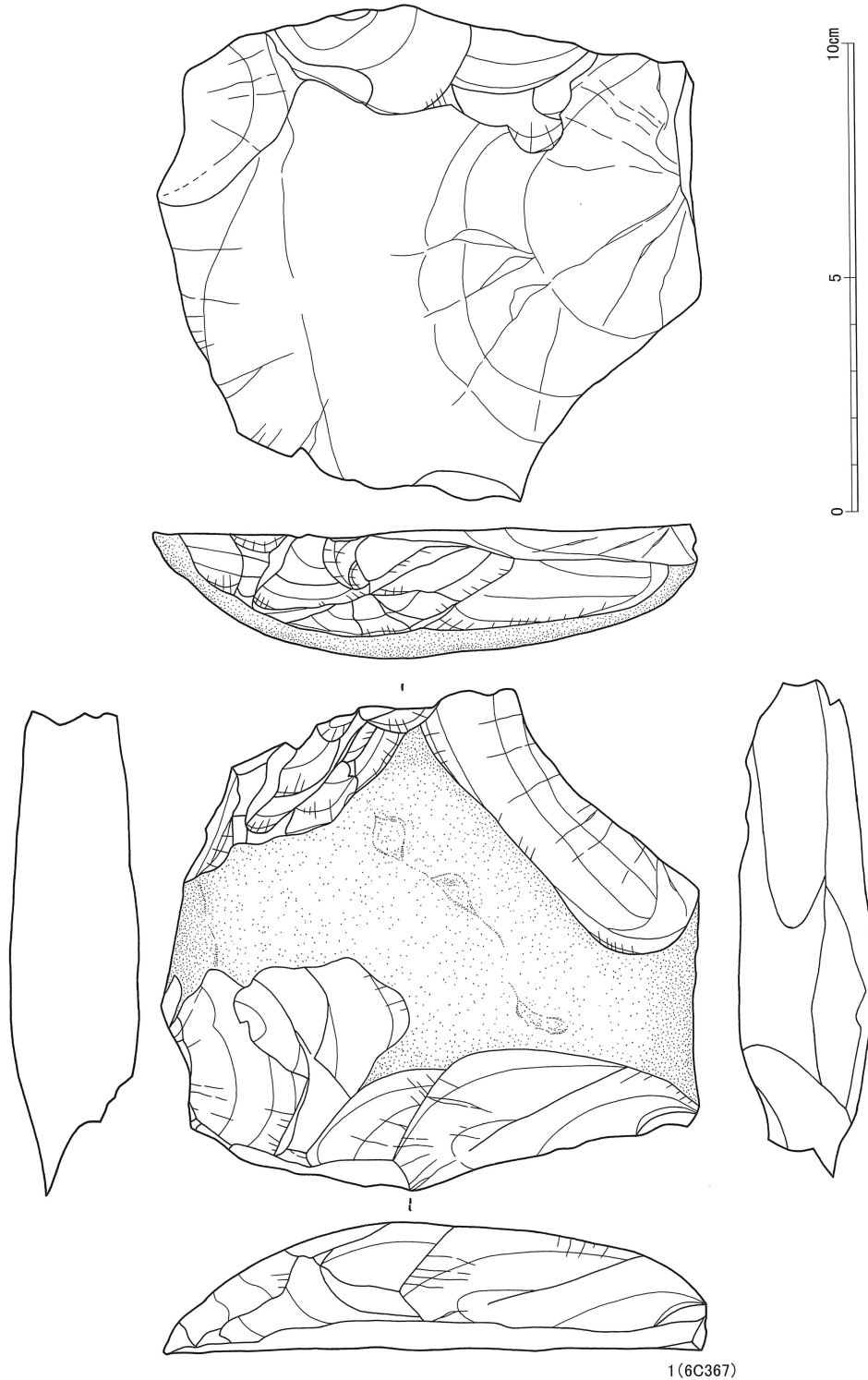
第154図1・2は6A区Ⅱ層から出土した接合する剥片である。1→□→2の順に同じ方向から自然面を打点として順次剥離作業を行っている。1は長さ6.1cm・幅5.2cm・厚さ2.5cm・重さ40.9gである。2は長さ4.4cm・幅5.5cm・厚さ1.0cm・重さ15.2gである。

第154図5・6は第155図3のように接合し、打撃面を共有する。5は7C区のⅢ層から、6は6C区のⅡ層から出土した。5は長さ7.5cm・幅4.6cm・厚さ1.7cm・重さ53.0gである。6は長さ0.4cm・重さ0.04gである。

第154図7は縦長の剥片を素材とし、二次加工は背面全体には及んでいない。小型の三稜尖頭器を目指したものである。長さ4.7cm・幅2.2cm・厚さ1.2cm・重さ11.5gである。

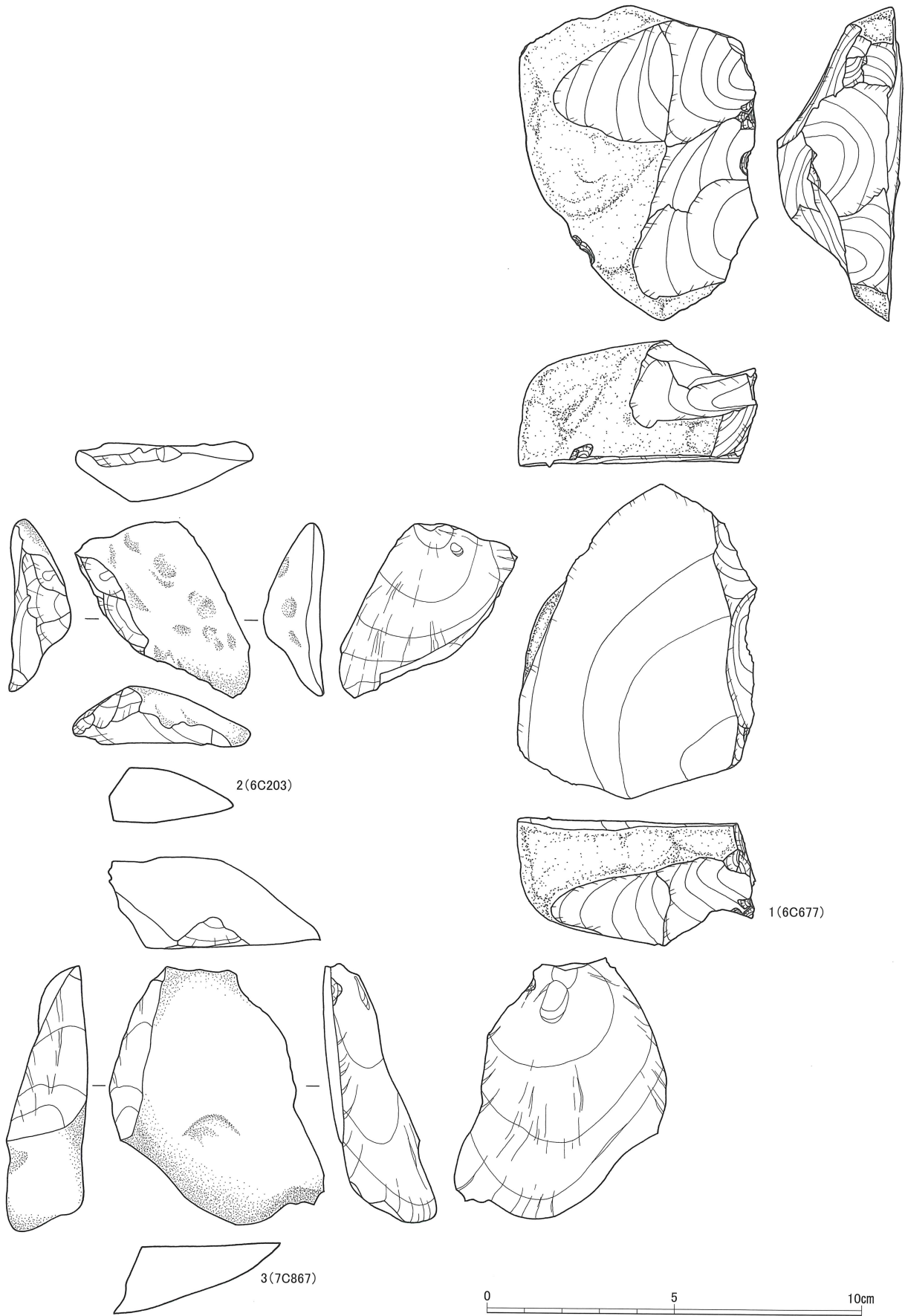
第154図8は三稜尖頭器だが未成品である。横長の剥片を素材としている。主要剥離面側からの二次加工で整形するだけである。長さ5.0cm・幅2.1cm・厚さ1.4cm・重さ05.gである。

第157図1は片面に自然面をもつ剥片に二次加工した石器で、礫器として使われたとみられる。長さ11.6cm・幅10.7cm・厚さ2.7cm・重さ410.4gである。

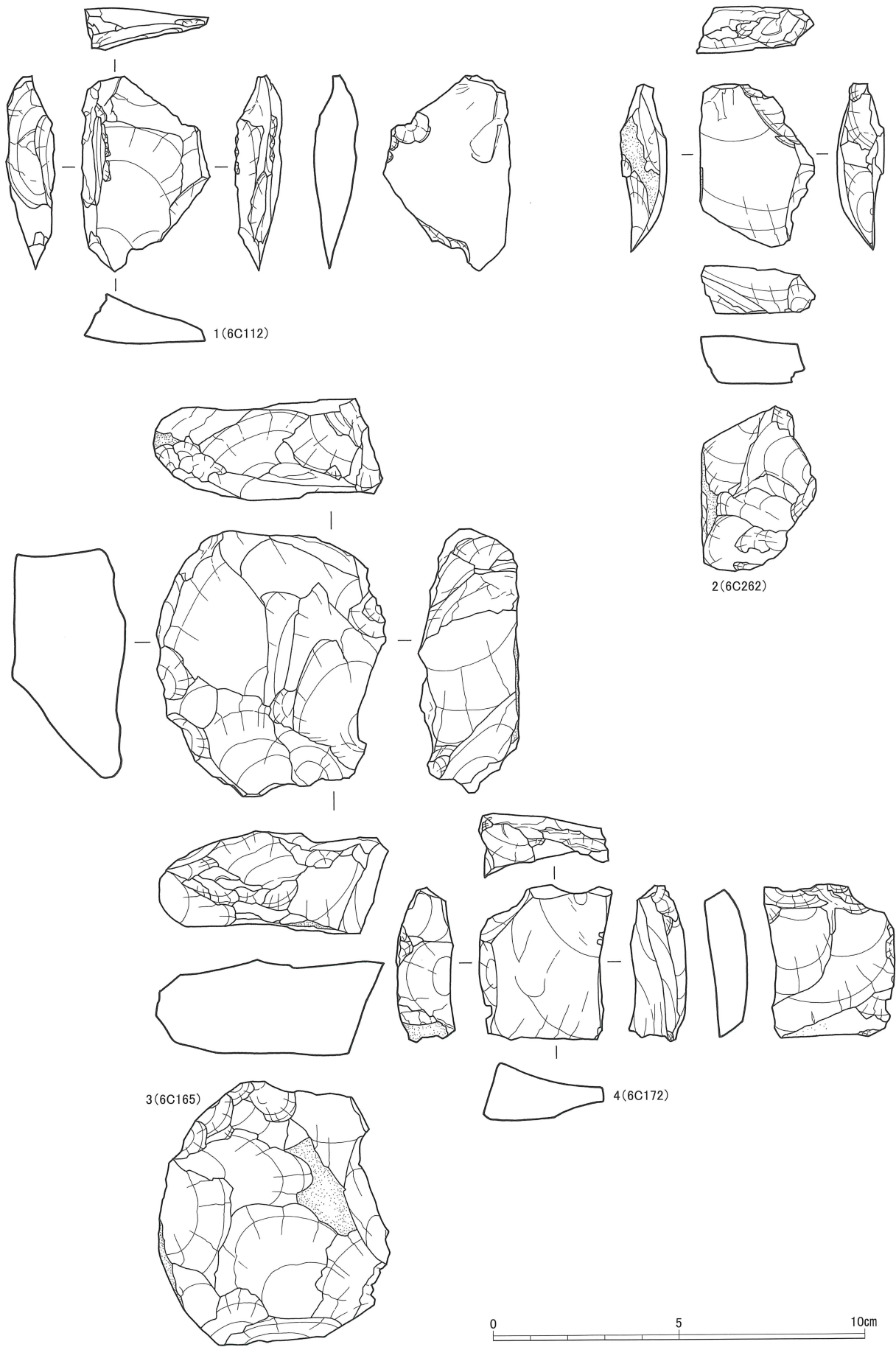


第 157 図 6C区IV層出土石器

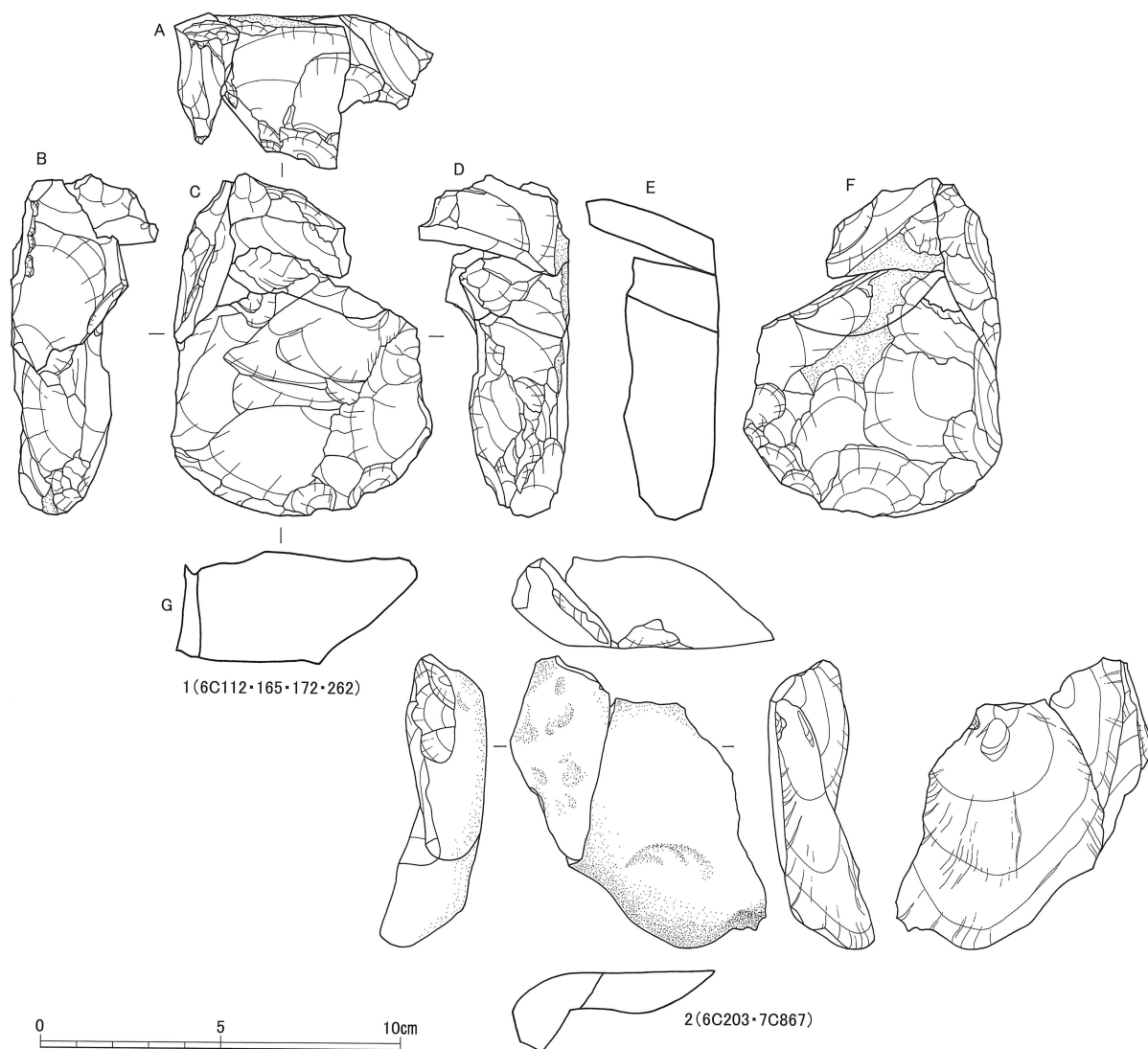
第158図2・3は接合する剥片で、2は6C区IV層から、3は7C区のIV層から出土した。その接合状態を第152図2に示す。二つの剥離順序はまず2が、次に3が同じ方向から剥離されている。2は長さ4.6cm・幅4.8cm・厚さ1.4cm・重さ26.8g。3は長さ6.9cm・幅5.8cm・厚さ1.6cm・重さ65.0g。



第 158 图 6C·7C区IV層出土接合資料他



第 159 图 6C·7C区IV層出土接合資料他



第 159-2 図 6C区他IV層出土石器接合図

第159図 1は6C区のIV層から出土した石核である。片面に自然面を残す剥片を石核として使用しており、打面調整をおこなっている。長さ6.4cm・幅8.3cm・厚さ3.2cm・重さ181.0gである。

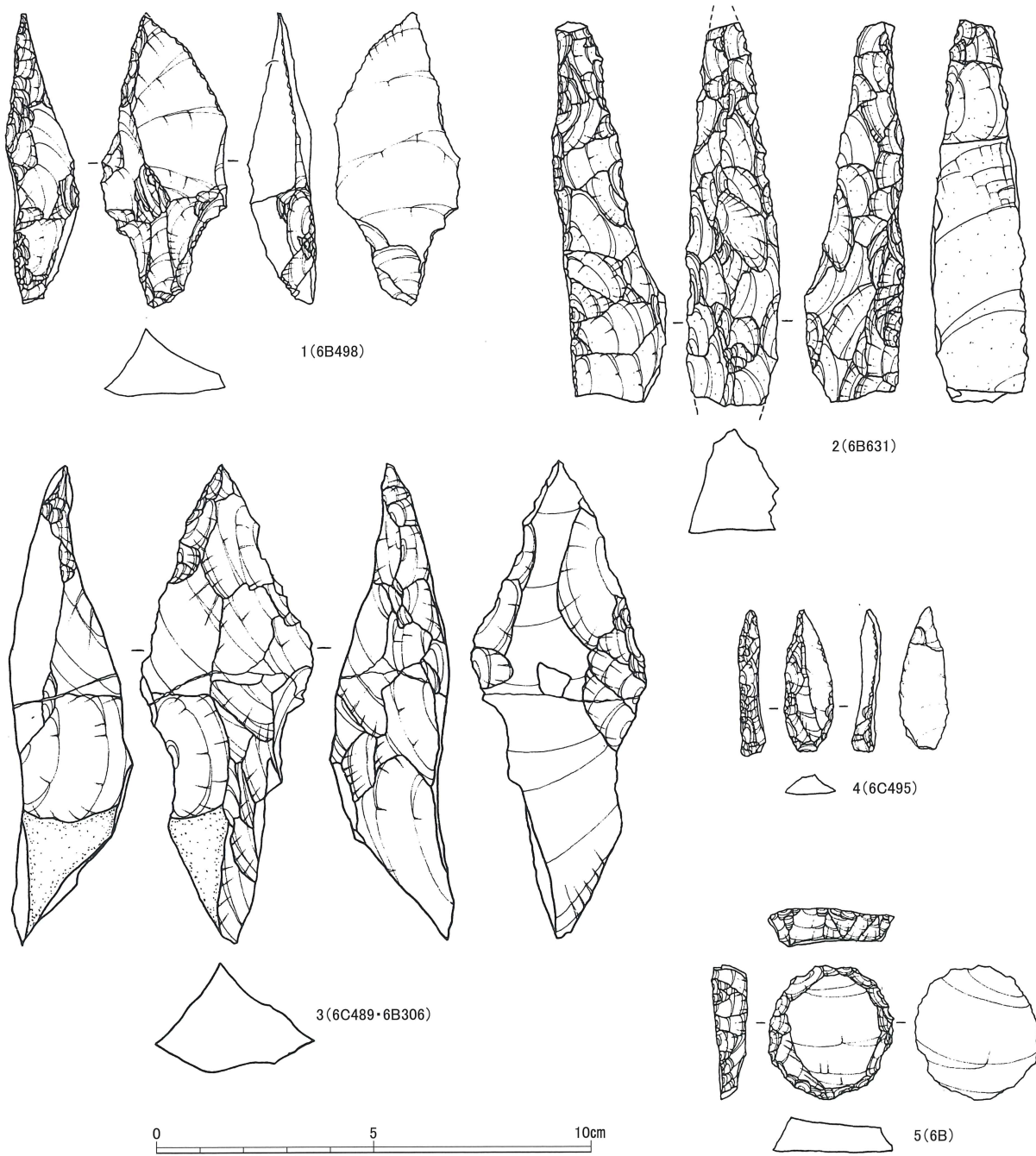
6区から出土した石器のうち、実測図を示していない接合例に以下のものがある。

○6B235・6B366・6B477・6B790のうち、Ⅲ層出土は6B235で、IV層出土が6B366、他の2点はV層から出土している。

○6B674・6B677・6B681・6B751・6B763があり、IV層・V層から出土した。

○6B175・6B383・6B489・6B494は6B175がⅢ層出土、6B383がIV層出土、他の2点はV層出土である。

○6C253・6C310・7B712・8B122



第 159-3 图 6B·C区IV層出土石器

7区の調査

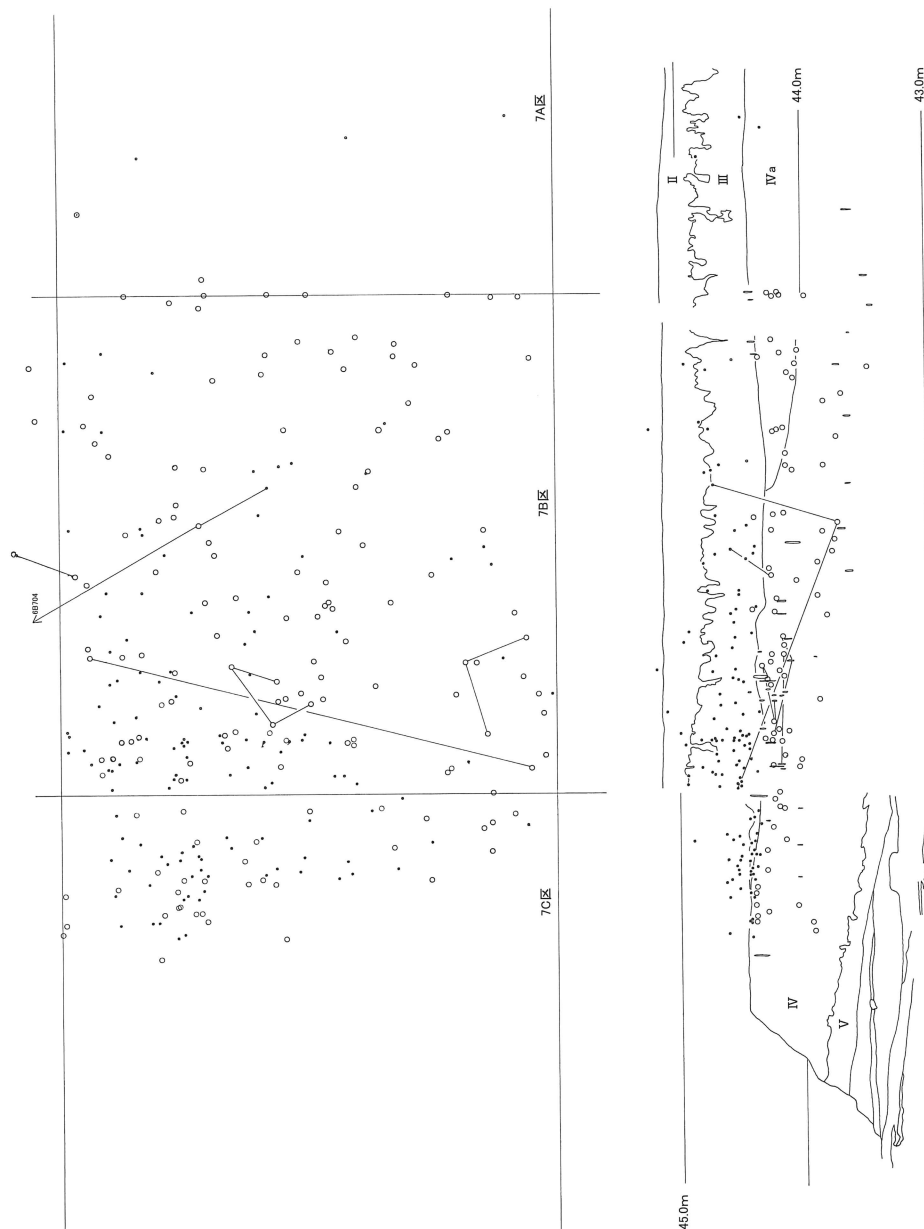
7区はA区の東端少しとC区の半分以上西半分以上が調査区外である。

石器の分布状態

7区の石器はA区にはほとんど見られず、B区中部からC区東部に偏っている。接合する石器を結んだ線は特にC区において南北の例が多い。また、6B区・6C区の石器と接合するものもみられる。6区との関係で改めて6区・7区を一緒にみると7C区に濃密分布する状態は6C区に連続したあり方だといえる。



第 160 図 7区出土石器分布図



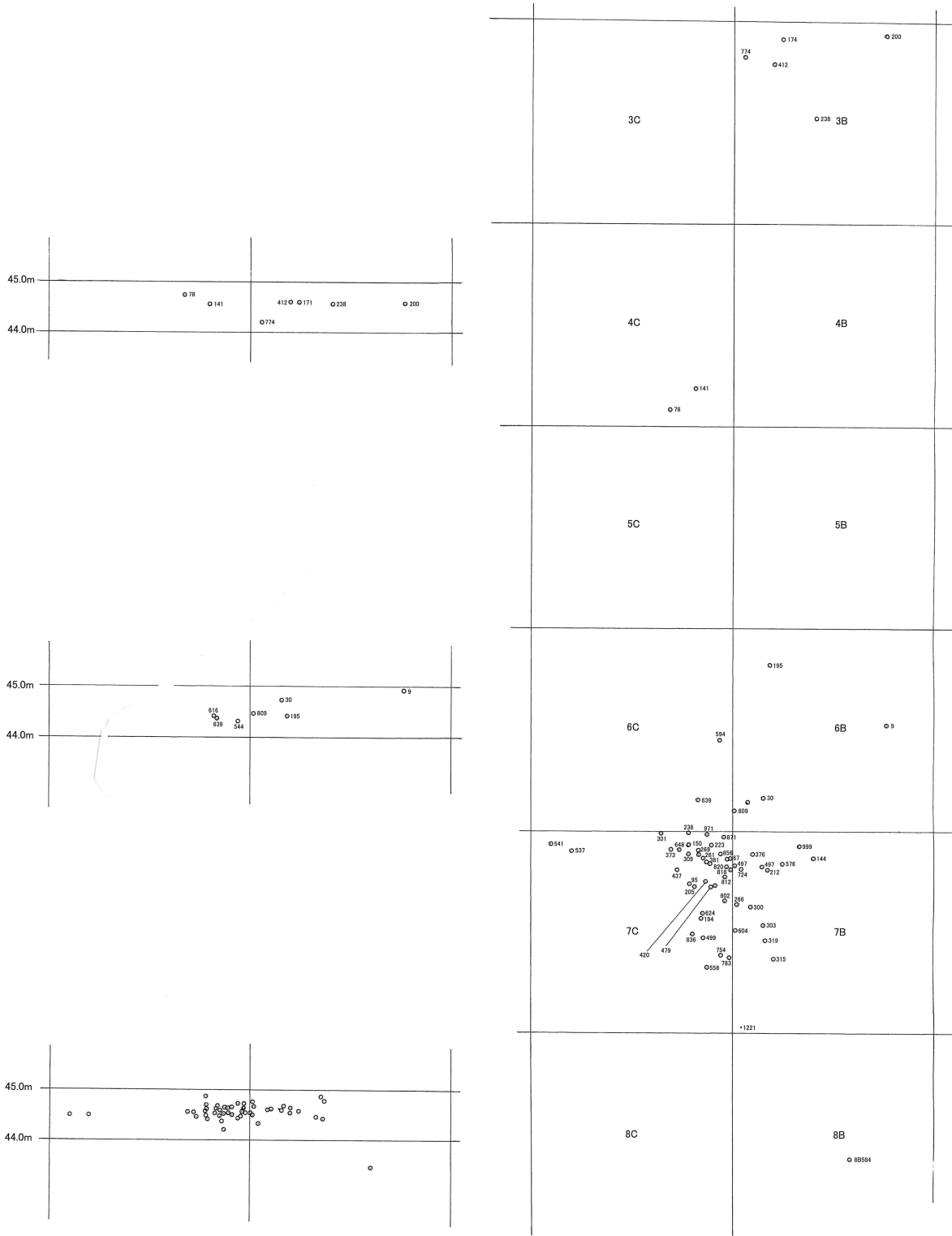
第 161 図 7区出土礫分布図

礫の分布状態

7区でも礫が出土している。分布図（第161図）ではⅢ層の礫を小さい点で示し、Ⅳ層の礫を白丸で示した。Ⅲ層の礫の分布は7B区北西部から7C区北東部に多い傾向がみられる。Ⅳ層の礫は7B区全域と7C区東端部に一様に分布するように見える。Ⅳ層出土礫には4例の接合個体がある。7B区の西部を中心に南北方向の接合関係が認められる。

黄緑色石材

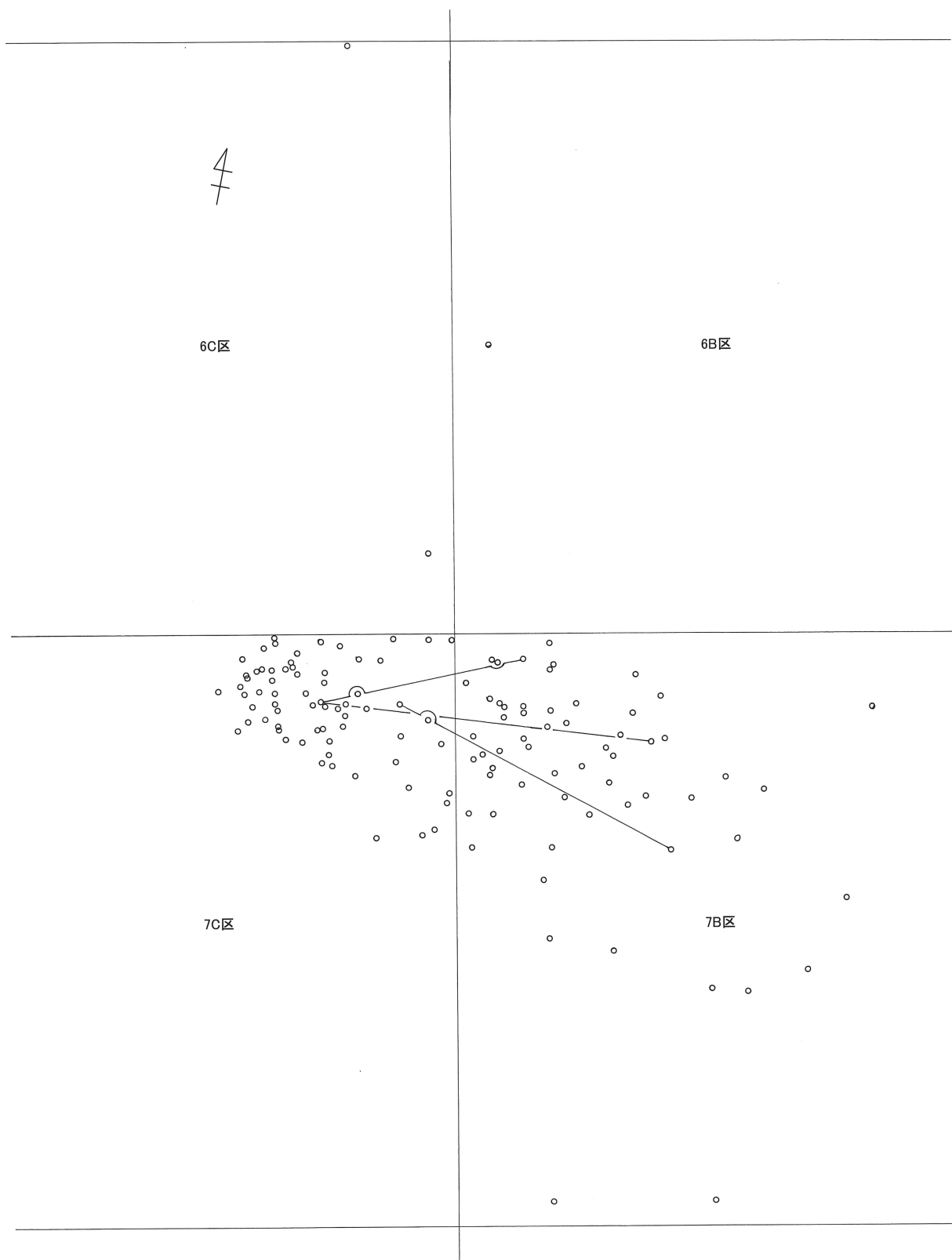
第163図は安山岩のような石質で黄緑色を呈する石材だけの分布図である。別の石材との区別が容易であり分布図を作成したが、同一個体という意味ではない。ほとんど全て包含されていたのはⅢ層であり、平面的な分布状態は7B区北西部から7C区北東部である。他にはその周辺部として6B区・6C区からも出土し、散発的に3B区、4C区にも見られた。この黄緑色の石材を利用した三稜尖頭器が存在する。第159-3図3に示した未成品段階の失敗品である（6B306・6C489）。一部に自然面を残した分厚い剥片の周囲から二次加工して一端を尖らせようとしている。この石材の接合は出来なかったが、おそらく多数の剥片の中には、三稜尖頭器作成中に剥離されたものが含まれていると思われる。



第 163 図 黄緑色石材分布図

姫島産ガラス質安山岩

第 164 図には姫島産のガラス質安山岩の分布状態を示している。この石材もまた黄緑色石材によく似た分布のあり方を示す。7B 区の北西部と 7C 区の北東部のより狭い範囲に密集し、周辺の 6B 区・6C 区にも少し分布していた。包含されていた層はⅢ層である。



第 164 図 角閃安山岩の分布状態 (Ⅲ層)

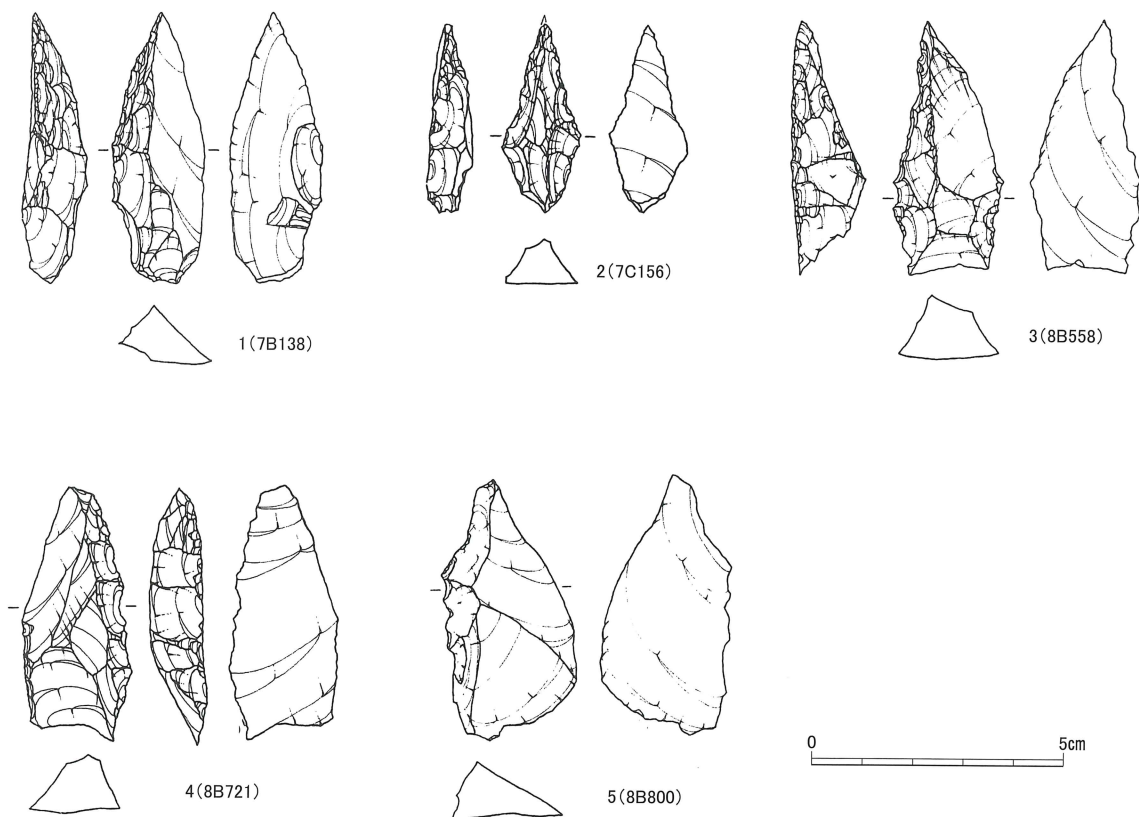
7 区出土石器

第165図 1 はナイフ形石器である (7B138)。横長剥片を素材とし、二次加工は基部全周から一側辺を先端まで行われ、打面は二次加工で取り払われている。二次加工は先端側では細かく、打面を取り払う部分では力強い

打撃が行われている。2 (7C156) は剥片の打面を二次加工で取り払うと共に全周囲にも二次加工が施されている。主要剥離面と反対側である背面は素材の剥離面が残る。この点で三稜尖頭器とは異なりナイフ形石器に分類しておくが、尖頭器のように長軸の中央が尖っている。

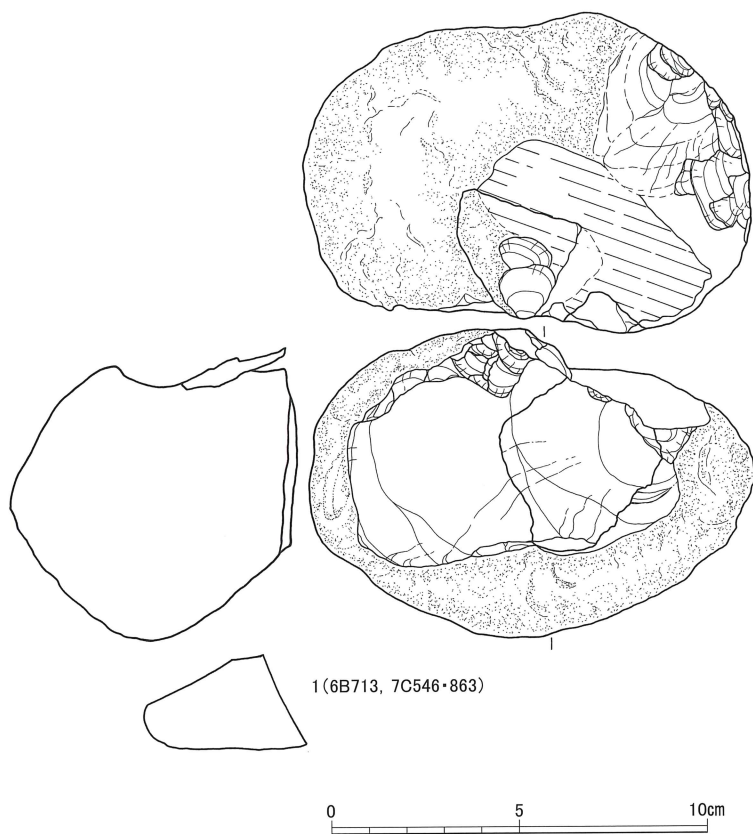
8区出土石器①

図面がここにあるので8区の石器であるが説明する。第165図3 (8B558) は不定形の剥片を素材にしたナイフ形石器である。剥片の打面は二次加工で取り払われ、一側辺全体と反対側の辺の一部は二次加工されている。打面側は尖り、反対側は鋭い剥片の縁辺部をそのままにしている。同4 (8B721) は素材の打面を二次加工で消し、一側辺全体と反対側の一部も二次加工している。打面と反対側は剥片の縁辺を残し鋭利である。同5 (8B800) は剥片の打面、その辺の続きを二次加工しているが、形から判断するとナイフ形石器の未成品のようである。



第 165 図 7B・C、8B区Ⅲ・Ⅳ層出土石器

第166図1は6B区から出土した石核 (6B713) に7C区から出土した剥片 (7C546・7C863) が接合したもので、すべてⅢ層出土である。石核は剥片剥離が途中で放棄されたようで、まだ多数の剥片を作出する余裕がある状態である。本来の礫の大きさは長さ11.9cmで厚さは8.4cmである。する。一部の剥離は両刃の礫石器のように交互に両側から剥離し、別に長軸の一端を他の方向から剥離している。小さく薄い剥片が2点接合する。



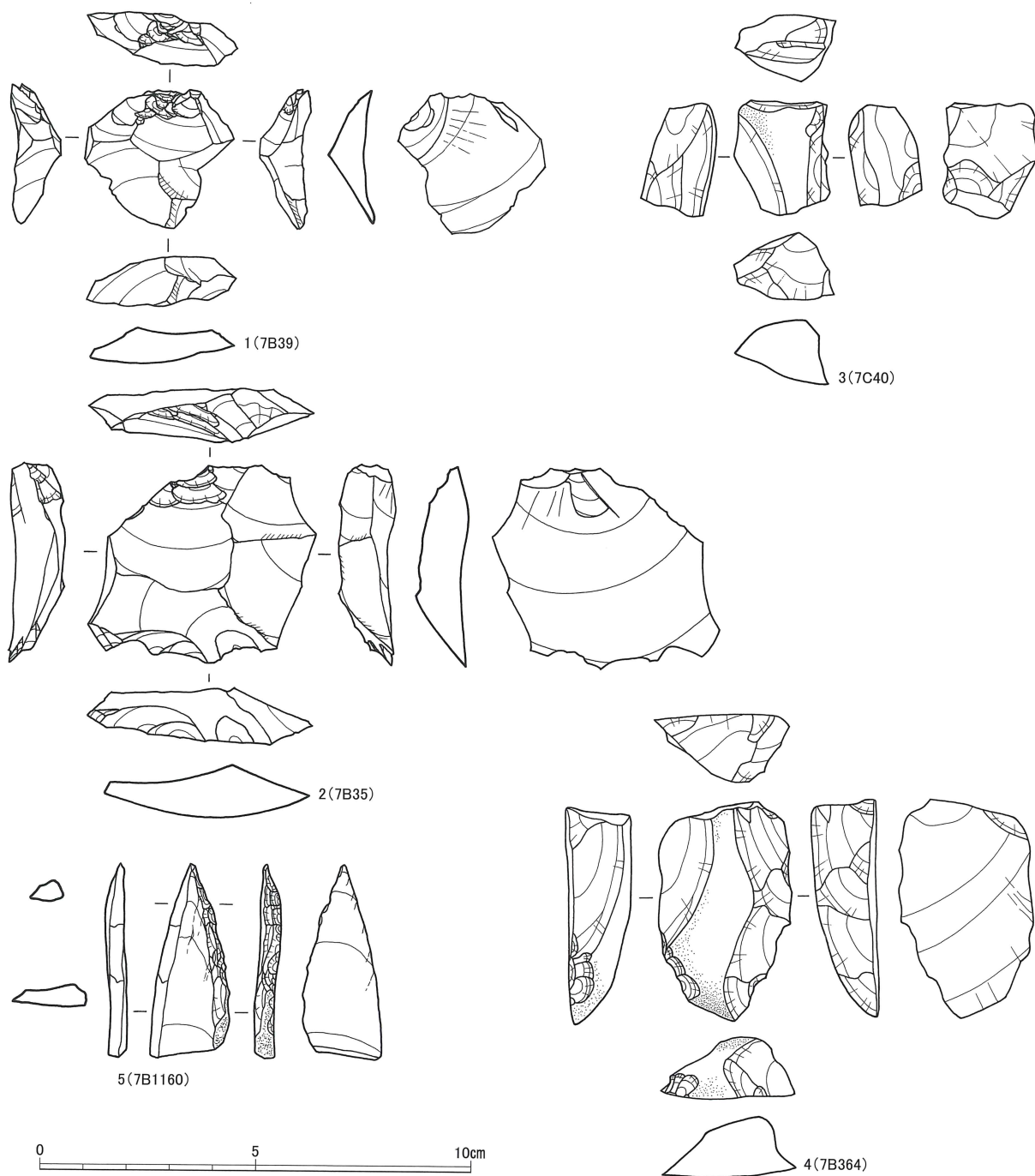
第 166 図 7A～C区Ⅲ層出土石器接合図

第167図1・2は7B区Ⅲ層から出土した接合する剥片である。ふたつは打撃面を共有する。1は長さ4.5cm・幅4.7cm・厚さ1.0cm・重さ25.5gである。2は長さ3.2cm・幅3.3cm・厚さ0.8cm・重さ0.9gである。

第167図3・4は三稜尖頭器の未成品であろう。3は7C区のⅢ層、4は7B区のⅢ層から出土した。

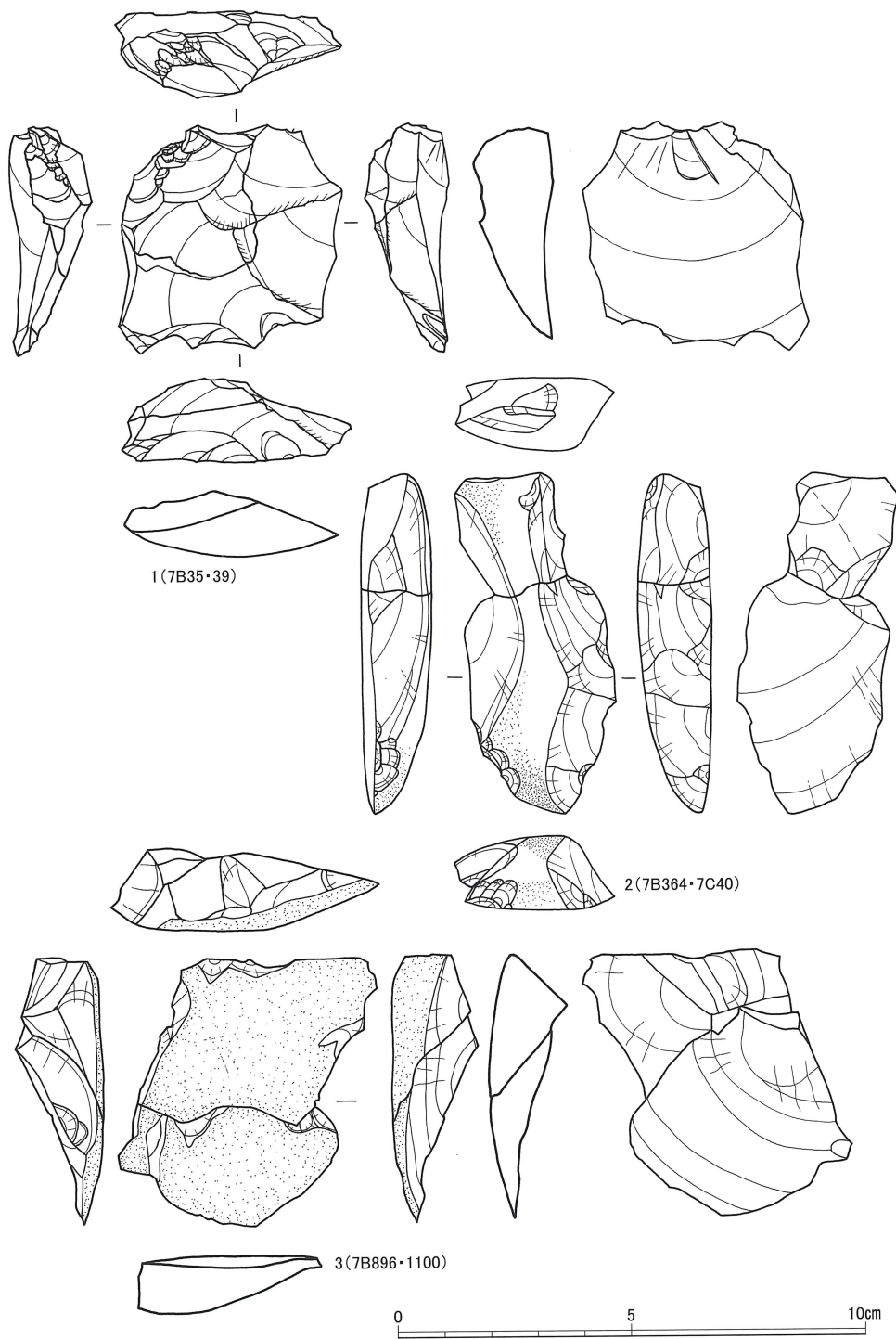
第168図2は接合図である。片面に大きく自然面を残し、主要剥離面側からの二次加工調整が行われている。長さ7.2cm・幅3.4cm・厚さ1.6cm・重さ34.9gである。

第167図5はナイフ形石器の先端部である。上下方向からの剥離のある縦長剥片を素材とし、打点側を基部にしている。長さ4.4cm・幅1.8cm・厚さ0.5cm・重さ5.0g。このナイフ形石器はV層に対比できる標高から出土している。



第 167 図 7B・C区Ⅲ層出土接合資料他

7B区 1216・1217 は接合するが、一度の打撃の際に二つに割れたものである。



第 168 図 7B区Ⅲ・Ⅳ層出土石器接合図

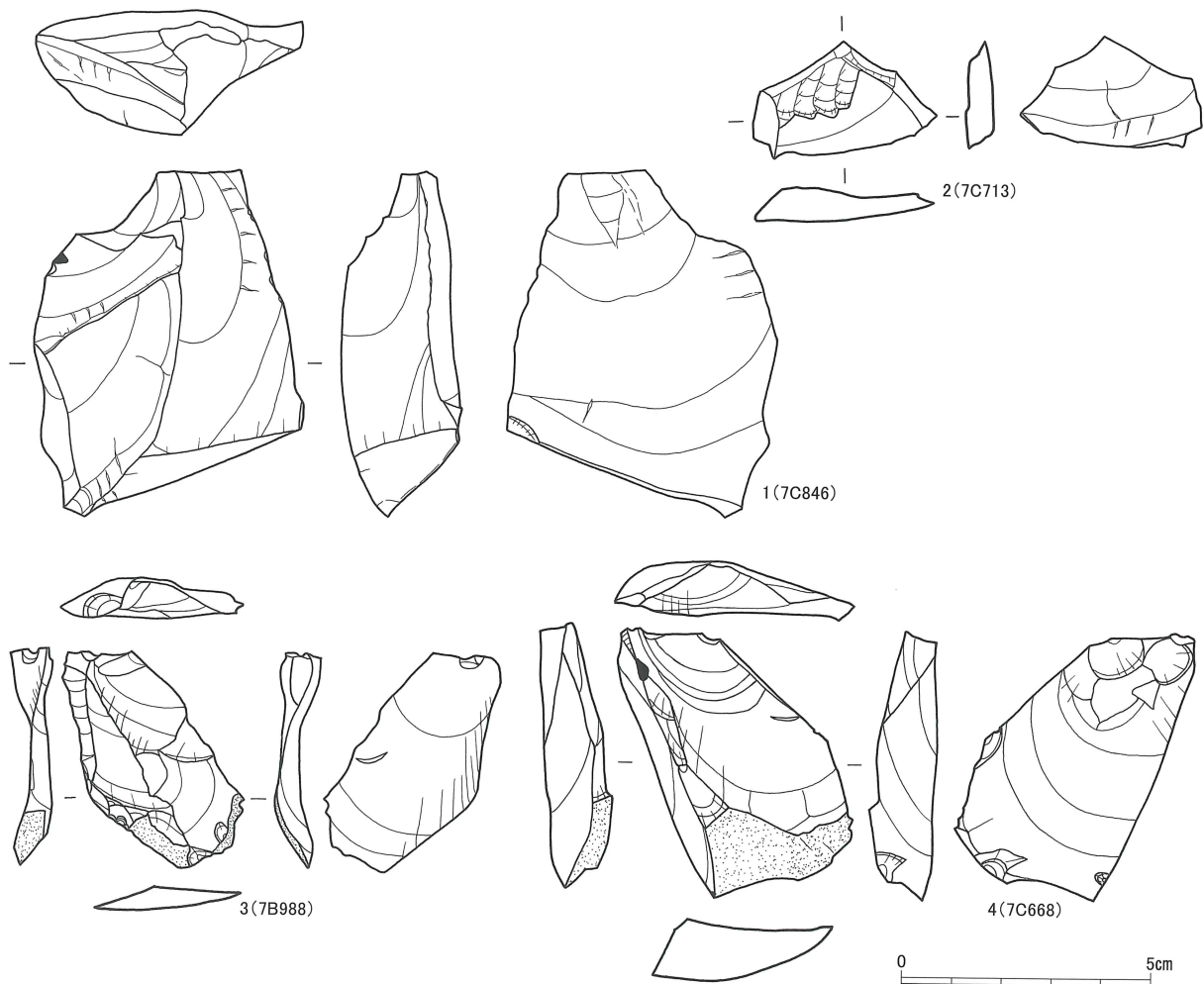
第168図3は第184図1・2の接合状態である。1・2はⅣ層から出土した剥片で2→1の順に剥離されている。1は長さ4.8cm・幅4.7cm・厚さ0.8cm・重さ17.2gである。2は長さ3.9cm・幅5.4cm・厚さ1.5cm・重さ19.4gである。

第169図1・2は7C区Ⅲ層出土の剥片で、その接合状態図が第170図1である。接合状態で長さ6.9cm・幅5.7cm・厚さ2.4cm・重さ77.6g。

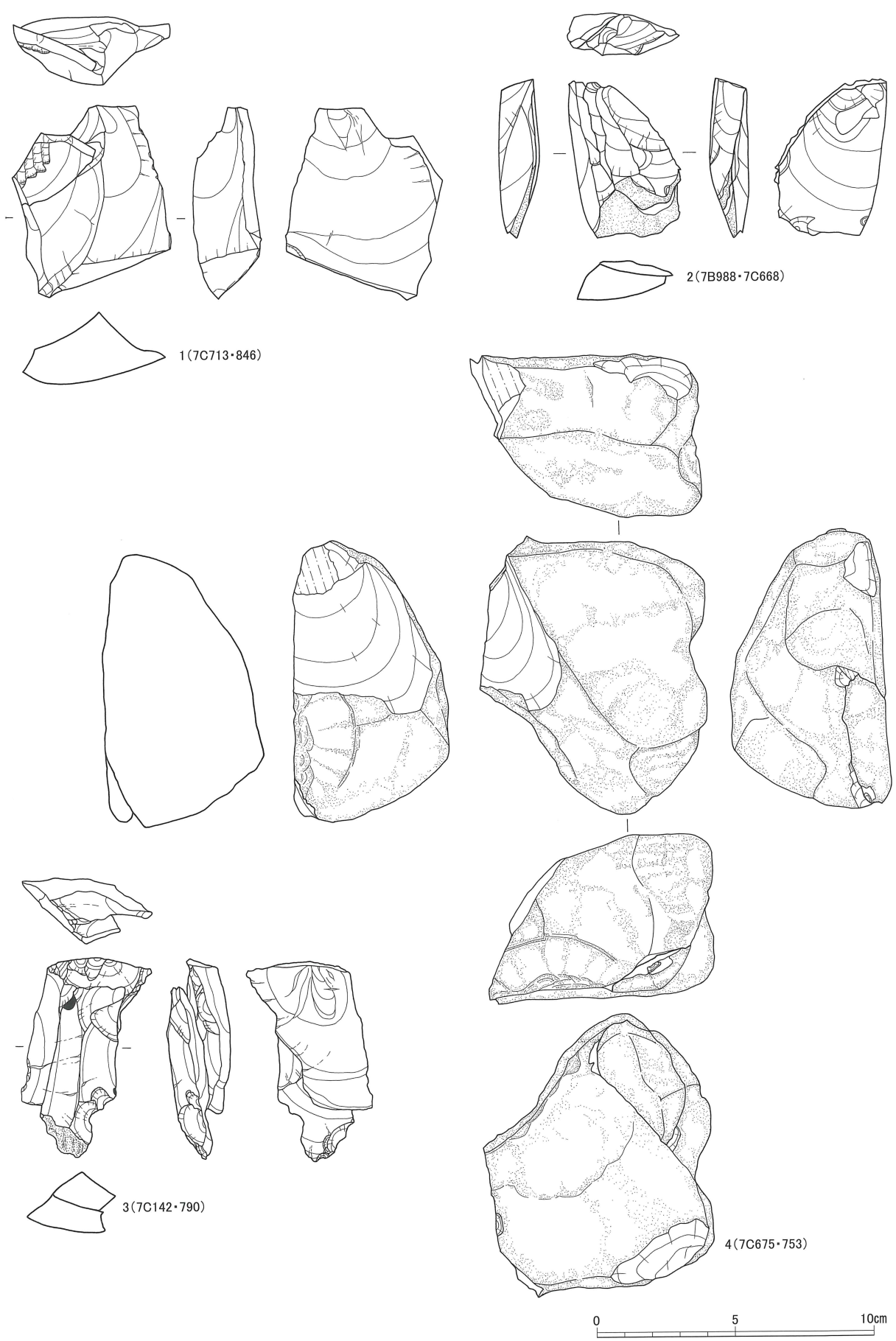
第169図3・4は7B区・7C区のⅢ層から出土し、接合する剥片である。接合状態は第170図2に示した。どちらにも自然面が残る。小片を初めに剥離し、次に大きい剥片を剥離した。

第169図3は長さ4.3cm・幅3.0cm・厚さ0.4cm・重さ7.4gである。

第169図4は長さ5.2cm・幅3.6cm・厚さ1.2cm・重さ24.2gである。



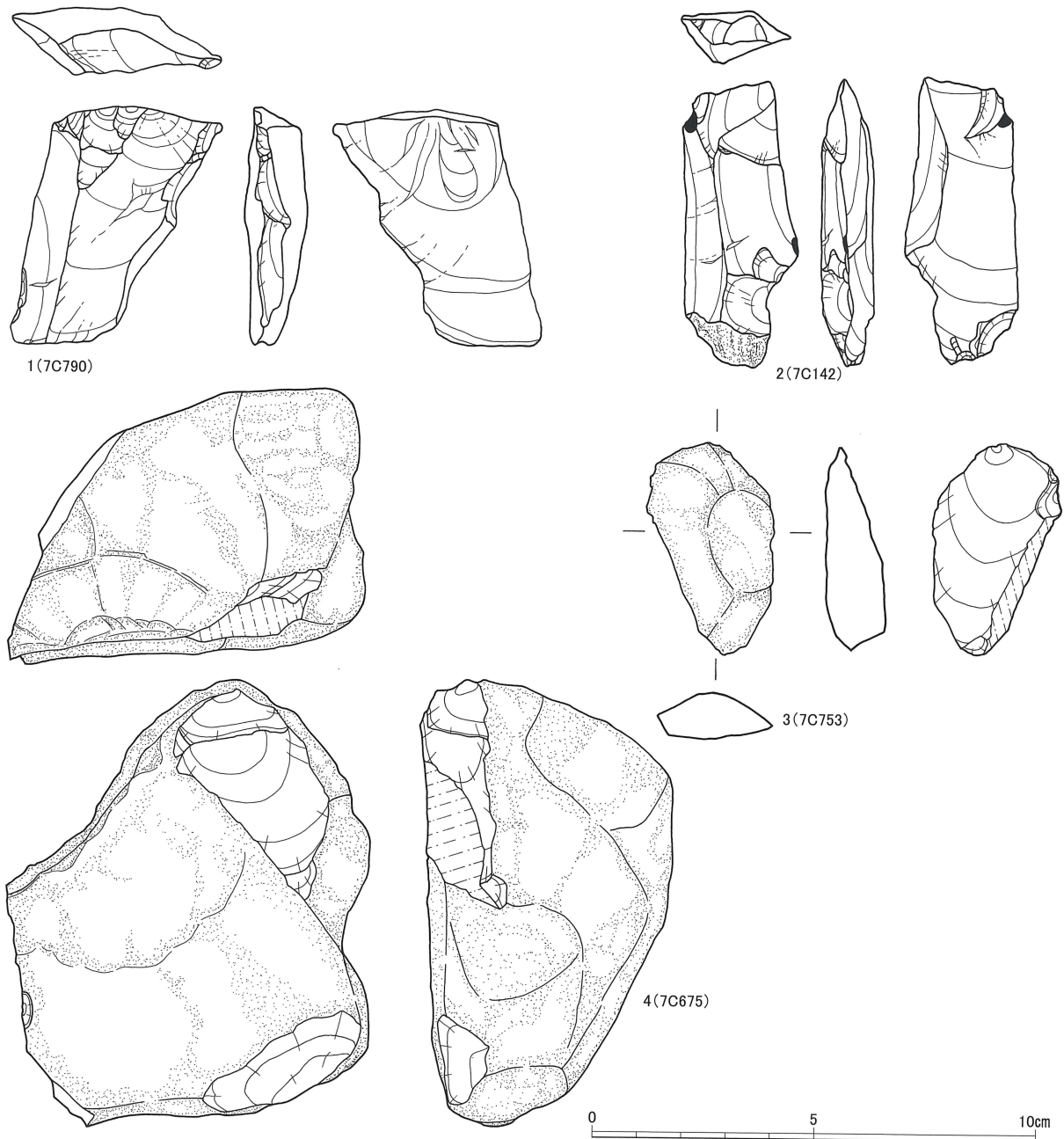
第169図 7B・C区出土接合資料



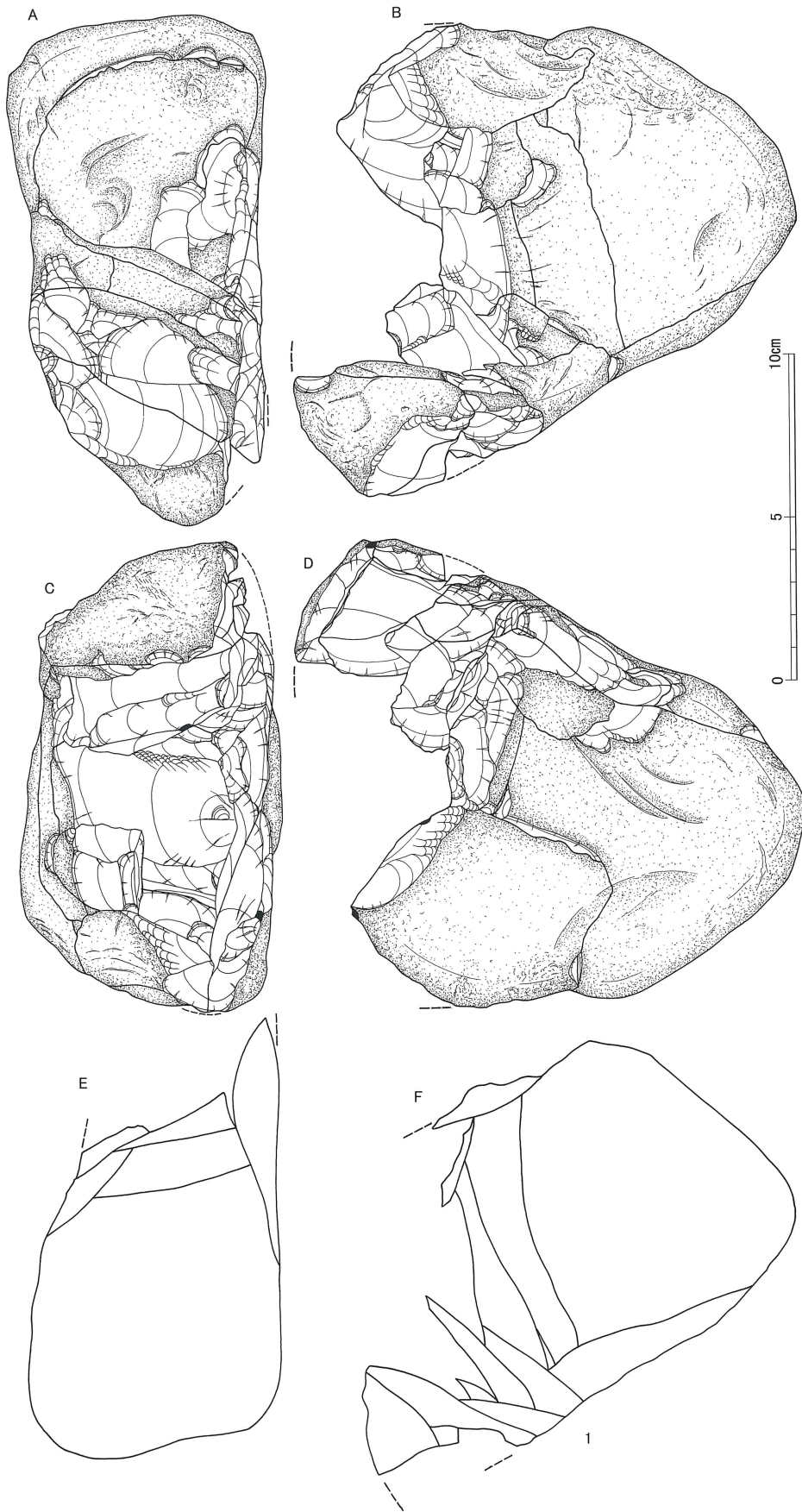
第 170 图 7B·C区出土石器接合图

第171図 1・2はⅢ層出土の接合する剥片である。二つの剥離順序は2→1である。2の打面は剥取後に取り払われている。1は長さ5.1cm・幅4.8cm・厚さ1.4cm・重さ26.9g。2は長さ6.3cm・幅2.5cm・厚さ1.1cm・重さ18.9g。

第171図 3・4は7C区のⅢ層から出土し、接合する。その接合した状態が第170図4で、長さ8.1cm・幅9.8cm・厚さ5.6cm・重さ568.9gである。接合した小片の方は原石の端を打撃したもので、この原石にはもう一箇所反対側の突出部で剥離が行われている。



第171図 7C区Ⅲ層出土接合資料



第172図は第173～176図までの破片の接合状態である。

第173図 1 は長さ8.2cm・幅9.2cm・厚さ8.6cm・重さ928.7g。

第173図 2 は長さ3.4cm・幅3.3cm・厚さ0.8cm・重さ8.9g。

第173図 3 は長さ7.5cm・幅5.5cm・厚さ1.1cm・重さ41.1g。

第173図 4 は長さ7.9cm・幅4.4cm・厚さ2.2cm・重さ69.5g。

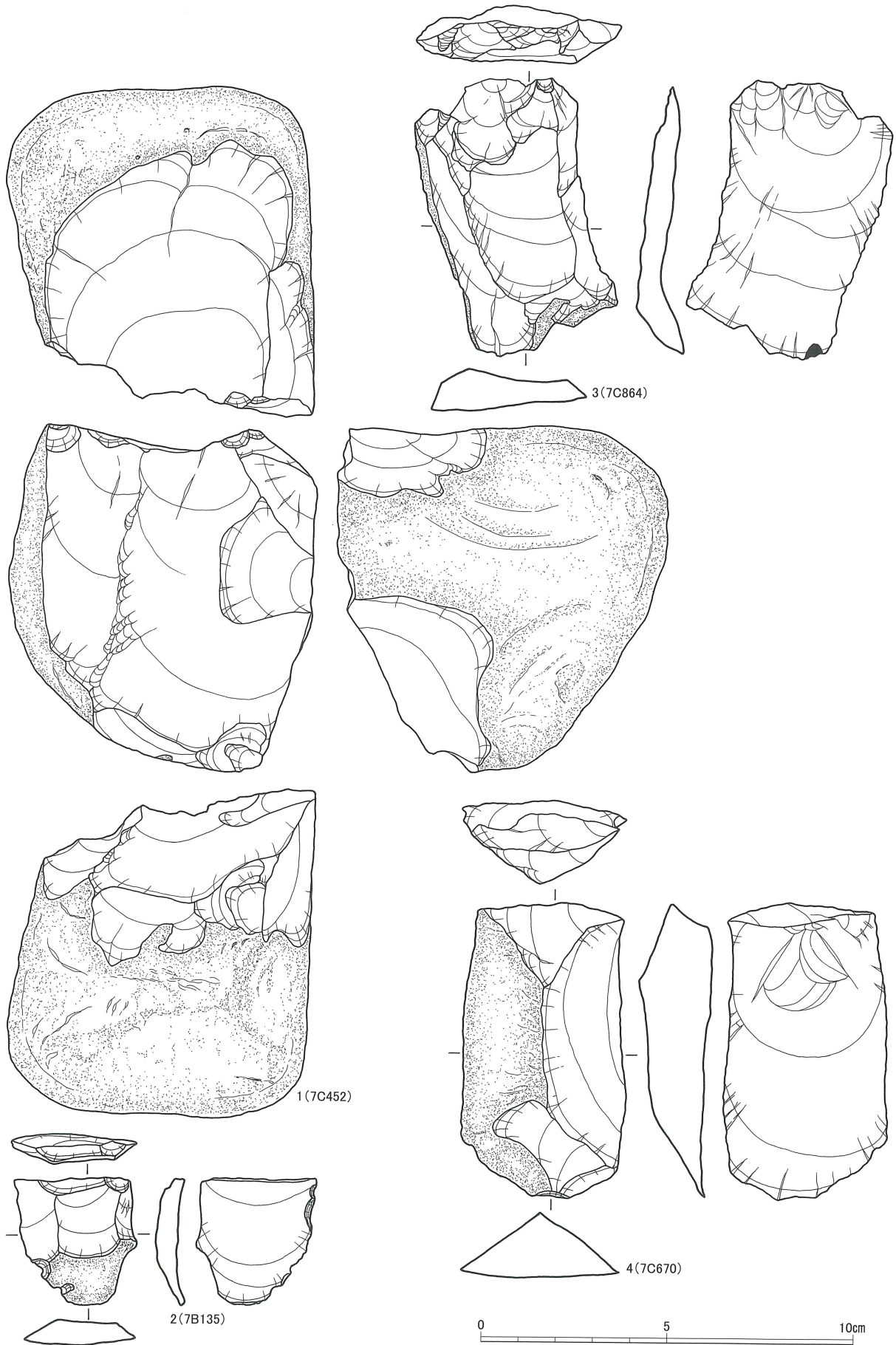
第174図 1 は長さ5.5cm・幅6.0cm・厚さ1.8cm・重さ38.0g。

第174図 2 は上部の7B746と下部の7B384が接合したものの。合計値は長さ7.5cm・幅4.5cm・厚さ1.4cm・重さ28.6g。

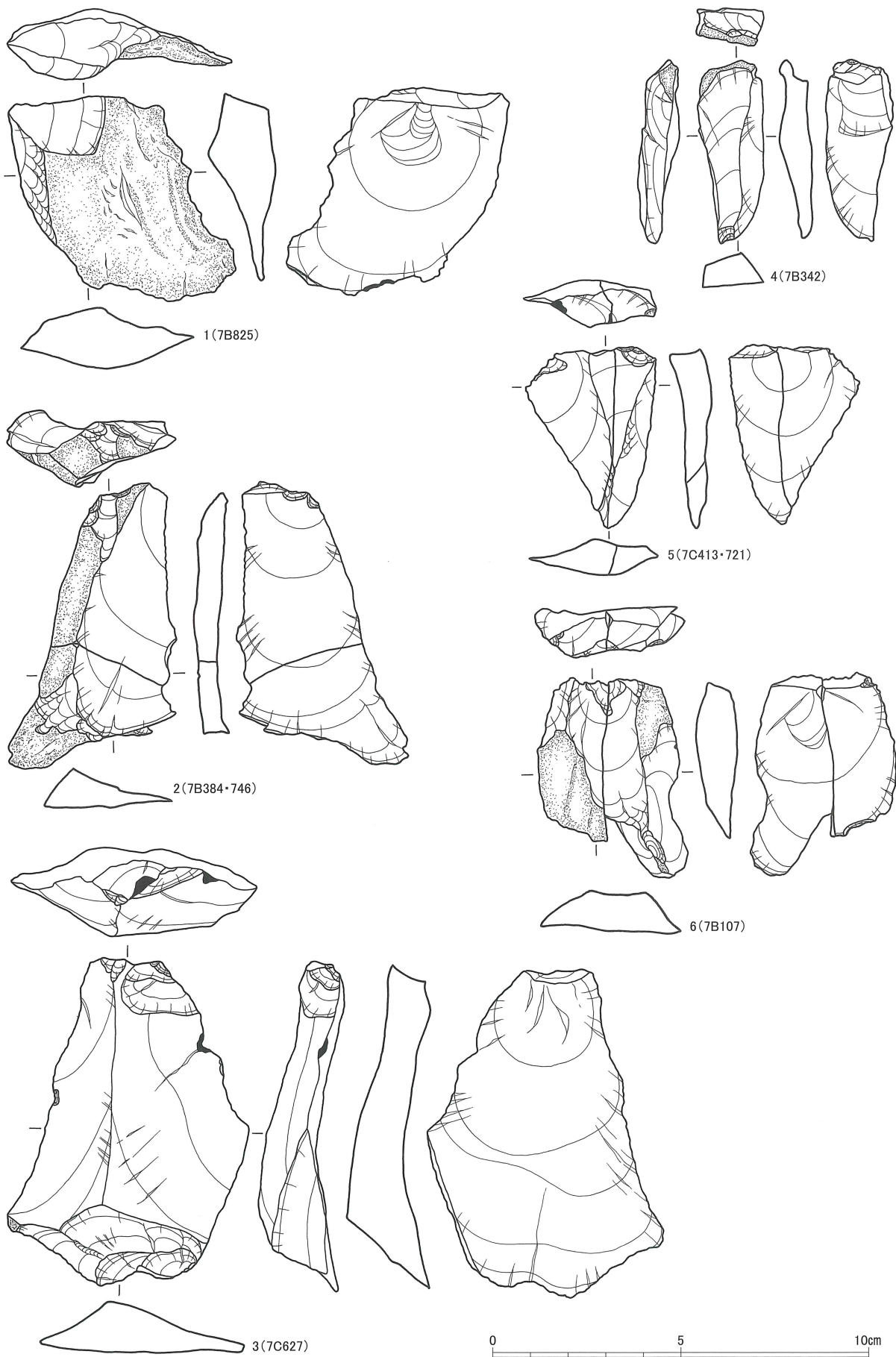
第174図 3 は長さ9.2cm・幅6.4cm・厚さ1.9cm・重さ79.6g。

第174図 4 は長さ4.8cm・幅1.8cm・厚さ0.9cm・重さ8.6g。

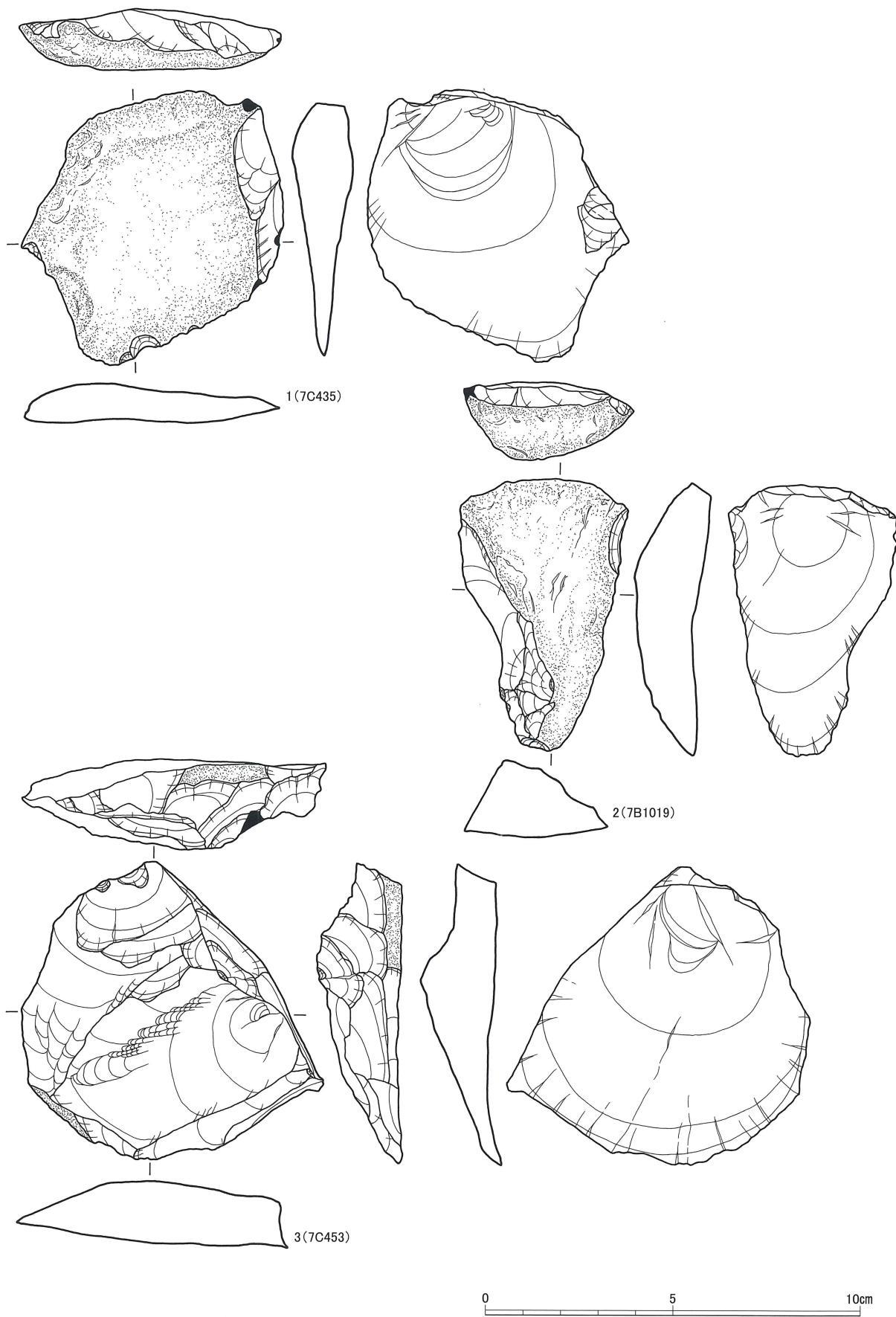
第172図 7B区出土石器接合図



第 173 图 7B·C区Ⅲ層出土接合資料



第 174 图 7B·C区Ⅲ層出土接合資料



第 175 图 7B·C区Ⅲ層出土接合資料

第174図5は背面図左の7C413と右の7C721が接合したもの。接合値は長さ4.8cm・幅3.5cm・厚さ1.1cm・重さ11.4g。

第174図6は長さ5.3cm・幅9.3cm・厚さ1.1cm・重さ24.3g。

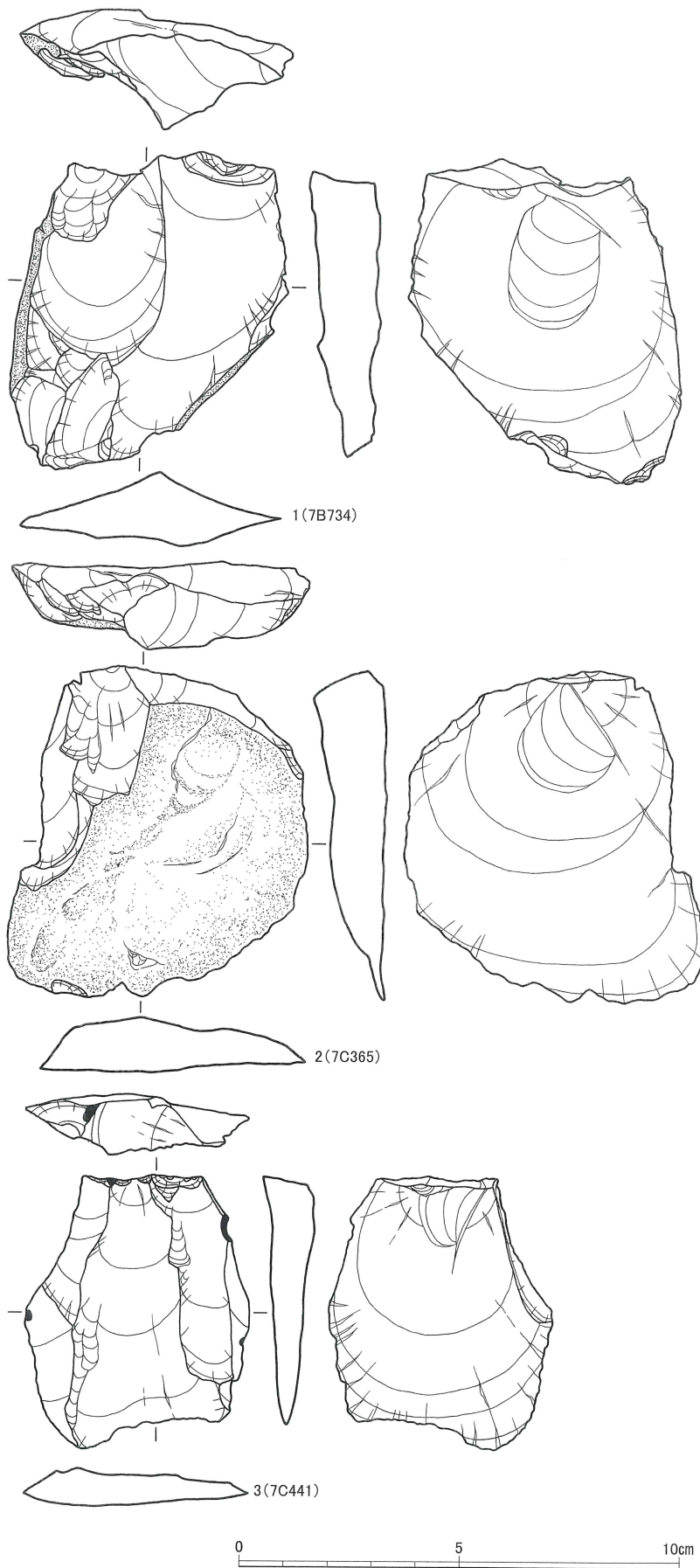
第175図1は長さ7.3cm・幅7.0cm・厚さ1.7cm・重さ76.8g。

第175図2は長さ7.2cm・幅4.5cm・厚さ1.9cm・重さ59.5g。

第175図3は長さ7.9cm・幅8.1cm・厚さ2.4cm・重さ113.3g。

第176図1は長さ7.2cm・幅6.3cm・厚さ2.1cm・重さ73.1g。

第176図2は長さ7.5cm・幅6.8cm・厚さ1.9cm・重さ85.2g。



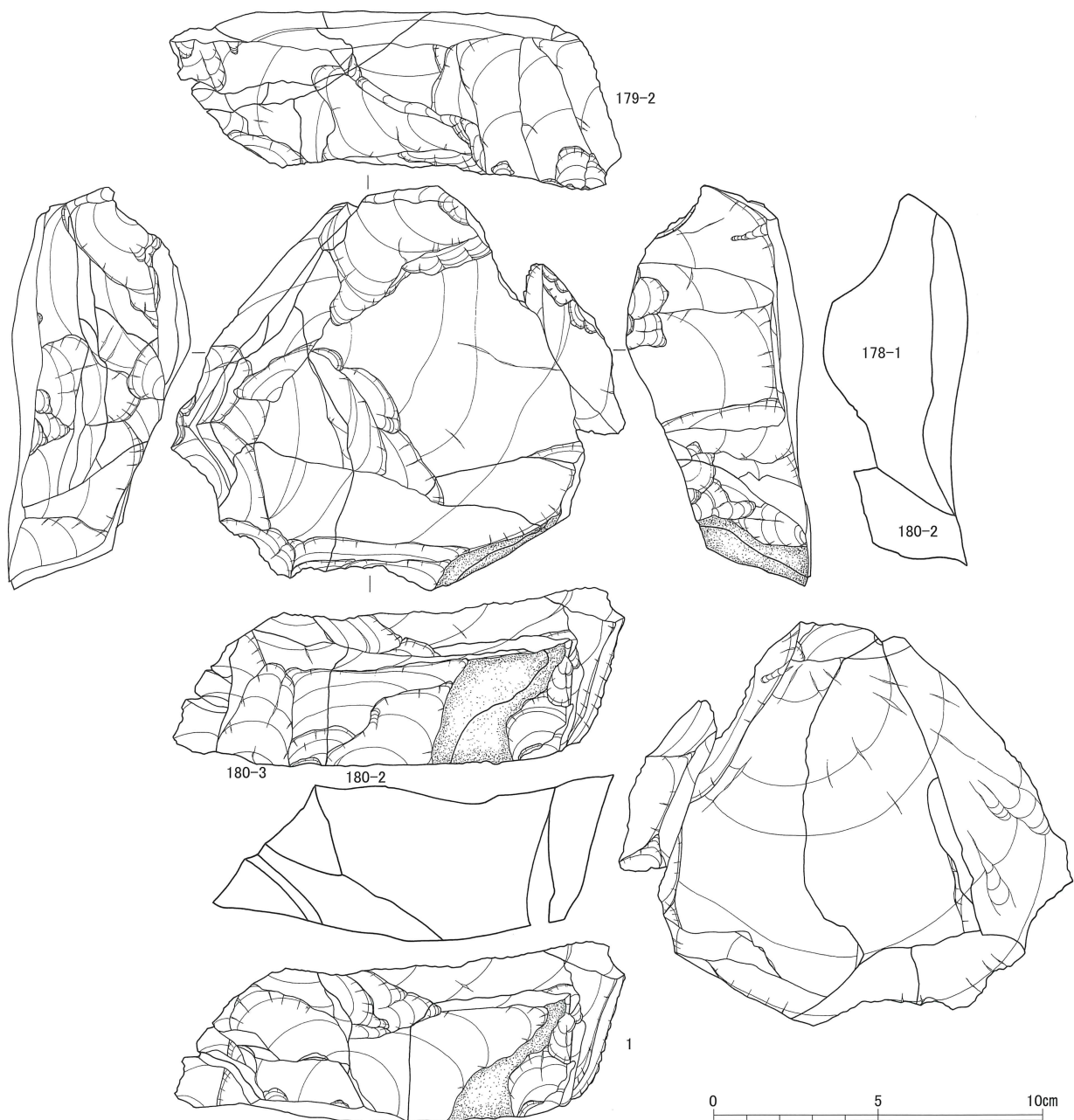
第176図 7B・C区Ⅲ層出土接合資料

第176図3は長さ6.2cm・幅5.1cm・厚さ1.3cm・重さ34.2g。

第172図により、これらの接合状態、剥片剥離状態について述べたい。

B図の上部と下部は離れていて相互の剥離順序は分からない。上部は自然面を打ち剥いだ後、その面を打面として第175図1を剥離している。次に生じた面を打面として第174図1→□→第173図2→□→□の順に打ち剥がされている。□は出土しているのかいないのか不明の剥片である。第173図2は剥片上部が折れて存在しない。また、B図の2の下側に位置する部分の剥離が先行している。

次にB図の下部の剥離について説明する。この付近を打面側から見たD図で述べたい。第175図2→第174図4（この際生じた剥片の縦半分は見つからない）→第176図1→第174図2→□→第174図5□→第176図3→□→第173図3と共通の打面を用いて奥の方に剥離が進んだ。この時点で方向を変え、今生じた面を打面として第174図6が打ち剥がされている。その後再びさっきの方向の打撃に返り、□の小剥片→第175図3とし、再び第174図6の方向で第176図2を剥離。また方向を変え、第175図3→第173図4→第174図3で終了している。



第177図 7B・C区IV層出土接合資料

第177図は第178～180図まで剥片と石核とが接合した状態である。接合状態で側面の一部に少し自然面を残す。第177図の右下に示す面はこの剥片素材石核の主要剥離面である。

第178図 1は長さ5.2cm・幅10.9cm・厚さ4.9cm・重さ447.9g。

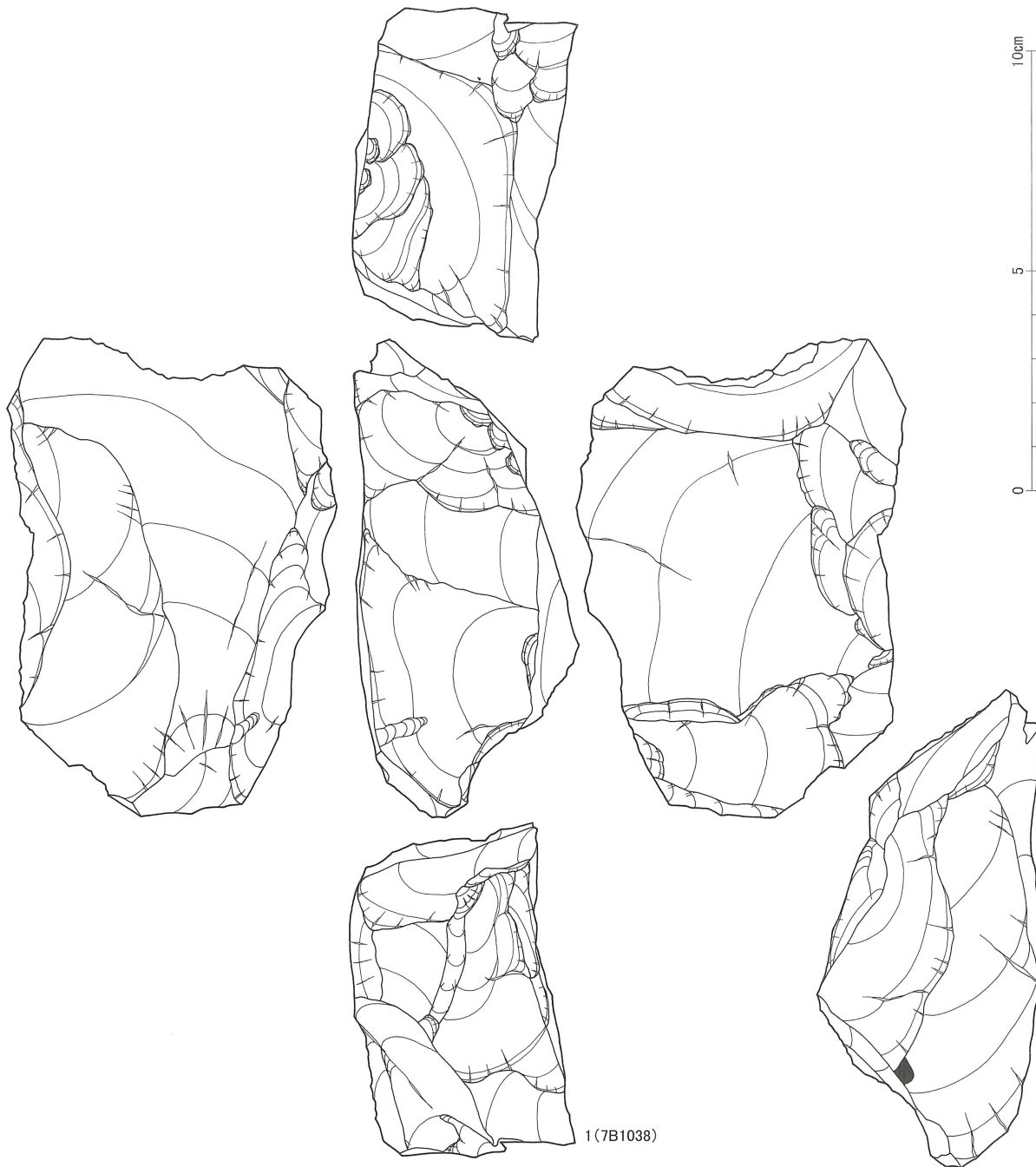
第179図 1は長さ5.2cm・幅5.4cm・厚さ2.4cm・重さ61.5g。

第179図 2は長さ5.1cm・幅5.7cm・厚さ1.6cm・重さ47.8g。

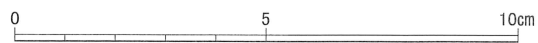
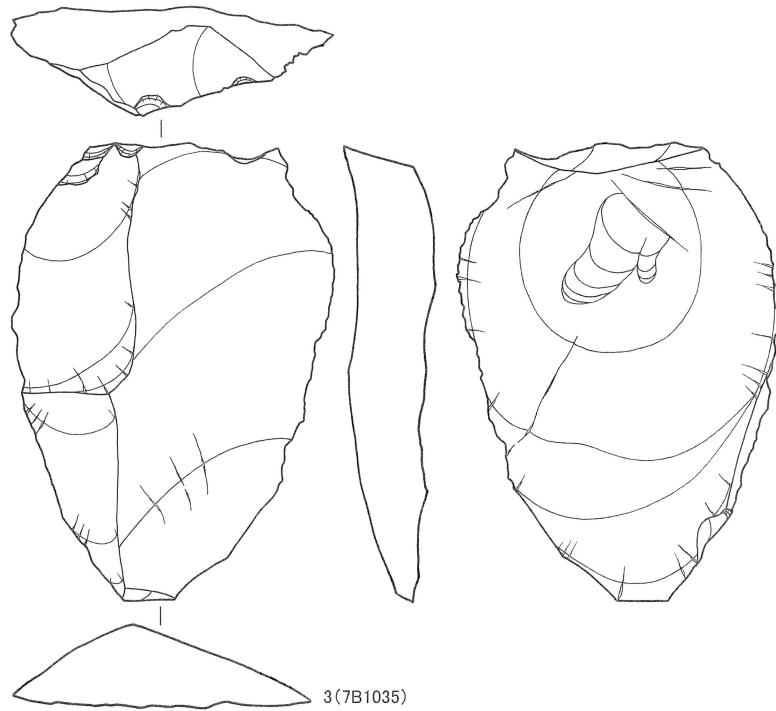
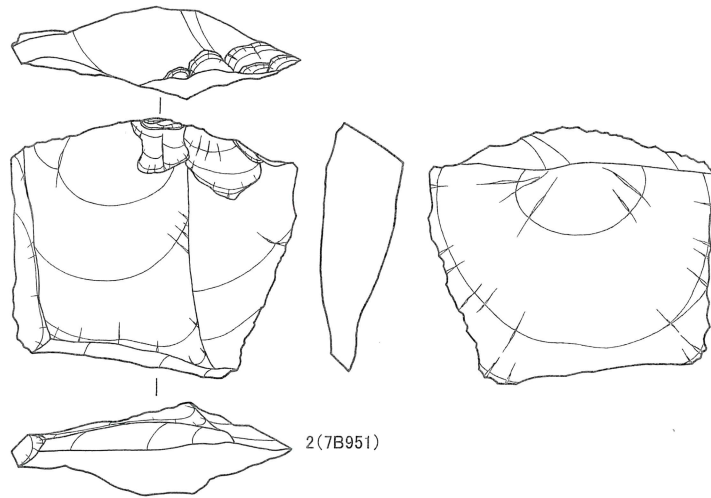
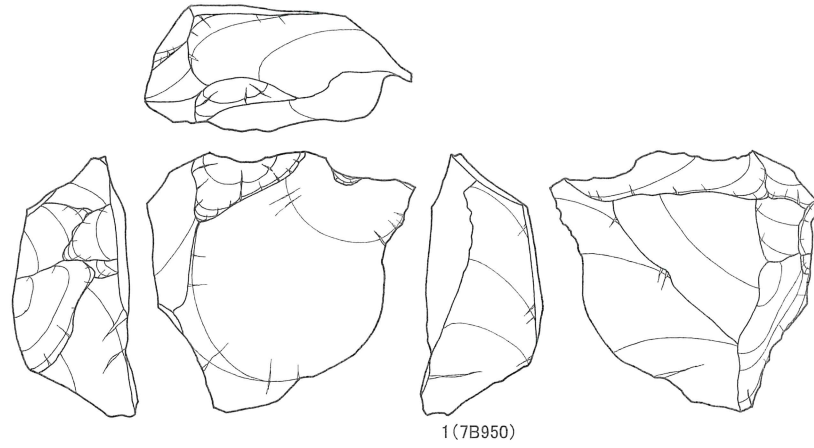
第179図 3は長さ9.0cm・幅6.4cm・厚さ1.7cm・重さ100.8g。長さcm・横cm・厚さcm・重さg。

第180図 1は長さ9.8cm・幅4.1cm・厚さ1.6cm・重さ39.5g。

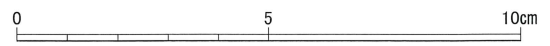
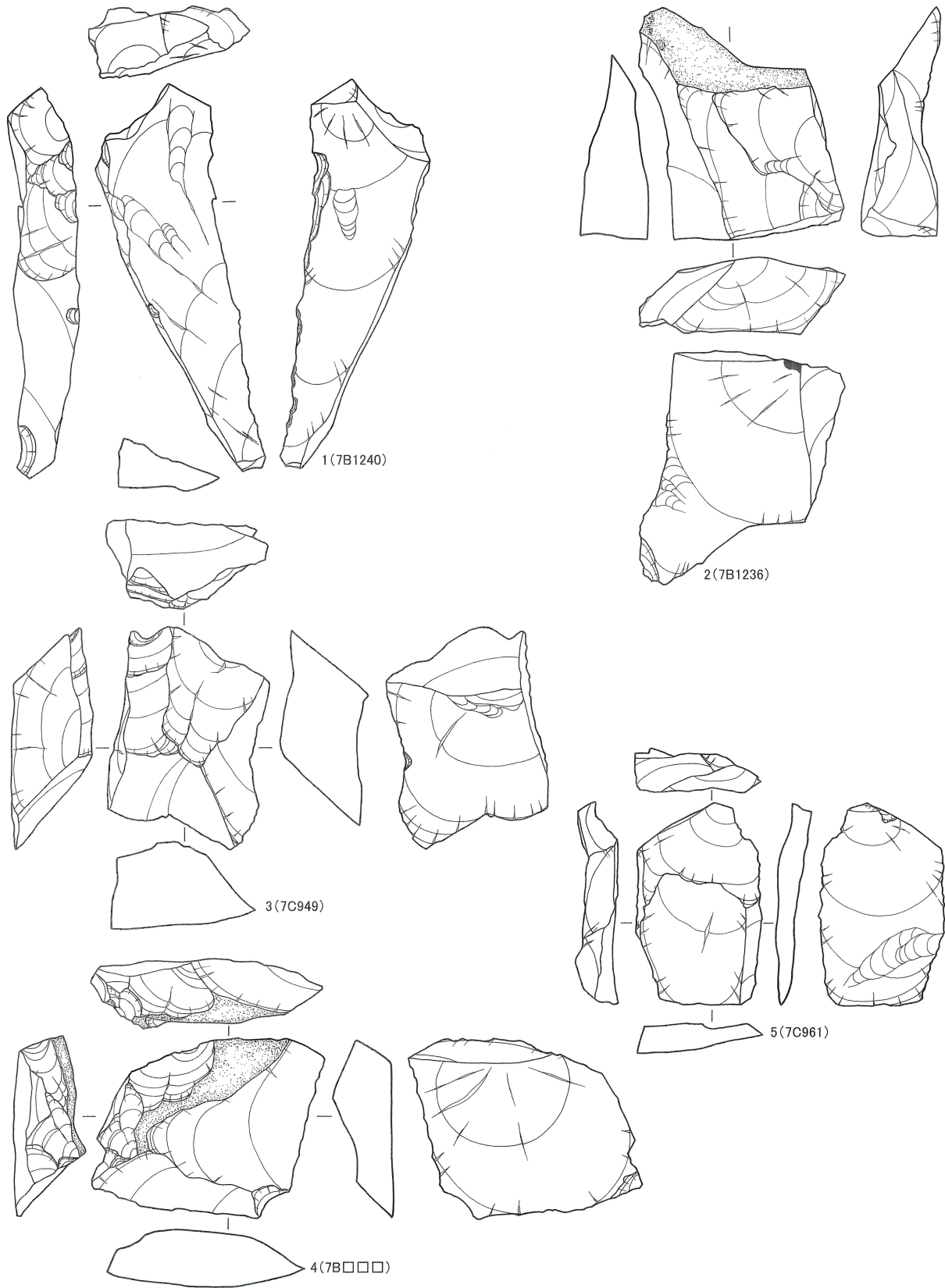
第180図 2は長さ5.2cm・幅5.9cm・厚さ2.0cm・重さ48.0g。



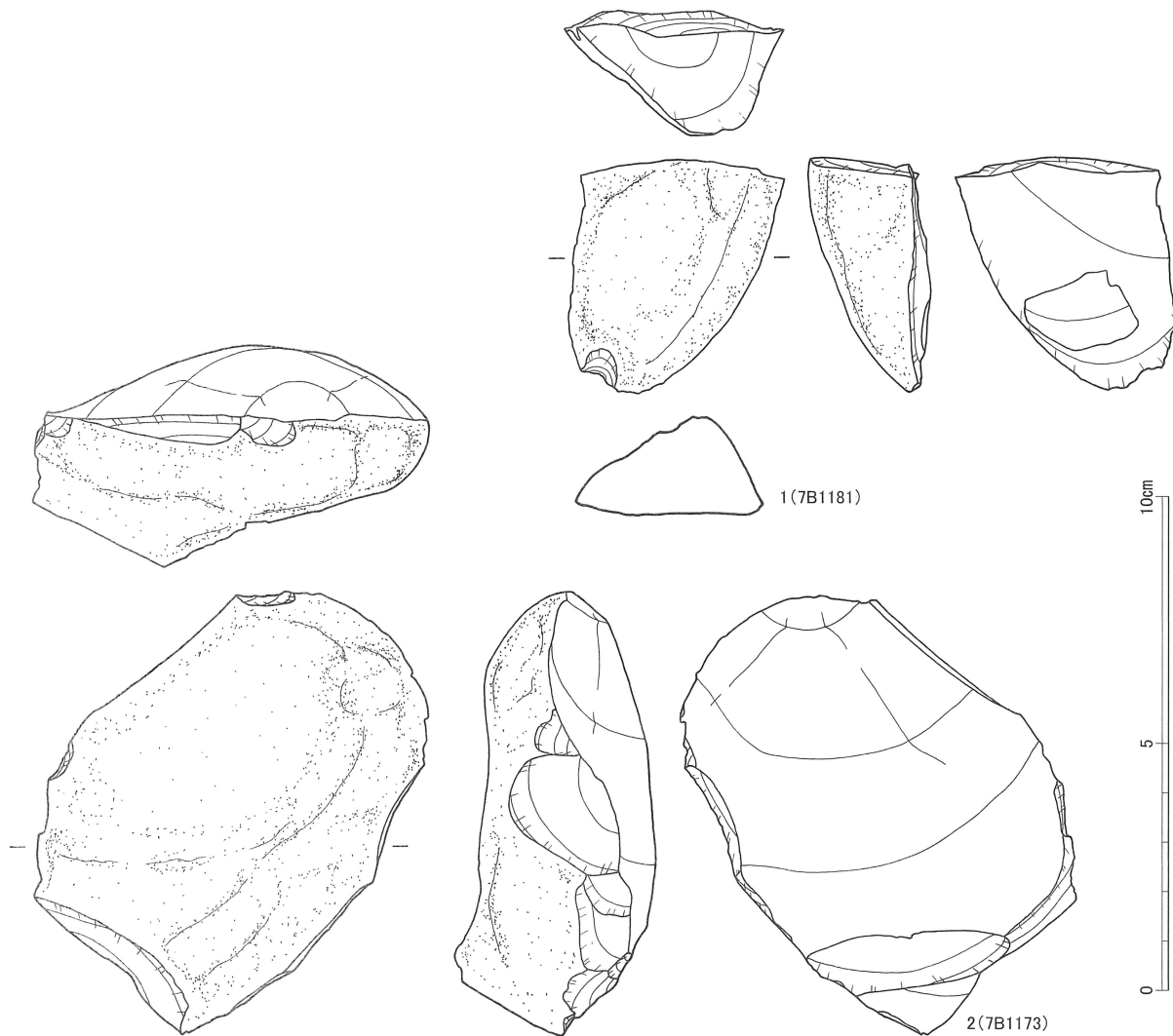
第178図 7B区IV層出土接合資料



第 179 图 7B区IV層出土接合資料



第 180 图 7B·C区IV層出土接合資料



第 181 図 7B区VIIb層出土接合資料

第180図3は長さ5.6cm・幅4.2cm・厚さ2.2cm・重さ46.3g。

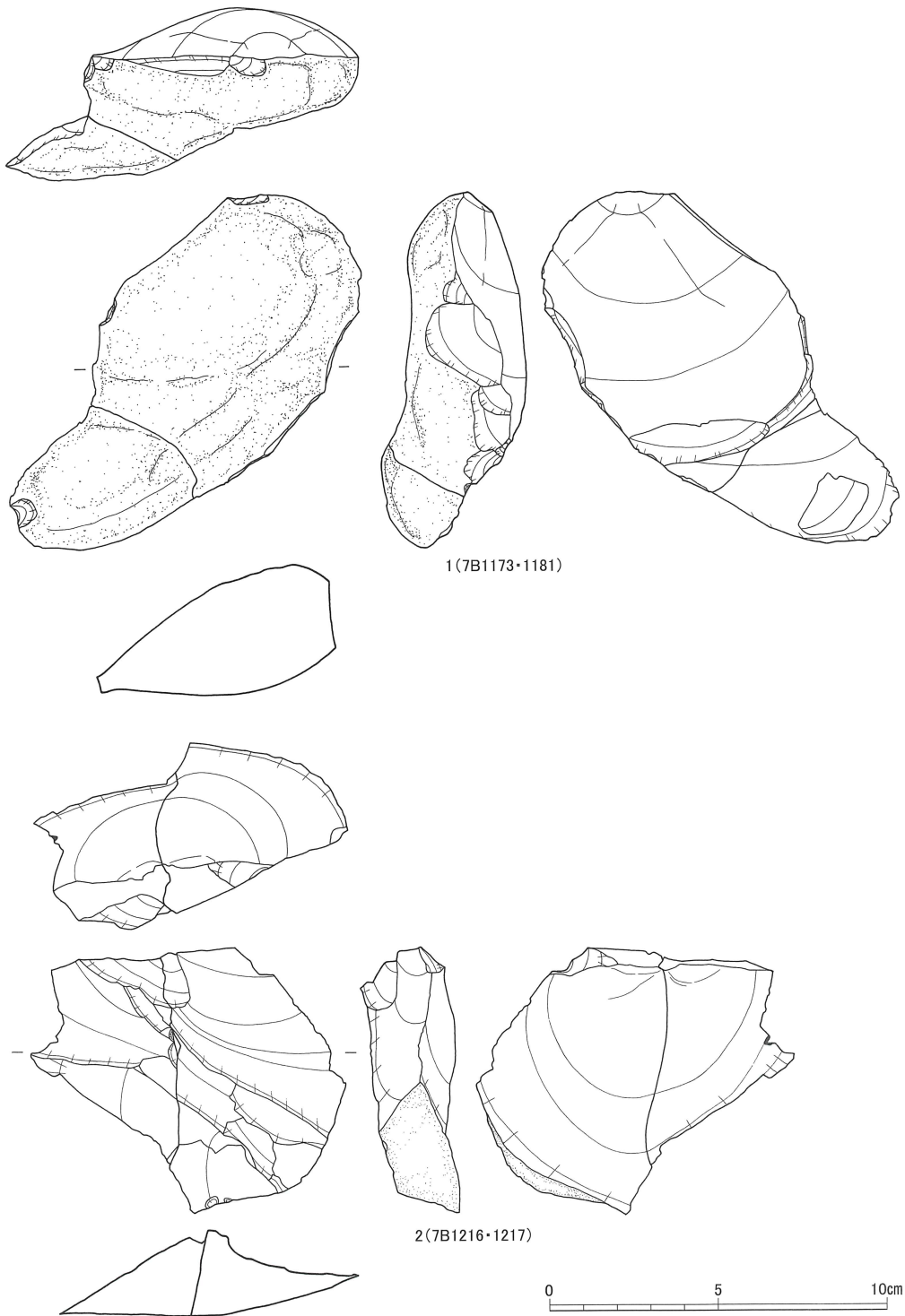
第180図4は長さ4.6cm・幅5.9cm・厚さ1.6cm・重さ45.7g。

第180図5は長さ5.1cm・幅3.2cm・厚さ0.8cm・重さ16.7g。

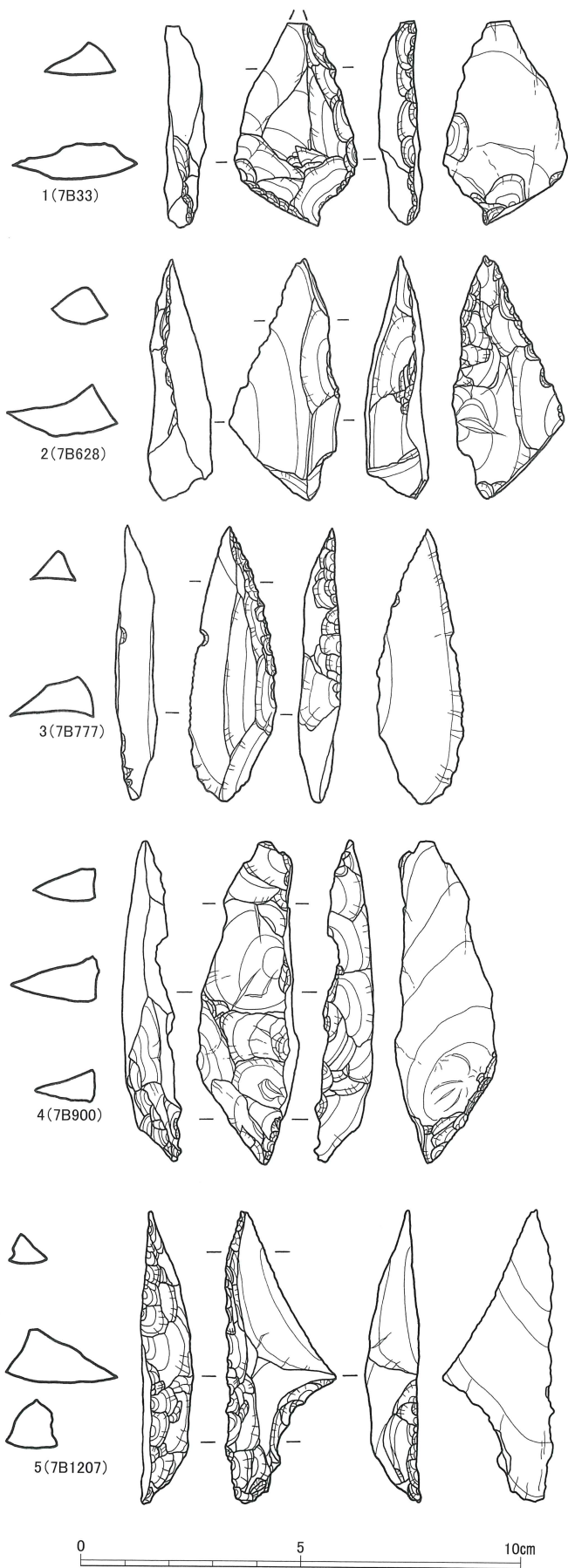
図示しなかったもう1点の剥片は6B496である。打面の反対側に細長く自然面を残す。第177図の剥離過程を説明したい。これは厚さ4cm～3cmの剥片を素材としている。剥片の主要剥離面側からみて、打面の左側は第179図2→□→□の同一方向の剥離により長さ4cm位の四角な剥片が3枚採られ、□2枚は存在しない。剥片打面の反対側ではさっきとは逆方向（主要剥離面とは反対側）から7C949の右面に残る剥離→同正面の剥離→同左面に一部残る剥離（第180図2の右正面も同じ剥離の一部）→第180図2・3を同時に→第180図4。次に方向を変え、主要剥離面の打点とは反対の方から第180図1→同5と同じ方向の剥離を続けて、第179図1を剥離し最後に第179図3を主要剥離面の打面の反対側から剥離して終えている。

第181図1・2は7B区のVIIb層から出土した接合する剥片である。1は長さ4.7cm・幅4.4cm・厚さ2.5cm・重さ47.6gである。打面は剥離面であり、円礫面を打撃しているわけではない。2は長さ8.9cm・幅8.0cm・厚さ4.1cm・重さ273.3gである。この接合状態は第182図1に示すが、意図的な打撃で割れたのではない。

第182図 2は個別図はないが7B区のVII b層から出土した2点の剥片が接合した状態である。これらは同一の打撃で割れたものである。自然面を一部に残している。長さ7.8cm・幅9.4cm・厚さ3.0cm・重さ153.5gである。



第 182 図 7B区VI・VIIb層出土石器接合図



ナイフ形石器 (第183図1・3)

7B区からはナイフ形石器が5点出土した。

1は長さ4.6cm・幅2.8cm・厚さ0.9cm・重さ10.6gである。II層出土。基部は剥片打撃面の片面から二次加工され、片側の側辺は背つぶし加工されている。素材の剥片は打面に対し、先端が斜め方向に存在する。ノの字形剥片を利用した今峠型ナイフ形石器である。

3は4枚並べた中央左図にあるように素材剥片は翼状剥片であることを示す剥離方向が残る。国府型ナイフ形石器である。長さ6.2cm・幅2.0cm・厚さ0.9cm・重さ9.1g。

5は剥片の打点方向を先端にした切出し型ナイフ形石器である。素材の形状を相当小さくなるまで二次加工剥離をおこなっている。長さ6.6cm・幅2.5cm・厚さ1.1cm・重さ12.2g。

三稜尖頭器 (第183図2)

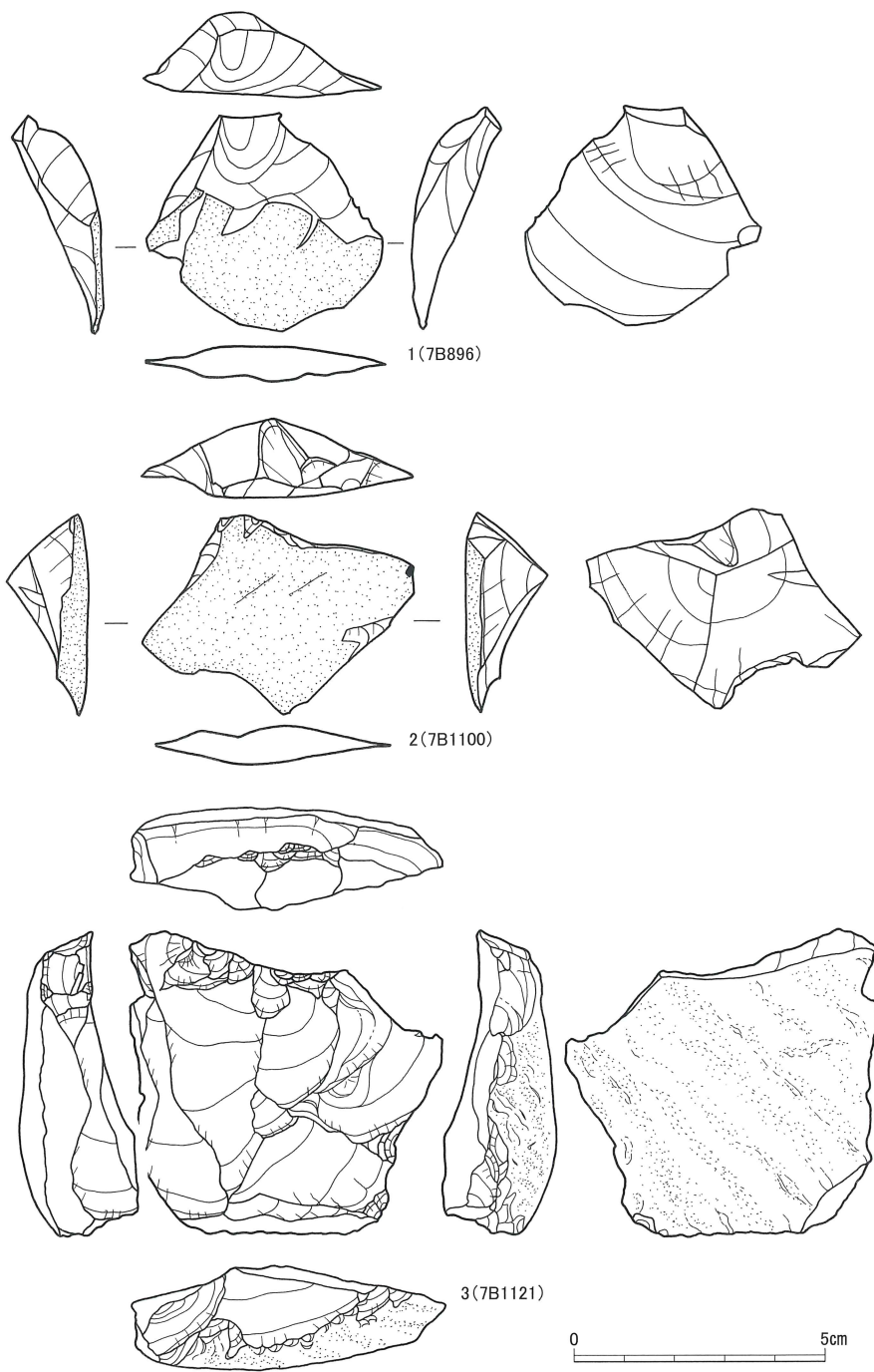
2は横長の剥片を素材とする三稜尖頭器の失敗品である。二次的剥離は主要剥離面側に広く行われ、背面は片側だけである。長さ5.5cm・幅2.5cm・厚さ1.4cm・重さ13.1g。

調整剥片 (第183図4)

4は剥片の側辺を両面から加工し、目的物を剥離する前段階として剥ぎ取った調整剥片か。長さ7.3cm・幅2.3cm・厚さ1.2cm・重さ16.5g。

第184図3はV層出土の石核である。この破片の主要剥離面は右下に残る左上方向からの剥離痕跡がある面である。自然面が片側全体にあり、表皮近くで剥ぎ取られた剥片を石核として用いたのである。長さ5.2cm・幅6.2cm・厚さ2.2cm・重さ83.8g。

第183図 7B区IV層出土石器



第 184 図 7B区IV層出土石器

第185図 1～3はⅢ層から出土した石核である。

1は剥片である。石核を割った状態のままになった剥片である。長さ6.0cm・幅4.6cm・厚さ4.4cm・重さ96.3gである。

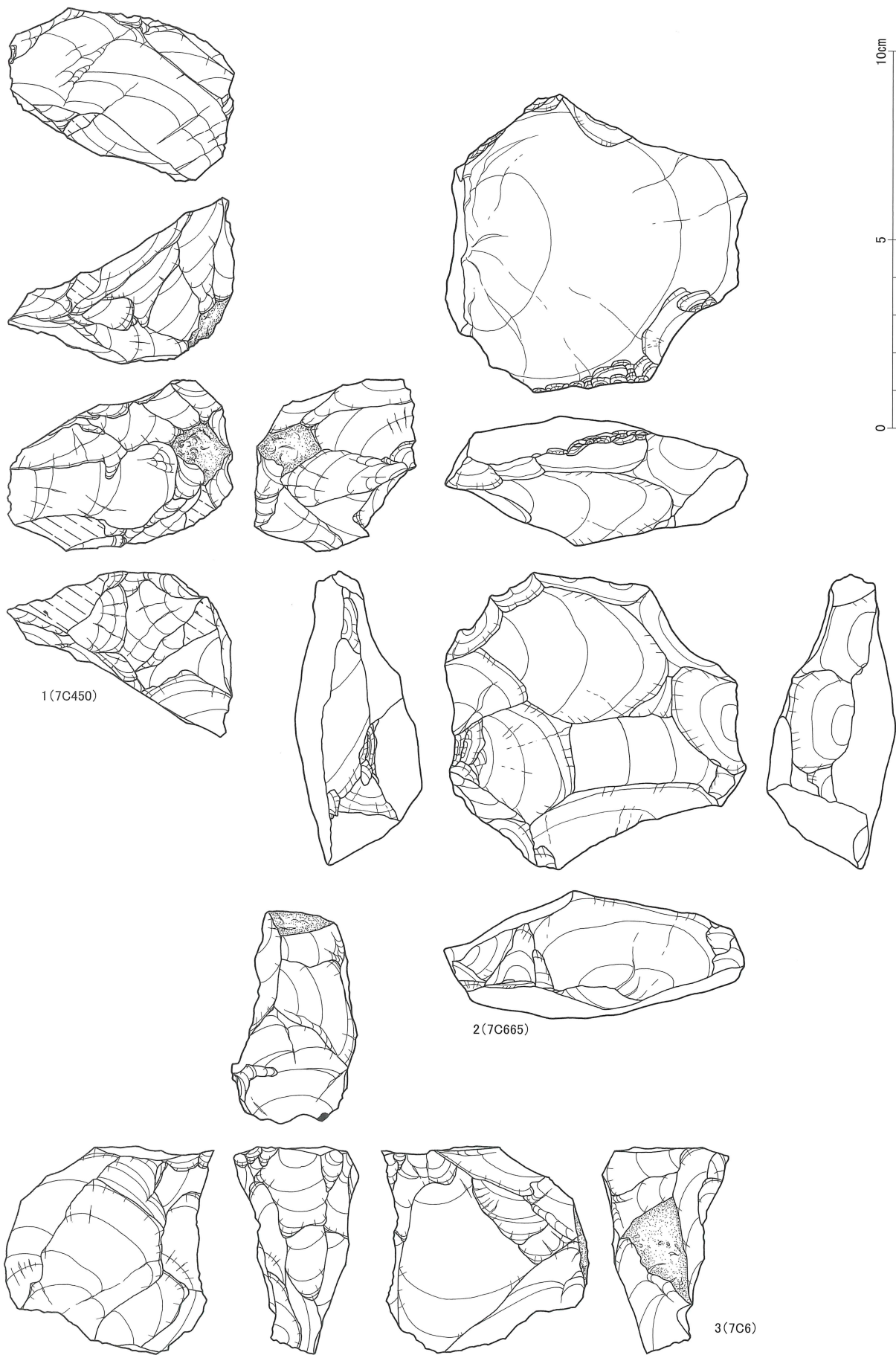
2は自然面を残さない剥片を用いた石核である。背面下端には剥片を剥取した面が2枚、剥片石核の打面右側にも剥離痕跡がある。右側の側面図・主要剥離面側の図に示すように、縁辺部には刃こぼれがある。長さ7.7cm・幅7.7cm・厚さ3.4cm・重さ203.5gである。

3はⅢ層出土の一側面に自然面を残す石核である。長さ5.5cm・幅3.3cm・厚さ5.6cm・重さ98.0gである。第186図1～3の剥片はⅢ層出土で接合する。その接合状態が第187図2である。

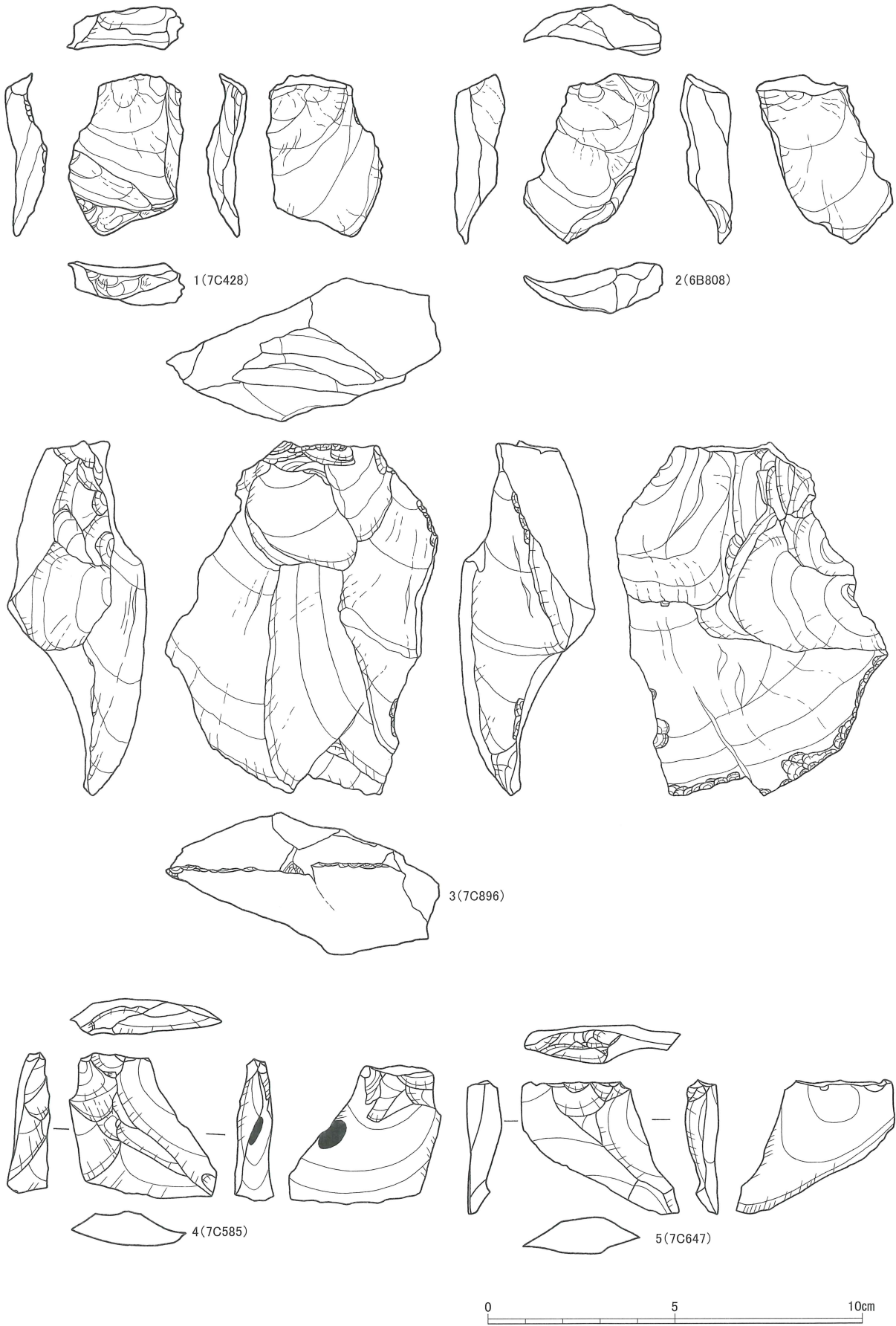
3点の剥離順序は2→1→3であり、3の剥片が出来た後、主要剥離面側が小さく二回打ち割られたのが1・2である。1は長さ4.0cm・横3.0cm・厚さ0.8cm・重さ10.3g。2は長さ4.1cm・幅3.8cm・厚さ0.9cm・重さ

13.0g。3は長さ9.3cm・幅6.9cm・厚さ3.7cm・重さ181.4g。

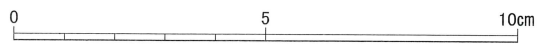
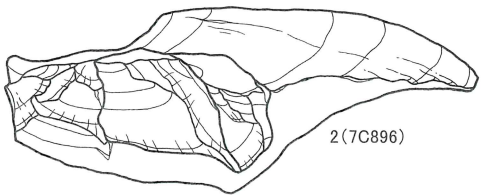
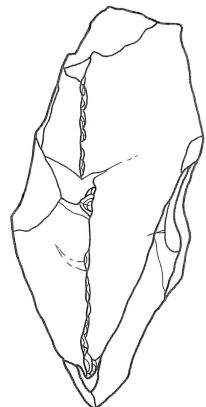
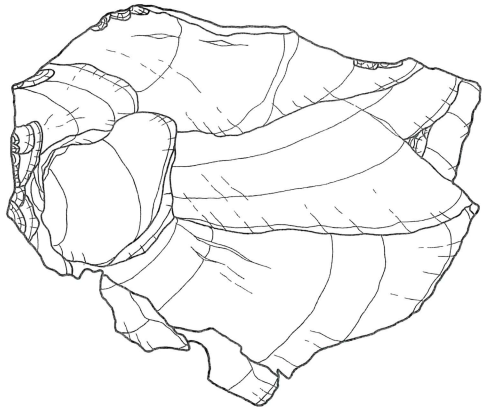
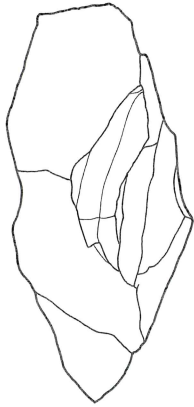
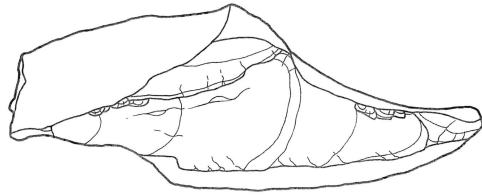
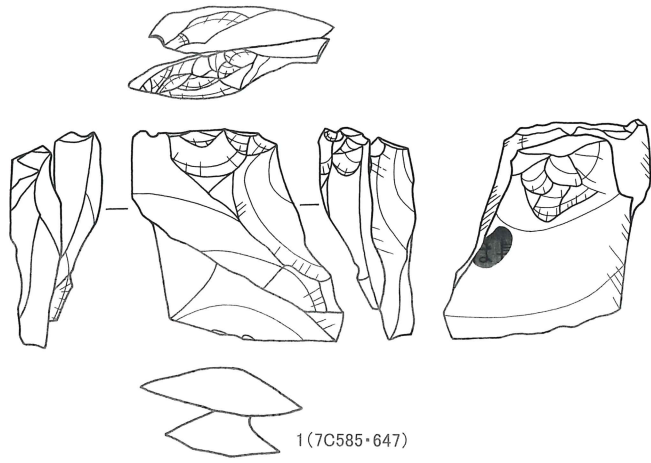
第186図 4・5は7C区のⅢ層から出土し、接合する剥片である。第187図がその接合状態である。二つは同じ平面の打面を共有する。



第 185 图 7C区Ⅲ層出土石器



第 186 図 7C区他Ⅲ層出土接合資料



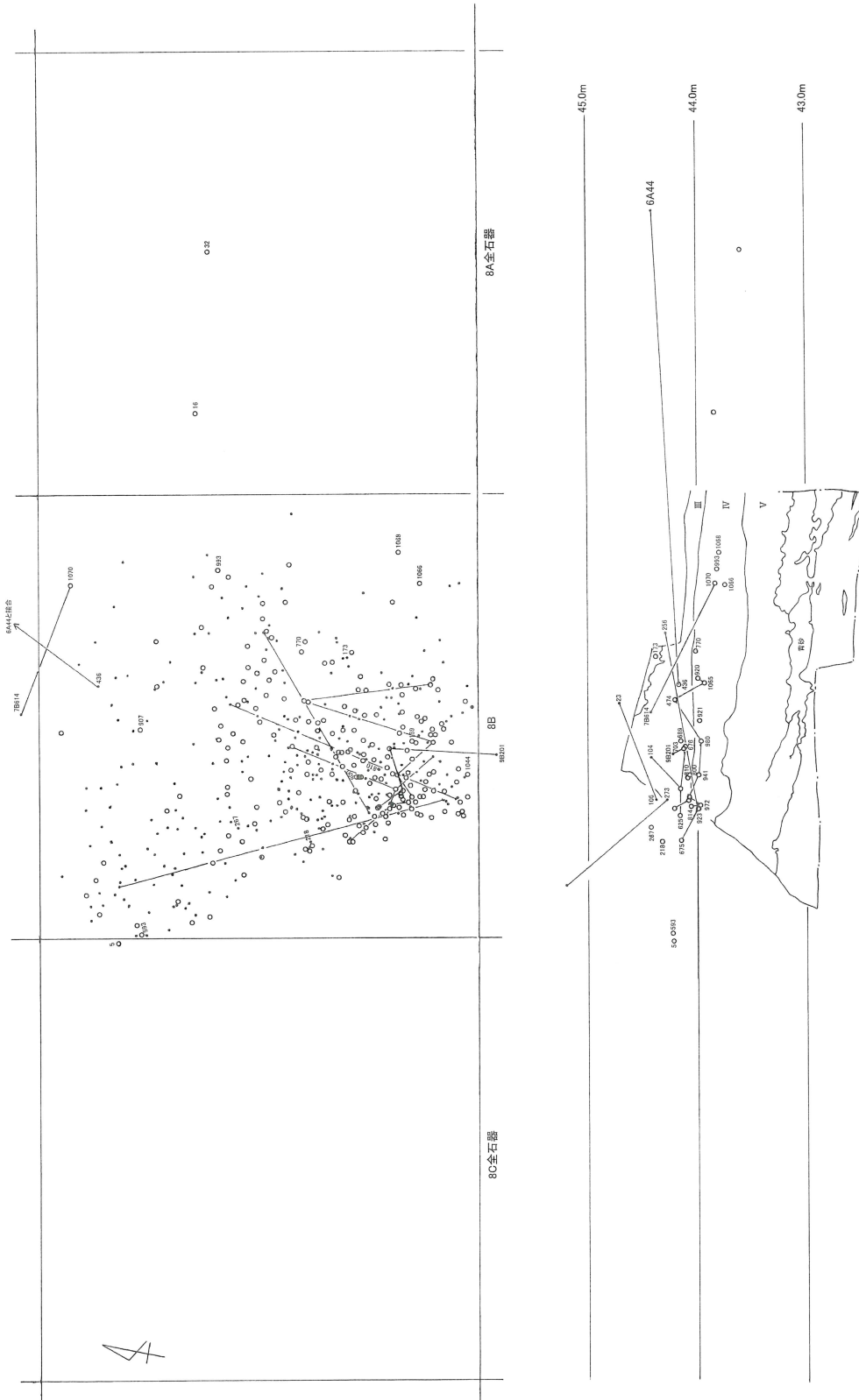
第 187 图 7C区Ⅲ層出土接合資料

8区の調査

8区はA区の東部、B区の南西部が欠け、C区は北東部の小範囲だけである。微地形的なあり方は他と同様西から東に向かい少し傾斜している。

石器の分布状態

遺物はⅢ層（分布図では小さい点で示す）とⅣ層から主に出土したが、全体的な分布状態は8B区南西部に量



第 188 図 8区出土石器分布図

的な中心がある。包含層内の上下動は連続的に出土しており、Ⅲ層下部からⅣ層上部に量的に多い。

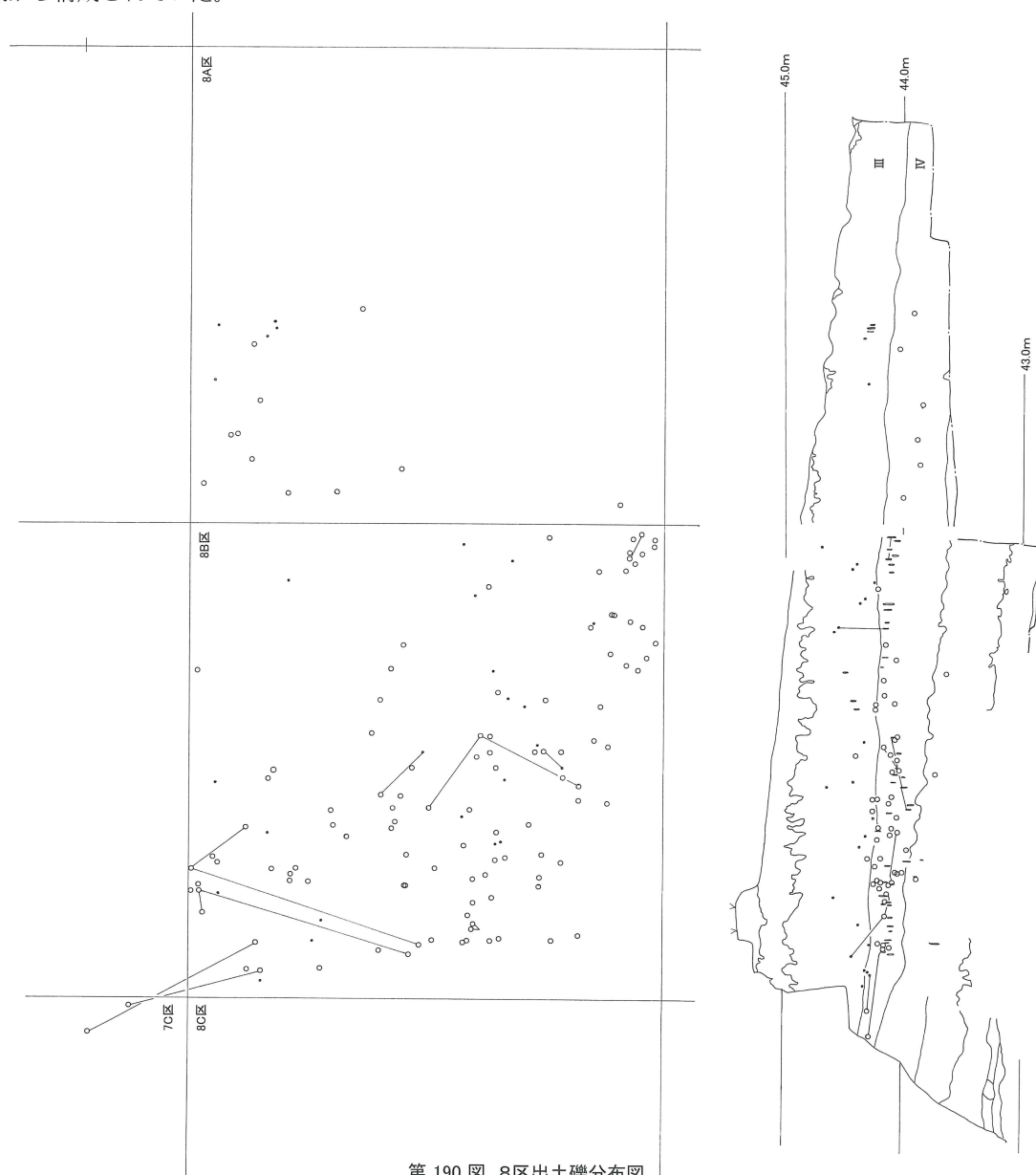
礫の分布状態

8区ではB区の北東部と南西部に礫の分布が少ない状態だった。また、A区では北西部にだけ分布する状態だった。C区ではB区寄りにわずかに出土した。第188図にはⅢ層出土の礫を小さい点で示し、Ⅳ層出土の礫を白丸で示した。Ⅲ層の礫は面的にまとまる様子は認められず、包含層中に散漫存在した。Ⅳ層では標高44.1m付近に面的に並ぶ状況が見られ、割れた礫が8B区内で接合する例がいくつか存在する。また、7C区の礫と接合する例も二例あった。

8区の集石

8区1号集石

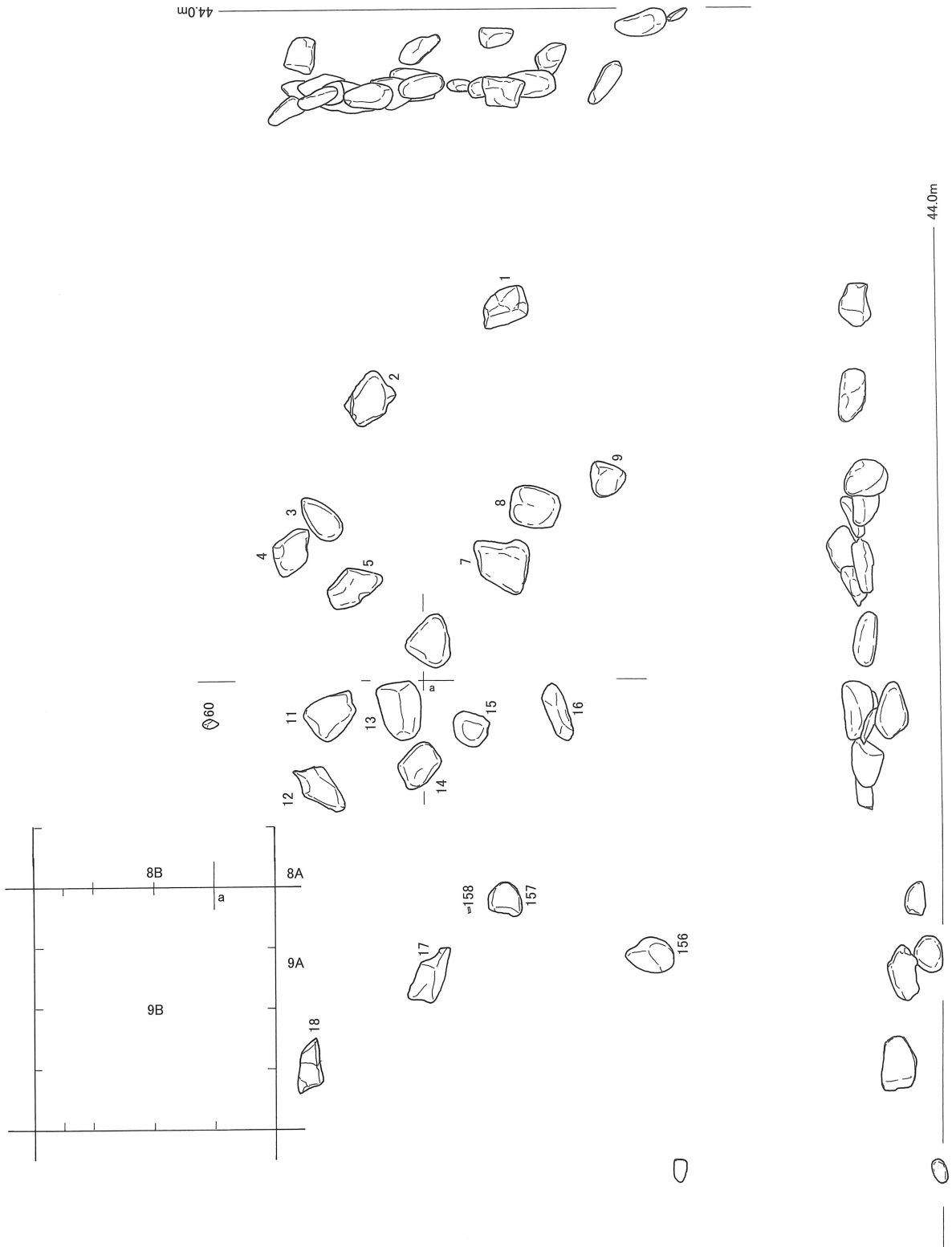
8B区南東部から9B区北東部にかけてⅣ層中に面的に礫が集中する部分があり、8B・9B区集石として実測した(第191図)。礫の分布する範囲は南北2.7m・東西1.2mであり、標高44.1mの地面にほぼ水平に並んだ状態で検出した。この面がある時点の生活面であったと考えられる。礫の個数は19個で、長さ20cm前後の大きさの礫から構成されていた。



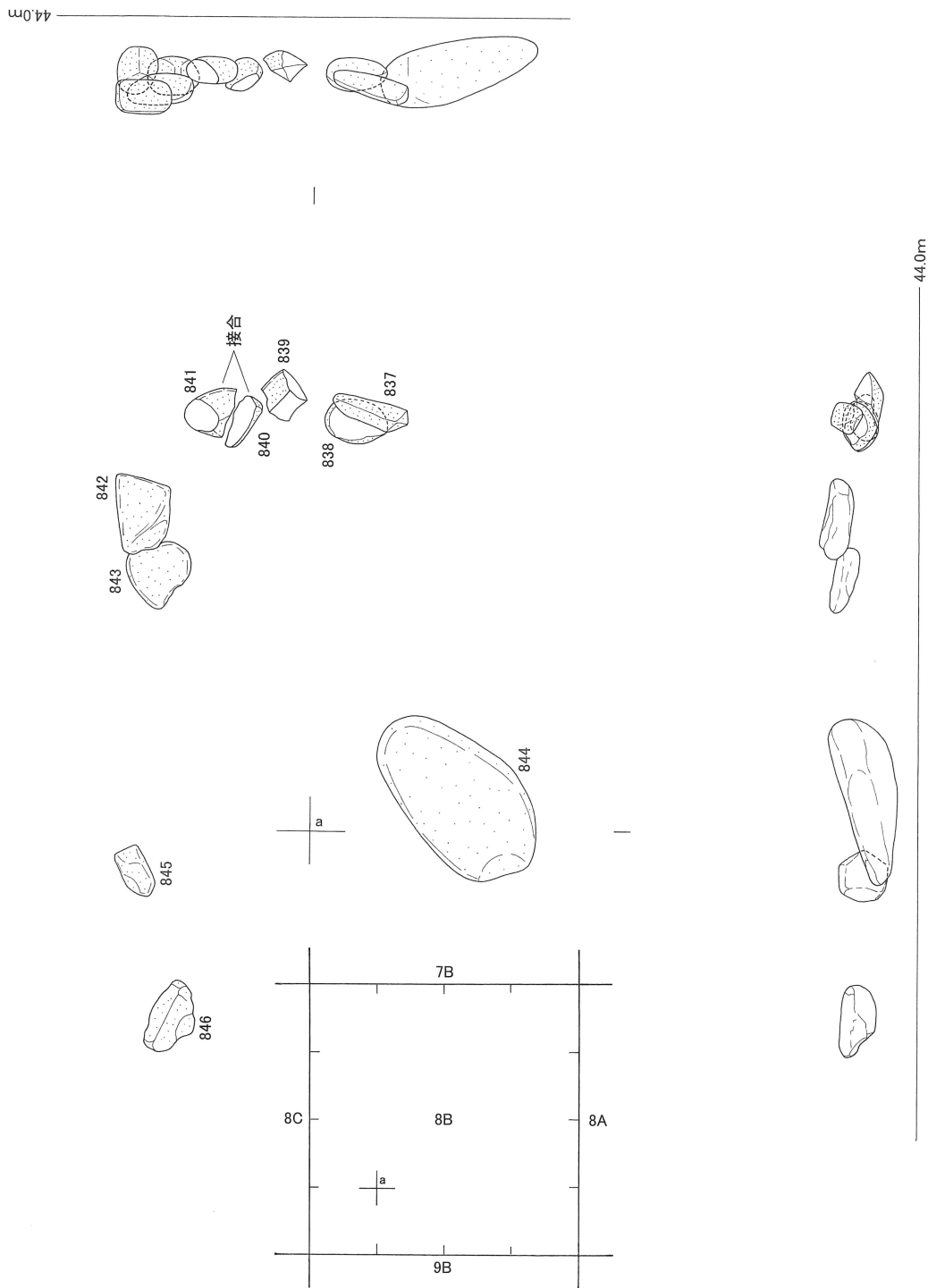
第190図 8区出土礫分布図

2号集石

1号集石に接するような平面的な場所に検出したのが12号集積である。番号は前後するがこちらを先に検出した。標高44.2m前後にこの礫が平面的に並ぶ状態で出土。礫の分布する範囲は南北1.4m・東西1.2mである。



第 191 図 8B・9B区Ⅲ層の礫群



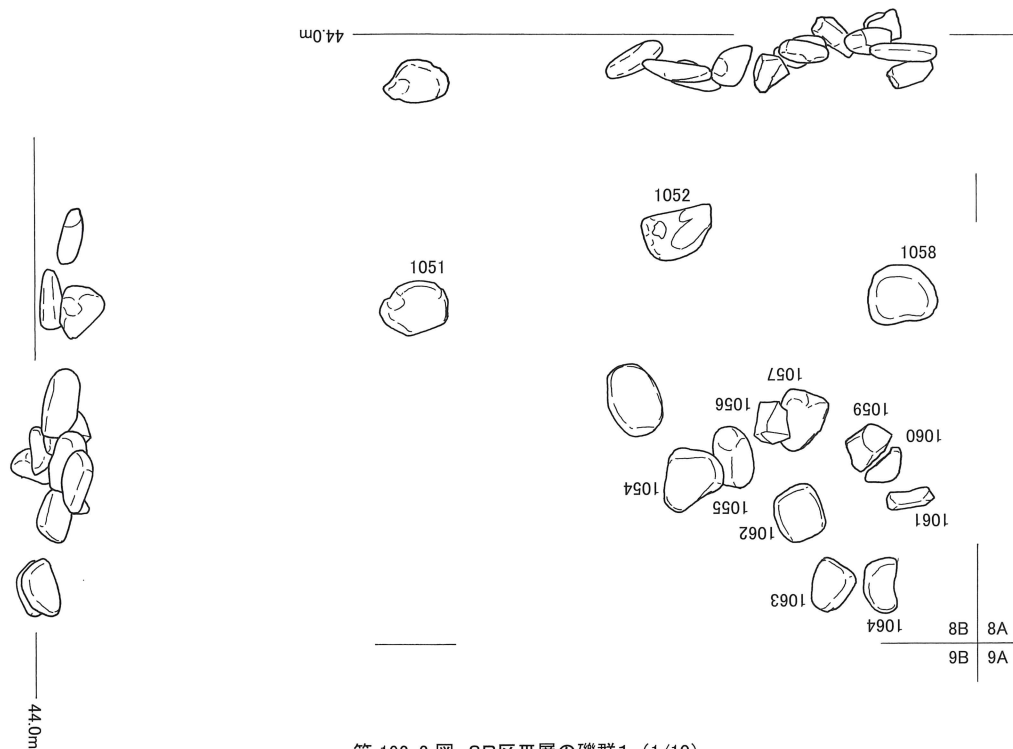
第 192-1 図 8B区IV層の礫群

3号集石

8B区の南西隅で検出した集石である。1号・2号と近接した位置で検出したが、3号はやや低い標高の44.0m付近を地面とする状態で検出した。14個の礫が南北1.0m・東西1.4mの範囲に分布したものである。

4号集石

8B区の南西部で検出した礫のまとめりである。長さ29cm・幅17cm・厚さ7.7cmの楕円形の円礫が南西部にあり、その北西と南西にあった礫を一連のものとして図化した。これらは標高44.1m前後の面に並んで出土した。



第 192-2 図 8B区Ⅲ層の礫群1 (1/10)

8区出土石器②

ナイフ形石器

(第195図1・3・6・8~11)

8A区・8B区から出土したナイフ形石器・三稜尖頭器をここで説明する。

1は8A区のIV層から出土した。剥片の基部を半円形に整形し、そこから先端に向けて一側辺に背つぶし加工している。長幅比の小さいずんぐりした形態である。長さ4.1cm・幅2.0cm・厚さ0.8cm・重さ5.6g。

3は8B区のIV層から出土した。片側の盛り上がった剥片を用い、打点の片側を整形、相対する辺も整形加工している。長さ4.9cm・幅1.7cm・厚さ1.1cm・重さ6.2g。

6は8B区のIV層から出土した。上下逆転で図示しているが側辺の片側を半分以上背つぶし加工している。片側を整形、相対する辺も整形加工している。長さ4.5cm・幅1.9cm・厚さ0.9cm・重さ5.2g。

8は8B区のⅢ層から出土した。横長剥片を素材にしている。剥片の打点は二次加工に消されている。長さ7.3cm・幅2.6cm・厚さ1.3cm・重さ19.4g。

9は刃部がまるく湾曲したナイフ形石器である。8B区のIV層から出土した。片側を整形、相対する辺も整形加工している。長さ4.0cm・幅1.7cm・厚さ0.6cm・重さ4.0g。

10は8B区のIV層から出土した。縦長剥片を利用し、剥片の打点側を基部にしている。基部と一側辺に二次加工が行われている。長さ5.9cm・幅2.0cm・厚さ0.9cm・重さ6.7g。

11は先端を欠損したナイフ形石器で、8B区のIV層から出土した。素材となった剥片は縦長ではなく、不整形である。長さ3.6cm・幅1.8cm・厚さ0.7cm・重さ5.4g。

三稜尖頭器 (第195図2・4・5・7)

2は8B区のⅢ層から出土した。分厚い剥片の長軸に沿った片側を利用し、断面三角にする二次加工 剥離は一側辺だけに行われている。図上端部には自然面が残る。反対側の折れた端付近は尖らせようとする作業がうか

がわれる。長さ5.2cm・幅2.0cm・厚さ1.9cm・重さ19.1g。

4は8B区のIV層から出土した。横長の剥片を素材に四面に加工を加え整形している。先端部には自然面が残る。片方は欠損している。

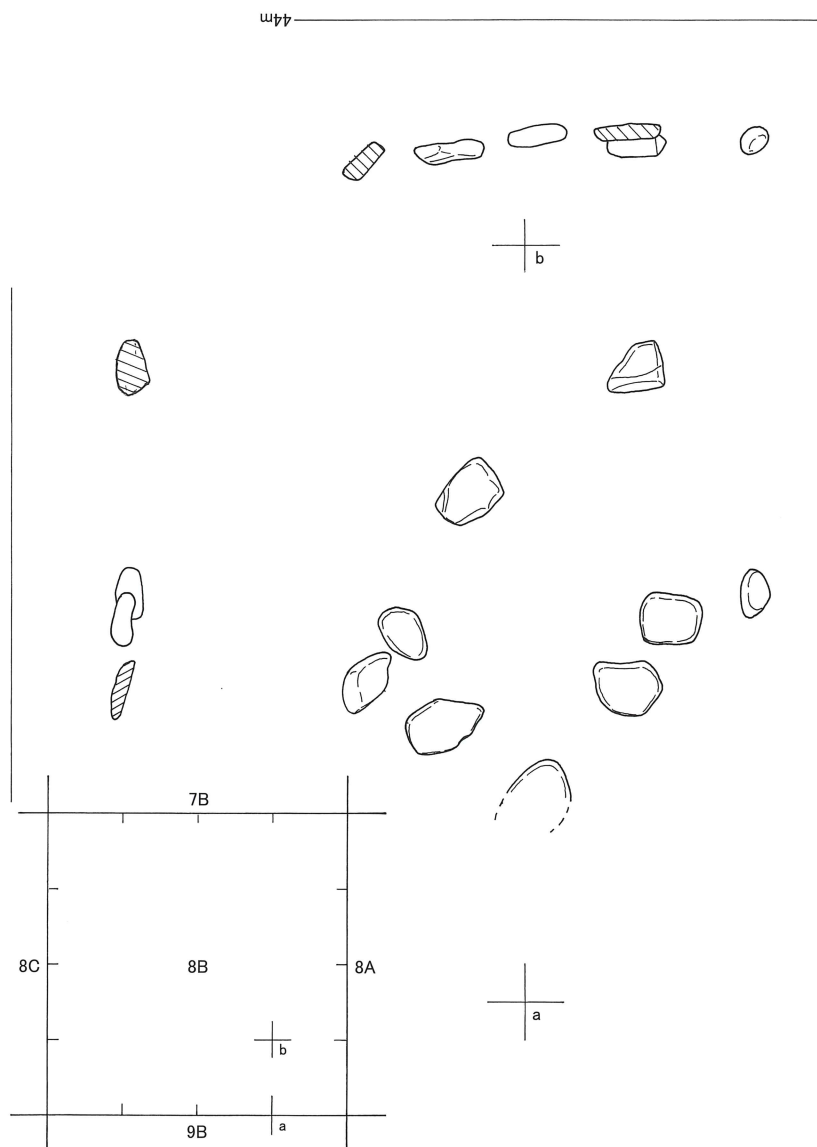
5は8B区のIII層から出土した。横長の剥片を素材としたらしい。未だ断面が三角形にならず、整形途中の四角形の段階で破損したものである。長さ4.9cm・幅1.7cm・厚さ1.4cm・重さ13.4g。

7は8B区のIV層から出土した。横長剥片を素材とした石器である。器面調整剥離は4面にあるが、剥片の形状を反映し片側が盛り上がり、三稜尖頭器としておきたい。長さ5.6cm・幅2.0cm・厚さ1.3cm・重さ11.7g。
第196図1～4はIII層下部(1・4)・IV層(2・3)から出土した接合資料で、その接合状態が第197図2である。接合図のC面右側に接合したのが第196図2と4であり、反対側に接合したのが第196図1である。接合状態の最大幅は10.5cmある。

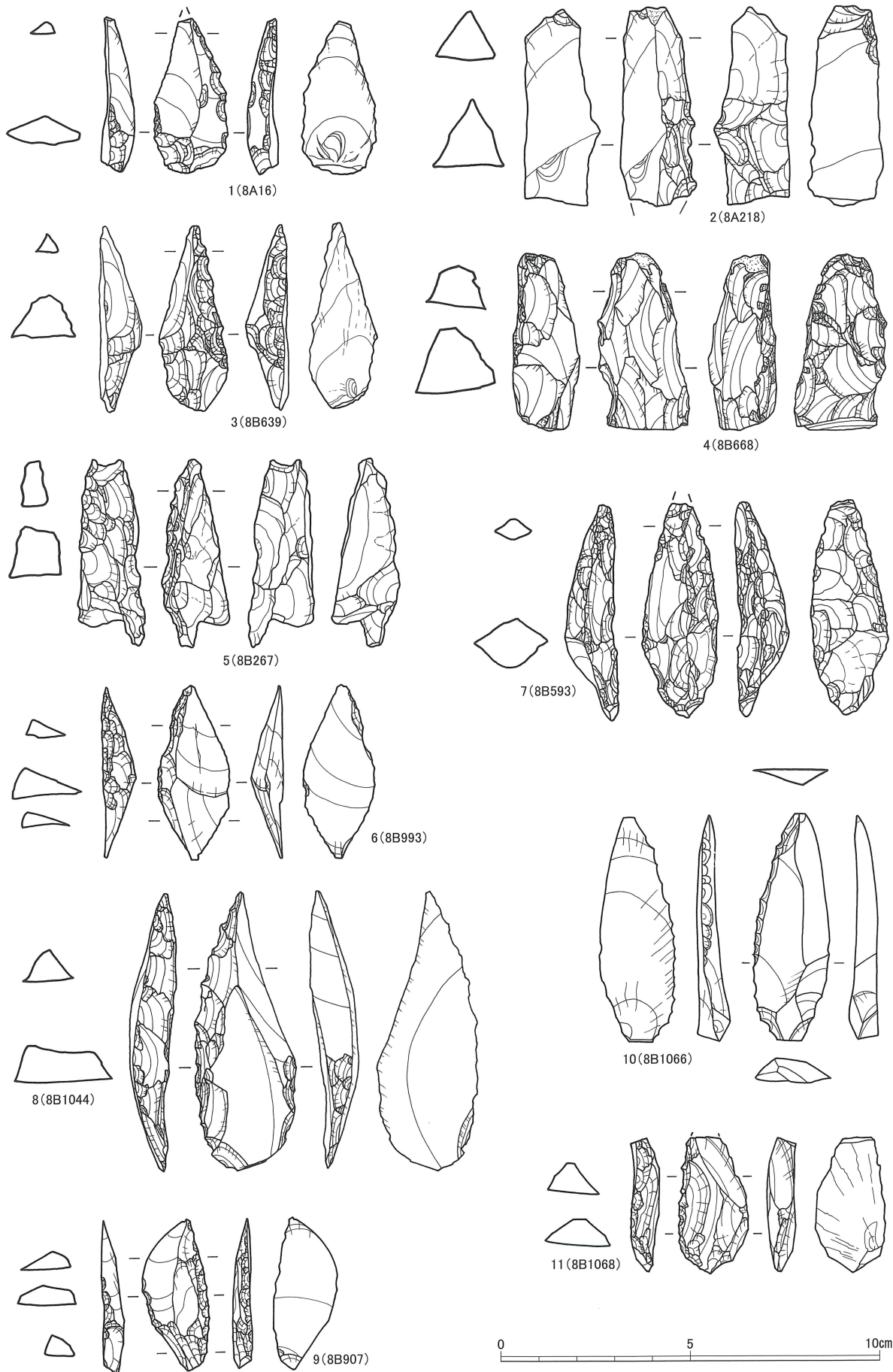
1は長さ4.9cm・幅1.7cm・厚さ1.1cm・重さ6.2g。

2は長さ3.8cm・幅2.0cm・厚さ0.9cm・重さ5.7g。これは一側辺だけに背つぶし加工し、ナイフ形石器としていた。ナイフの基部は剥片端部だがこの剥片は打点の位置が分からない。

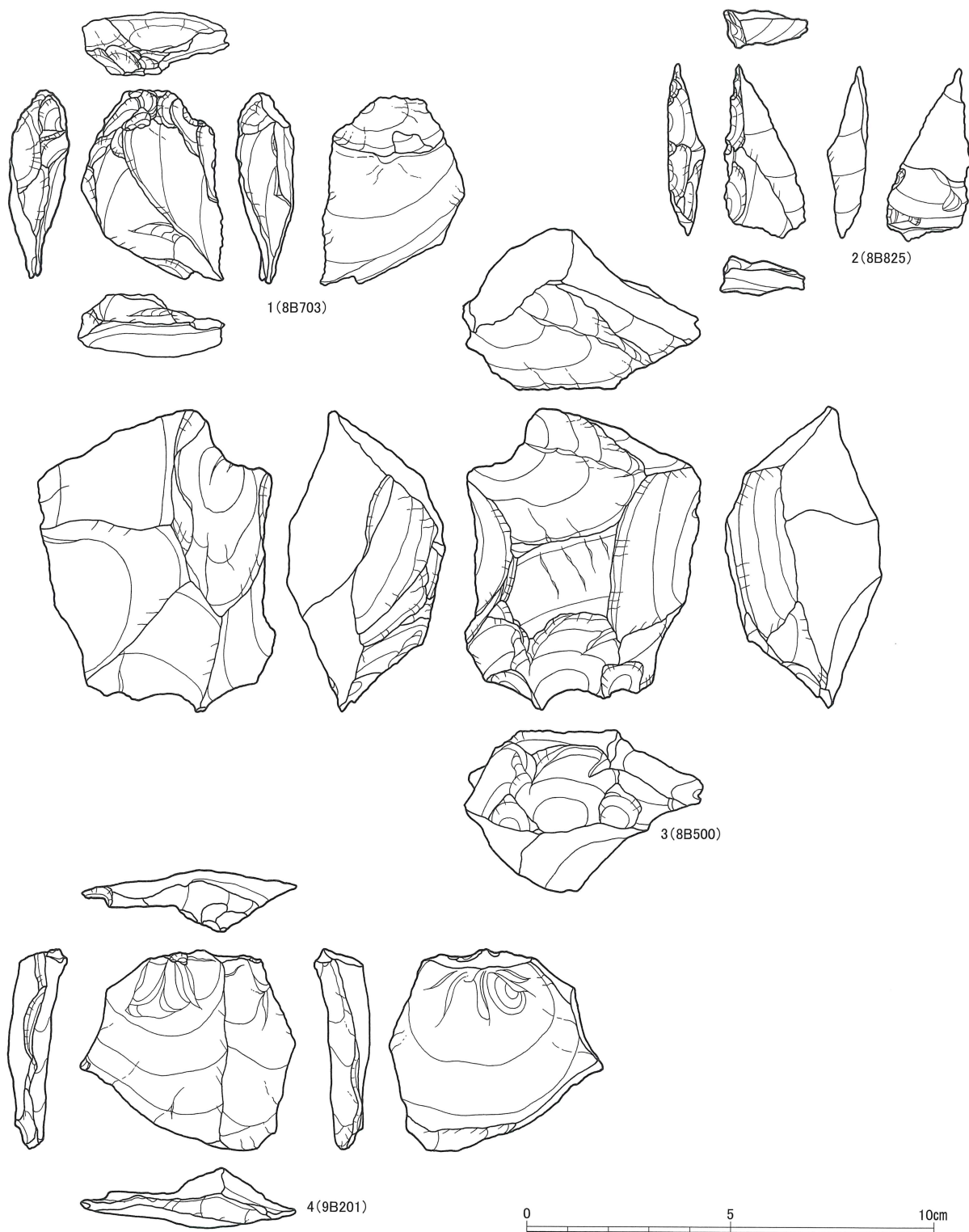
3は最終的な石核である。縁辺から中心に向かう剥離が全周囲で行われたため、鋭い稜線が廻る。長さ37.0cm・幅5.8cm・厚さ3.9cm・重さ135.7g。



第193図 8B区III層の礫群2



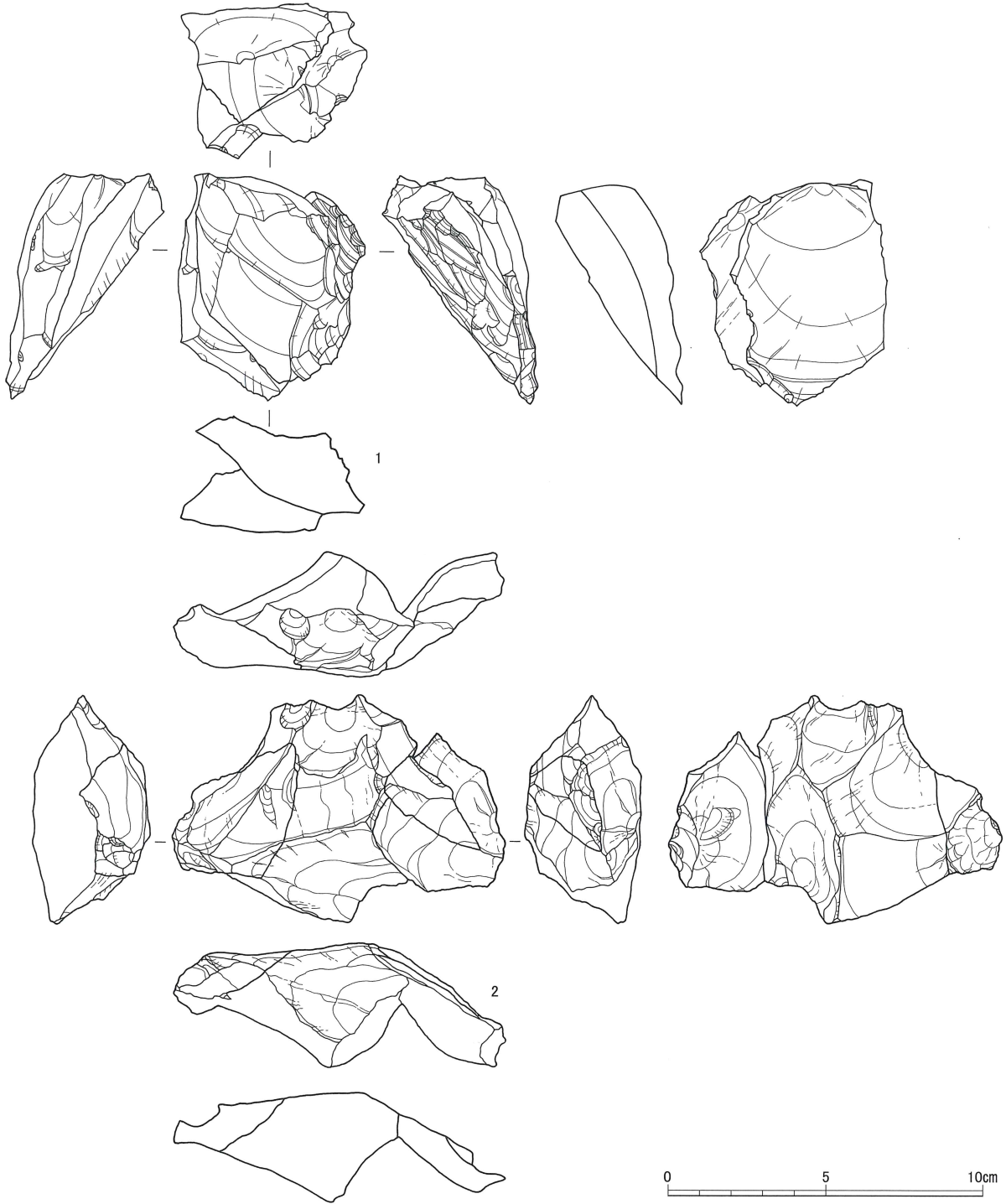
第 195 图 8A·B区Ⅲ·Ⅳ層出土石器



第196図 8B・9B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料

4はC面で石核の右部に接合する剥片である。長さ4.7cm・幅5.1cm・厚さ1.5cm・重さ24.6g。第197図1は個別図第200図1・2の剥片の接合状態である。1は長さ7.0cm・幅5.0cm・厚さ3.8cm・重さ64.7gである。2は長さ4.9cm・幅8.2cm・厚さ3.1cm・重さ78.5gである。2点とも自然面のない剥片で2の次に1を剥離している。

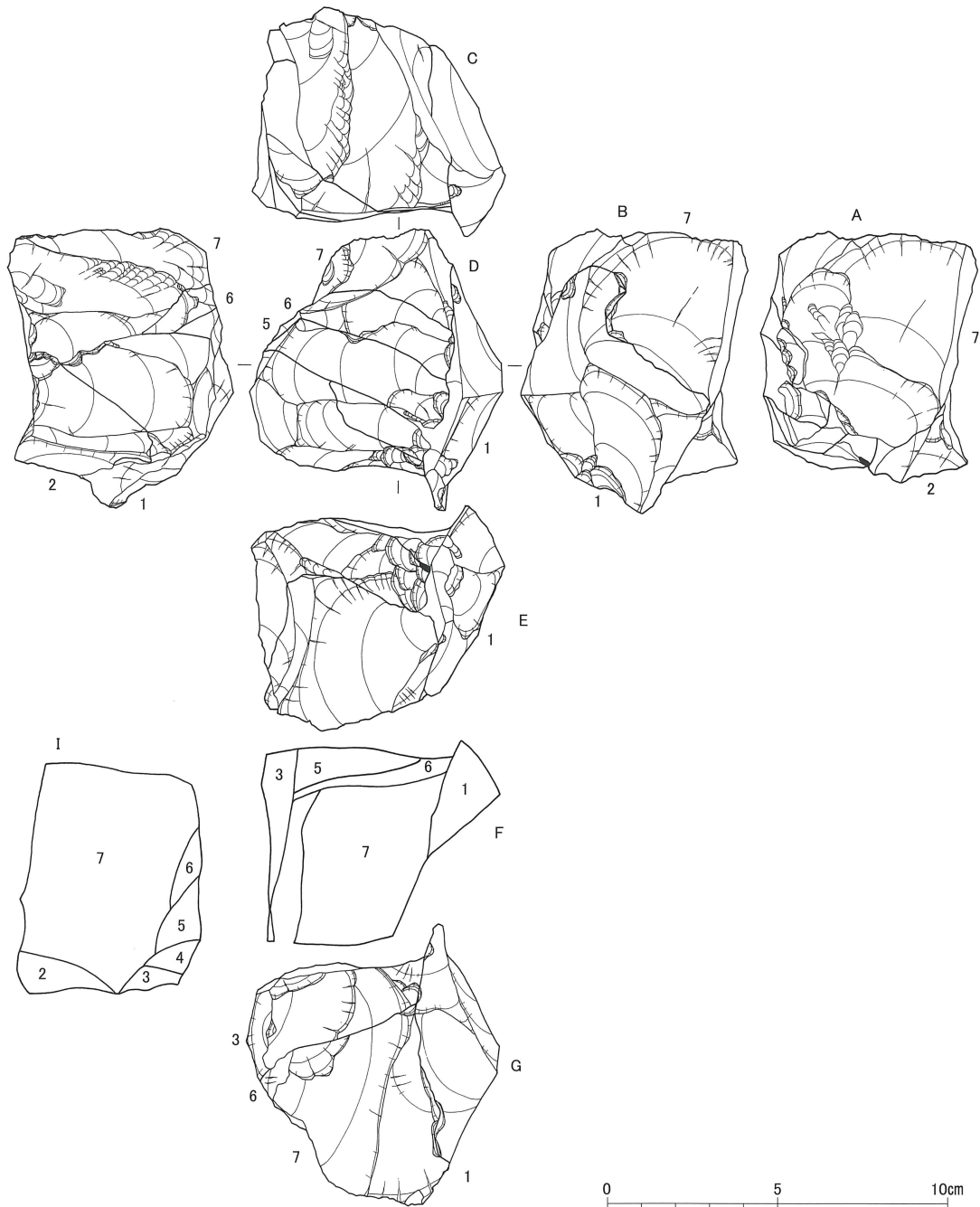
第197図は8B区出土資料で、全体は長さ7.5cm・幅8.3cm・厚さ7.5cm・重さ366.5gである。各部分をA～Iとし



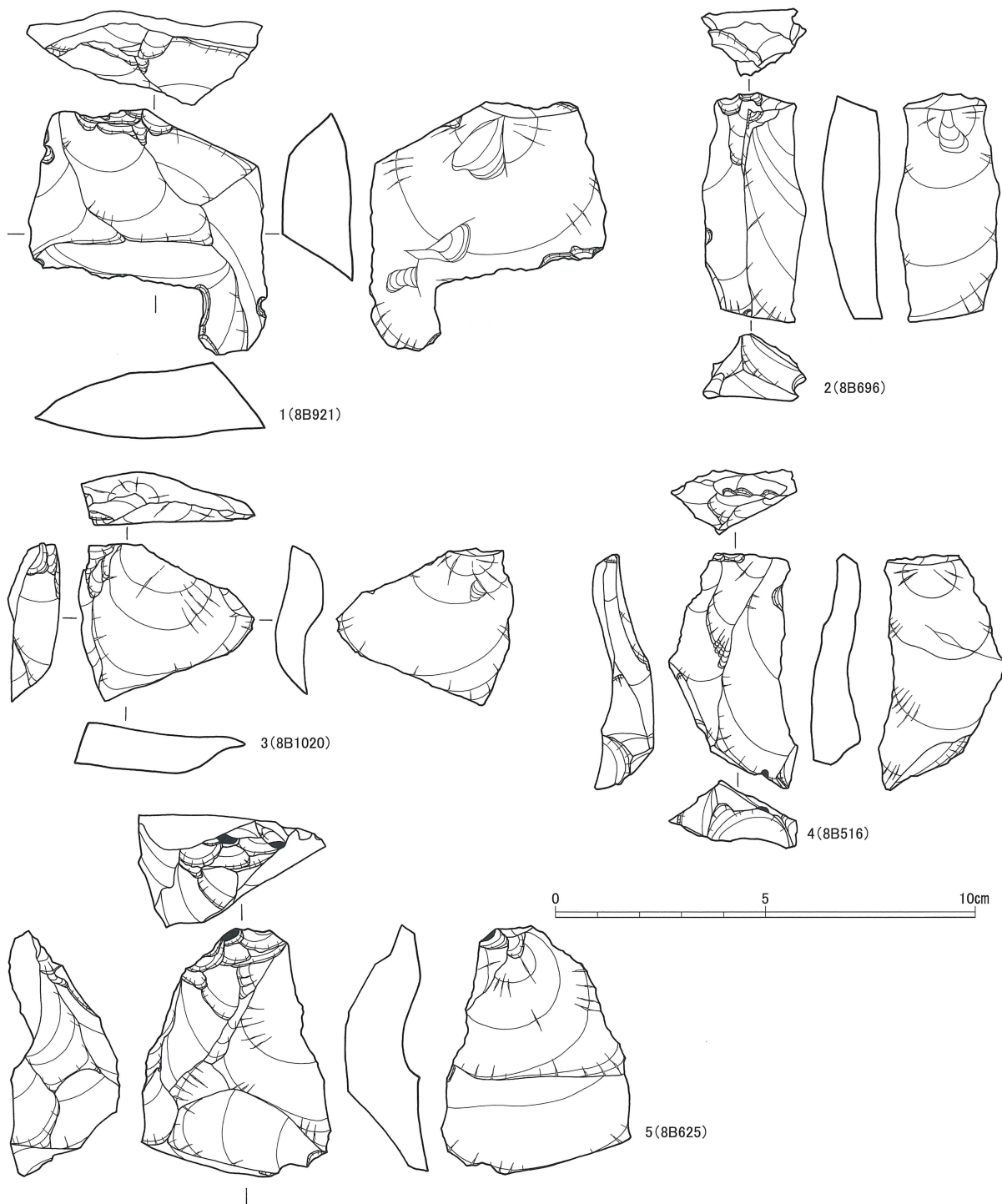
第 197-1 图 8B·9B区Ⅲ·Ⅳ層出土石器接合图

て説明する。第197図1はこの接合群で最初に剥離された部分である。第197図1は個別図の第198図1で、剥離面を打撃して得た剥片である。1の剥離後、生じた平坦面を打撃して出土しなかった剥片を得、次に1の反対側を打撃して2(第199図1)→3(第198図5)を剥いでいる。再び打面を元に戻って1の側から3→4(第198図3)→5(第198図2)→6(第198図4)の順に剥離。3から6には共通の打撃面が残る。第199図1は一側縁に使用痕跡の刃こぼれがある。最後に残った7(第199図2)は長さ5.9cm・幅6.6cm・厚さ4.2cm・重さ173.8gである。

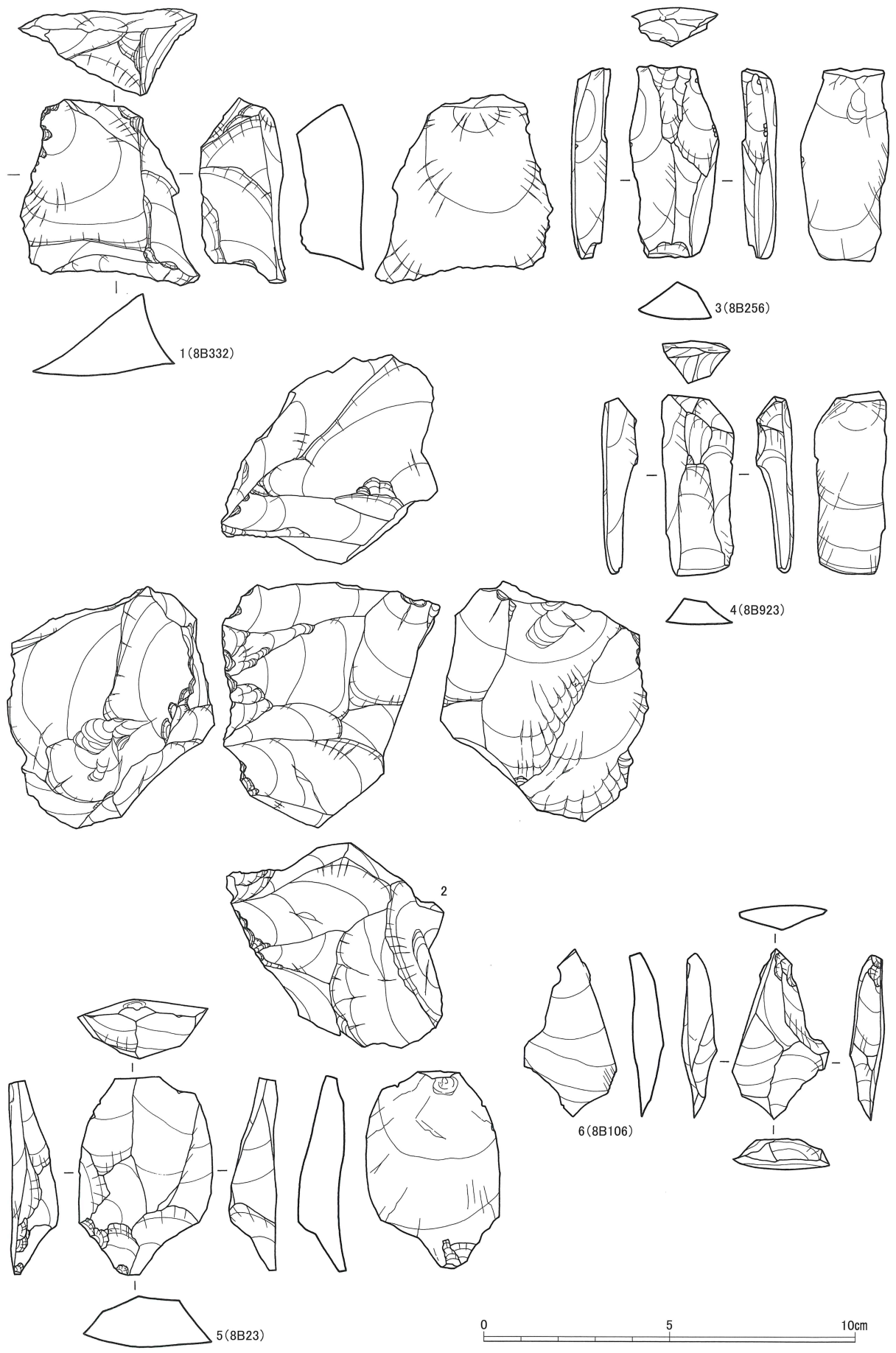
第199図3・4は8B区出土の接合する縦長剥片である。接合状態は第203図2に示した。3はⅢ層、4はⅣ層から出土した。剥離の順番は3→4である。剥離は天地逆の方向からなされている。3は長さ5.1cm・幅2.4cm・厚さ0.9cm・重さ13.1g。4は長さ4.9cm・幅1.9cm・厚さ1.0cm・重さ10.2g。第199図5・6は8B区のⅢ層から出土した接合する剥片である。その接合状態を第204図5に示す。ふたつの剥離順序は小さい方が図の下方から、次に大きい剥片を上方から剥離している。5は長さ5.3cm・幅3.6cm・厚さ1.3cm・重さ26.2g。6は長さ4.5cm・幅2.6cm・厚さ0.9cm・重さ7.5g。



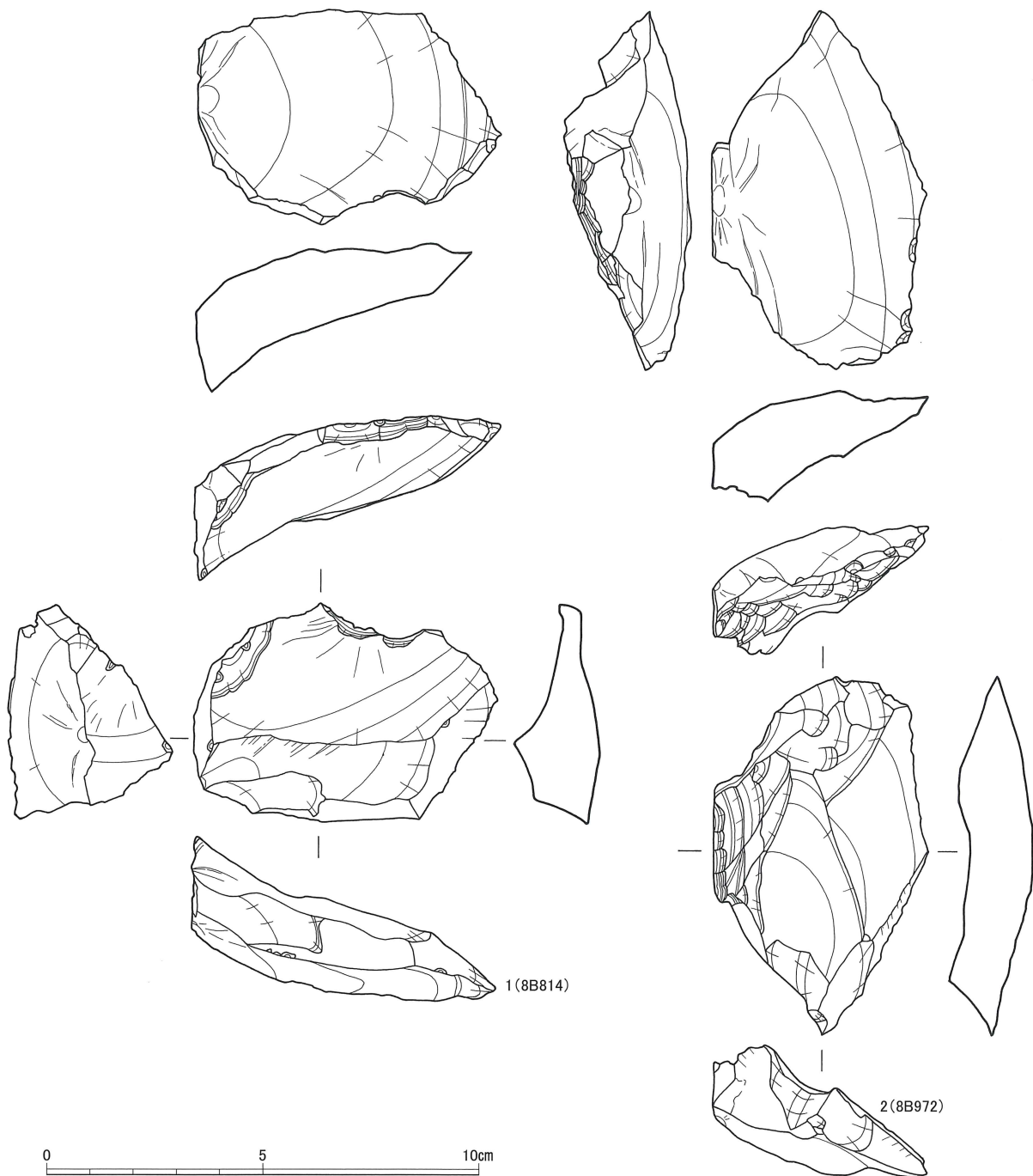
第197-2図 8B・9B区Ⅲ層出土石器接合図



第 198 图 8B区Ⅲ·Ⅳ層出土接合資料



第 199 圖 8B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料



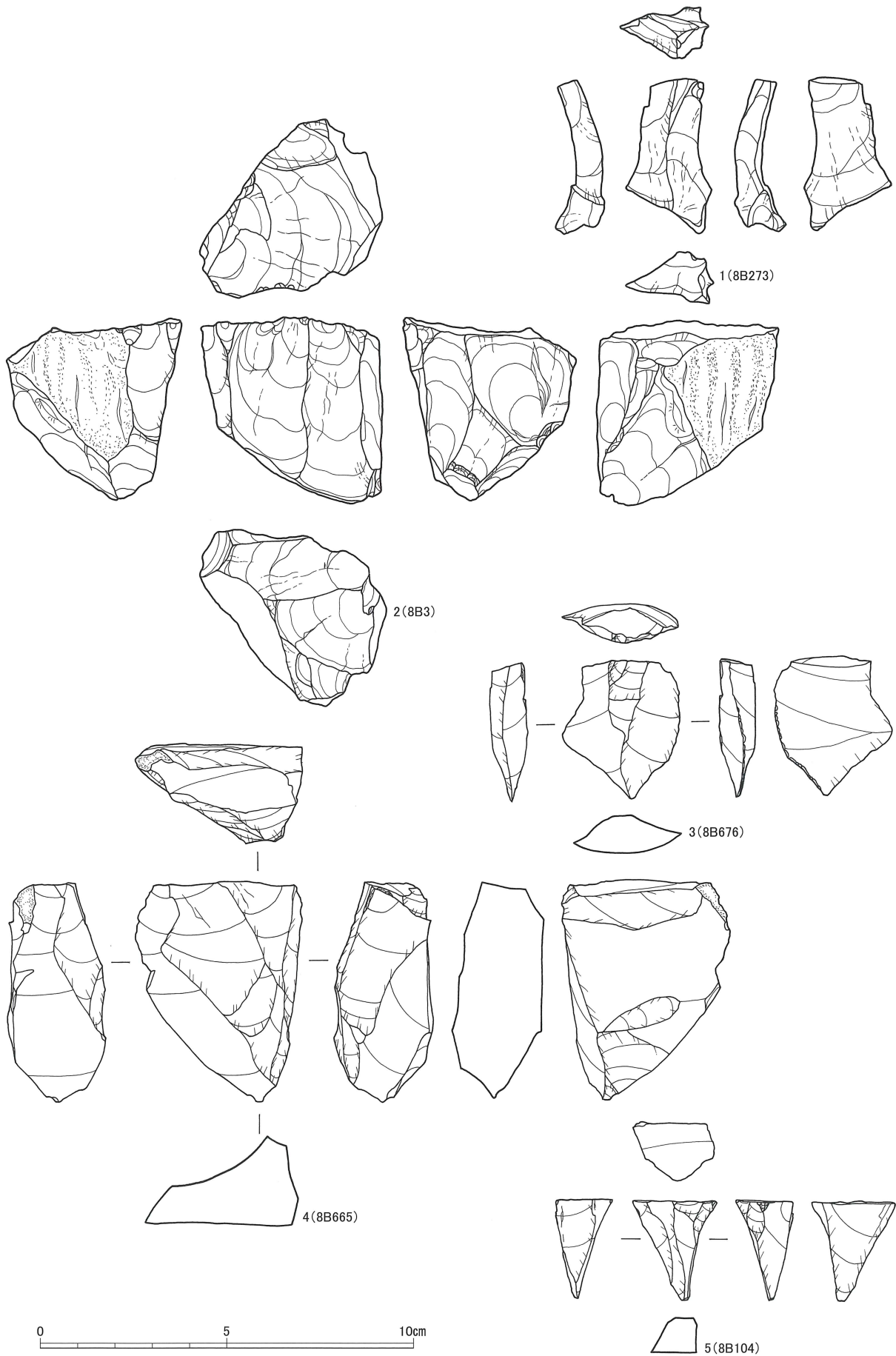
第200図 8B区Ⅲ・Ⅳ層出土接合資料

第201図3～5は8B区のⅢ層出土で接合する。第203図に接合状況を示す。剥離順は5→3→4である。3は長さ5.7cm・幅4.6cm・厚さ2.7cm・重さ66.4g。4は長さ2.6cm・幅2.2cm・厚さ1.5cm・重さ5.6g。5は長さ3.7cm・幅3.1cm・厚さ1.1cm・重さ0.9g。

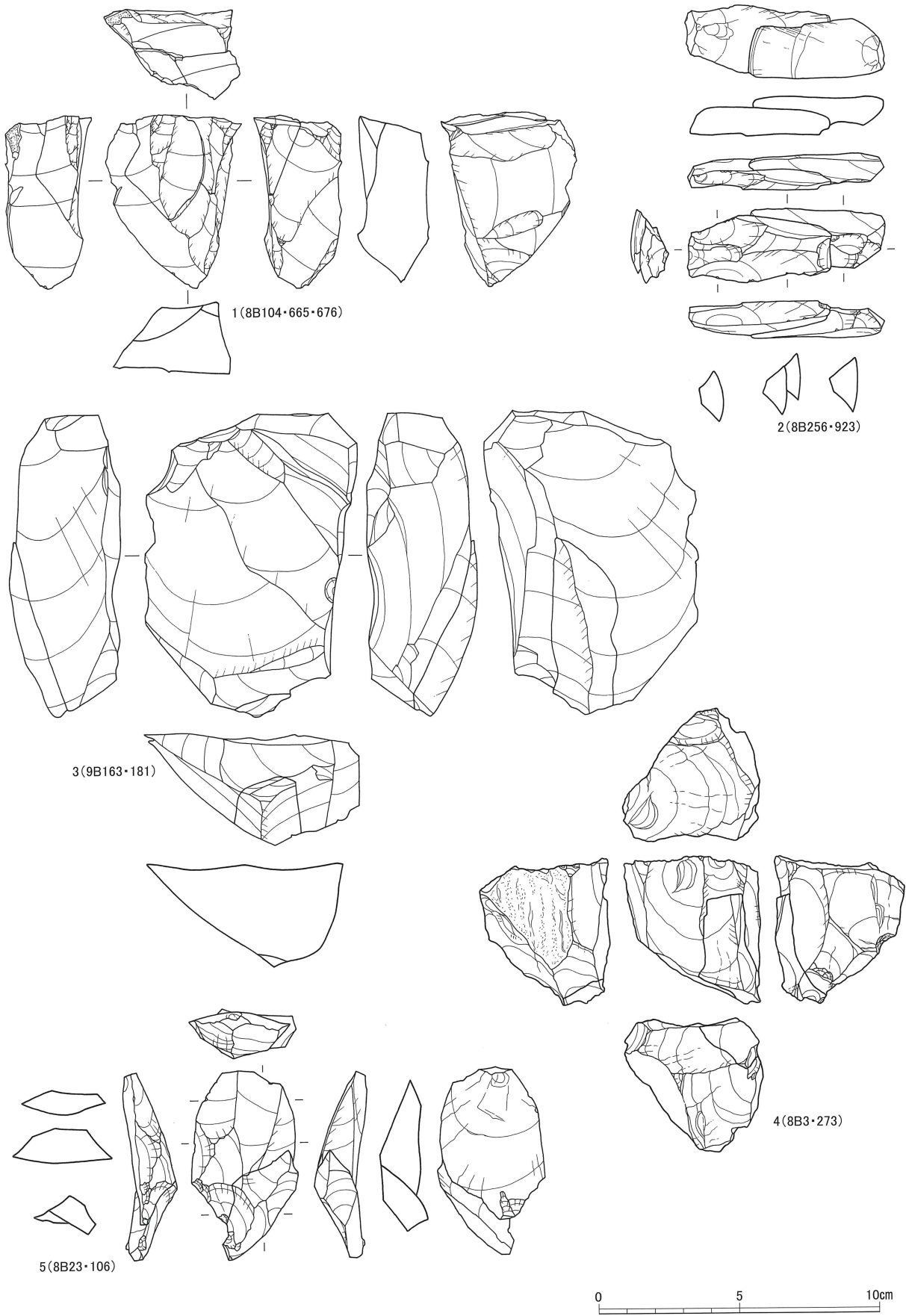
第202図1・2は石核(2)と接合する剥片(1)である。

1は剥片上部の打撃点側が欠けている。長さ4.1cm・幅2.4cm・厚さ1.0cm・重さ6.2g。

2は円礫を分割した面を打面として縦長の剥片を剥離し、他の面では異なる方向から剥片剥離している。長さ4.6cm・幅4.8cm・厚さ4.5cm・重さ108.4g。



第 201 图 8B区Ⅲ層出土接合資料



第 204 图 8B·9B区Ⅲ層出土石器接合图

9 区の調査

9B区では中央から北部にかけてⅢ・Ⅳ層を中心に、また一部はⅤ層・Ⅶ層からも遺物が出土した。

Ⅲ・Ⅳ層を中心とする一群は直径3m弱の範囲に分布し、石材には黒い縞の入る青白から灰色を基調としたチャートが8点存在した。また、佐賀県腰岳産黒曜石が4点出土した。すべて1g未満の小片である。

Ⅶ層の遺物は南部中央の小範囲に集中するので10B区にまで拡げて調査した結果2点の石器がみられた。この中で接合関係があったのは9B区163と181とであった。163が下位の遺物集中部よりも35cmほど上位にあり、浮き上がったらしい。

Ⅵ層の9B179は長さ8cmほどの片面全体に礫面を残す剥片で、長い側辺に使用痕刃毀れが並ぶ。青味がかった部分と淡い褐色部とに分かれるので他に小片2点(Ⅴ層)が同一個体と判明。

Ⅵ層出土の9B182～185・186、10B8は接合しないが同一個体で、184は石核、他は剥片である。

第210-2図1は9B区Ⅵ層出土の使用痕を一側辺にもつ剥片。3はⅦa層出土。剥片の打面を叩いて二個の剥片を打ち剥いでいる。

9区は調査区の形が台形状で北部が幅広く、南部は狭い。微地形的なあり方は他と同様西から東に向かい少し傾斜している。遺物はⅢ層(分布図では小さい点で示す)とⅣ層から主に出土したが、下位のⅤ層(パミスが多い層)・Ⅵ層・Ⅶ層からも少量出土した。最下層は標高42.634mで採り上げた9B184(石核)である(第210-3図1)。

石器の分布状態

9区の石器出土状態は区の中央南部に集中する傾向が認められる。第205図は出土石器の分布状態である。集団としてはⅢ層からⅣ層上半部に幅をもって散布しつつ平面的には分布の中心がある傾向をもつ。従ってⅢ層・Ⅳ層上部の石器は意味のあるまとまりととらえる。なお、礫はこの位置で積極的にまとまりを認めるほどではなかった。

9B区Ⅲ・Ⅳ層石器群には流紋岩以外に腰岳産とみられる漆黒の黒曜石片が4点(9B57・9B60・9B62・9B85)含まれる。大きさは1cm代の剥片である。出土標高は上下に20cm以内に収まり、平面的には0.3m×1.8mの範囲に広がる。

これとは別に白い斑点の混じる黒曜石が1点出土した。この種の黒曜石は津留遺跡ではこの1点だけである。

また、黒い縞の入ったチャート剥片が8点(9B9・9B28・9B50・9B54・9B94・9B111・9B114・9B129)この一群の中央に含まれ、上下ばらばらの高さに出土した上下幅は48cmである(標高44.175m～43.687m)。大きさは2、3cm大で、板状の形状をなし、同一母岩の可能性もあるが接合はしない。同様のチャートは3B区に10点、3B区に1点、4A区に1点、6B区に2点出土している。

9区出土石器

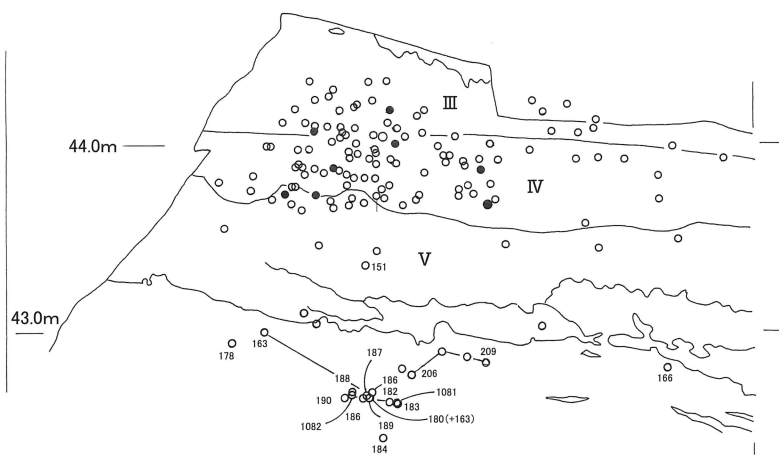
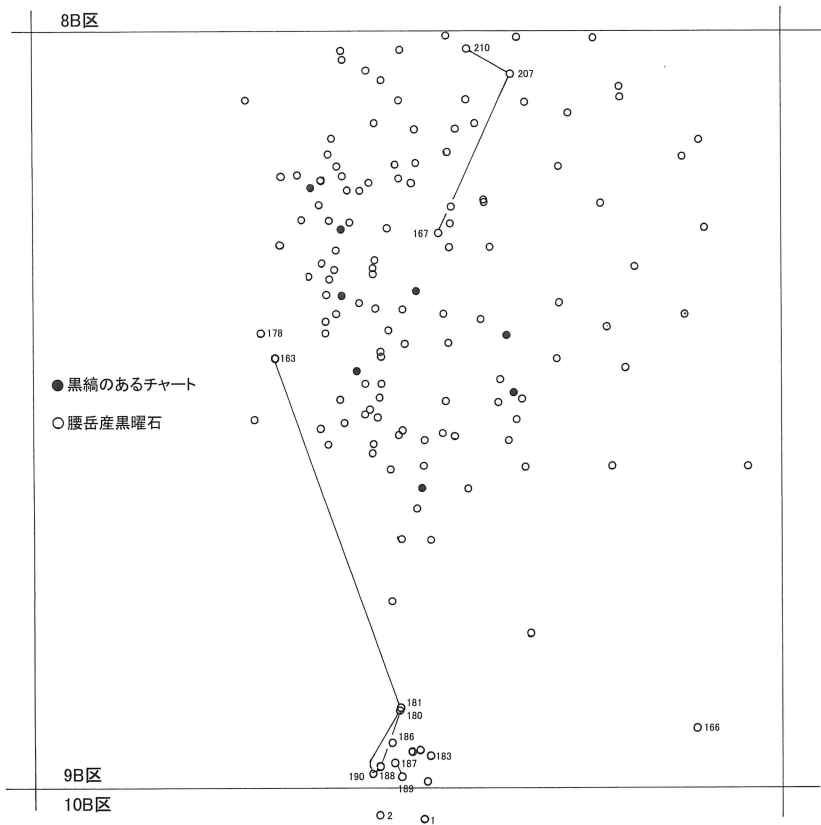
第205図1～4はⅣ層から出土した。

1は9B区出土のナイフ形石器である。図の下は欠けている。長さ4.6cm・幅2.3cm・厚さ0.7cm・重さ7.1g。

2は片面に広く自然面を残す石核で、この破片の主要剥離面が下端にみられる左上方向からの剥離痕跡を残すので、外皮近くのなら剥片を石核にしたものである。長さ7.2cm・幅7.1cm・厚さ2.9cm・重さ174.4g。

3は9B区のⅤ?層から出土した。横長ざ剥片をもちい、素材の打面は背つぶし加工で消滅している。長さ3.8cm・幅2.3cm・厚さ0.9cm・重さ7.2g。

4は影どこにも自然面を残さない石核である。方向を転換しながら多方向から剥片を打ち剥いでいる。長さ4.4cm・幅5.4cm・厚さ4cm・重さ114.5g。



第 205 図 9B区出土石器分布図

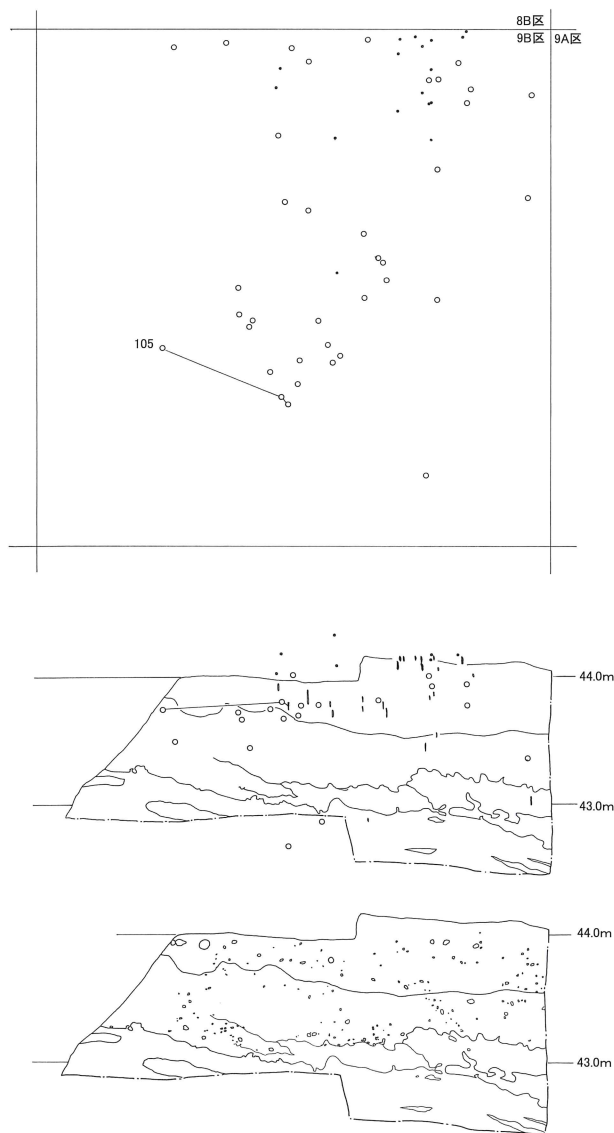
第208図1・2は9B区V層・VII層出土の流紋岩石核と剥片の接合する資料である。(9B163)は自然面を残さない厚手の剥片を石核として用いたもので、表面は通常の風具合である。パミスを多く含んだV層の標高43.009mから出土した。これにVII層から出した2の剥片(9B181)が接合する(第204図3)。石核1の突角部が剥ぎ取られたものがある。第210-3図に示すVII層の例と同じく、2は褐色気味の色を呈する。接合状態ではさ10.7cm・幅7.6cm・厚さ3.9cm・重さ332.5g。

出土した標高は42.662mであり、V層の石核1とは34cmの上下差が認められる。平的には197cmの空間が空いていた。堆積状態を推定すると恐らく、時々川の流に攪乱されるような環境だったのではなかろうか。V層やVII層の旧石器人は川岸のすぐそばで石製作を行ったのであろう。層的にはVII層が古そうに見えるが、時間差はほとんどないと考えべきだろう。

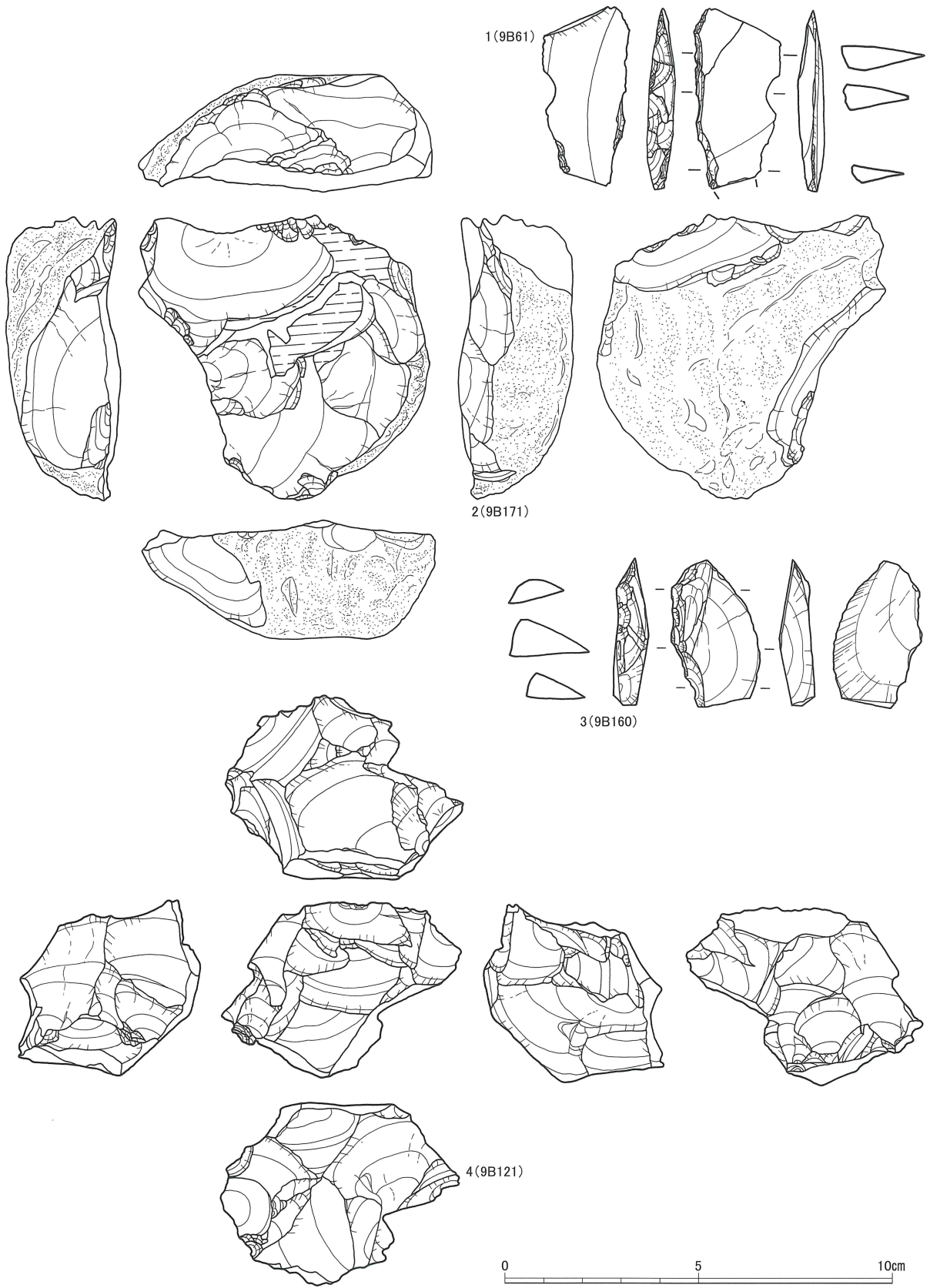
第210-2図4はVII層の直上層出土の握斧状石器。片面の剥離面が広く、摺理面が重なる石材のため階段状になっている。

他に9B区VII層から同一個体から割られたとみられる石器が4点、そばの10B区から1点出土している。接合はしない。包含層の影響を受けているらしく表面が薄く褐色味を帯びた流紋岩である。図化したのは石核(第210-3図1)と剥片(第210-3図2)の各1点ずつである。

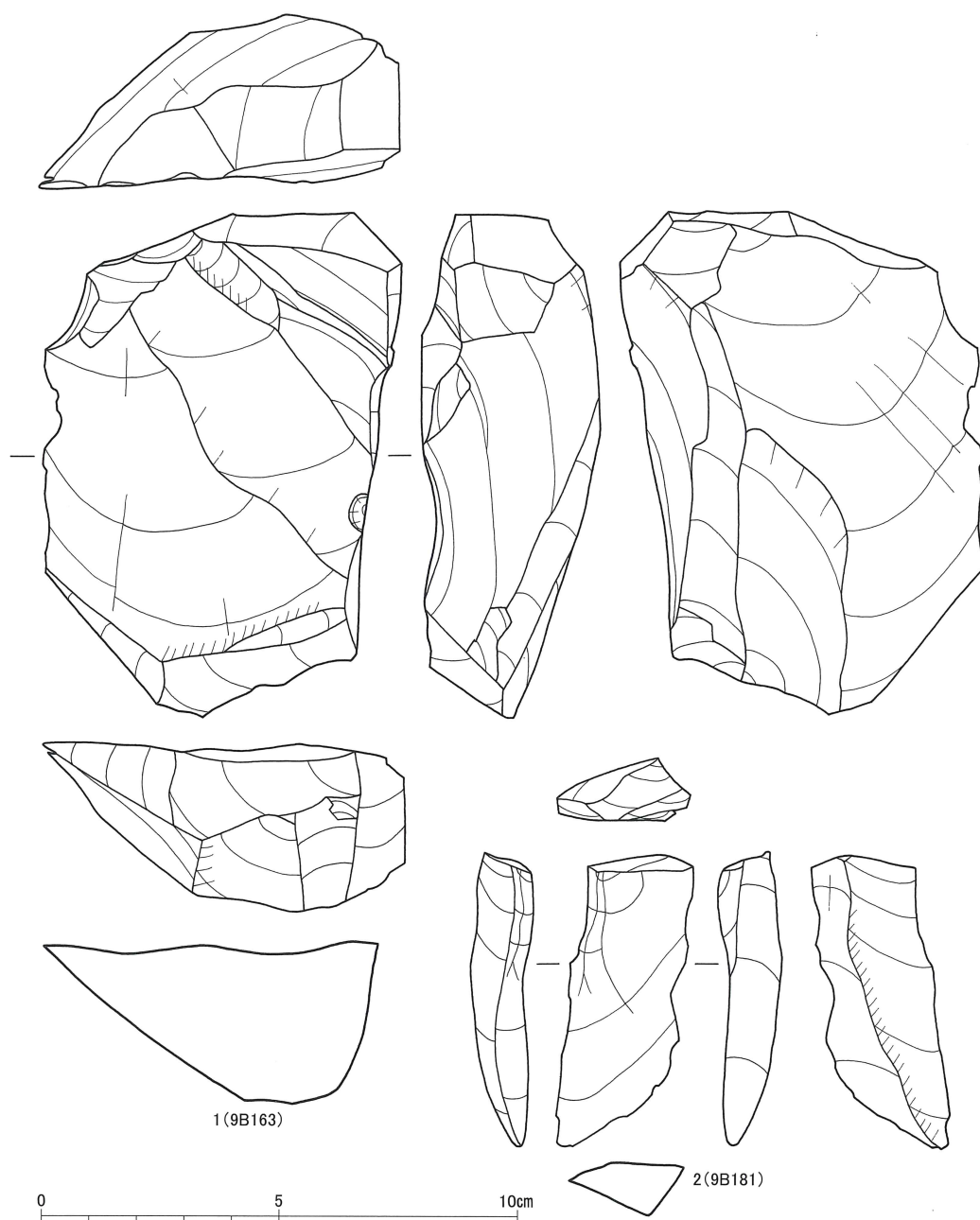
1は一つの面に自然面を残し、自然面と直交する剥離面があり、それを打面として3の剥片を横方向に移動しながら打ち剥いでいる。その後、打面再生の目的で最初の打面と平行な打撃を受け、この石核は廃棄された。2は屈曲した自然面をもつ剥片で、まともな剥片である。3は打面側が折れて存在しない剥片である(9B182)。この一群は巻末写真に図化しなかった分を含めて掲載した。



第206図 9B区出土礫分布図



第 207 图 9B区IV層出土石器



第 208 図 9B区Ⅶ層出土接合資料

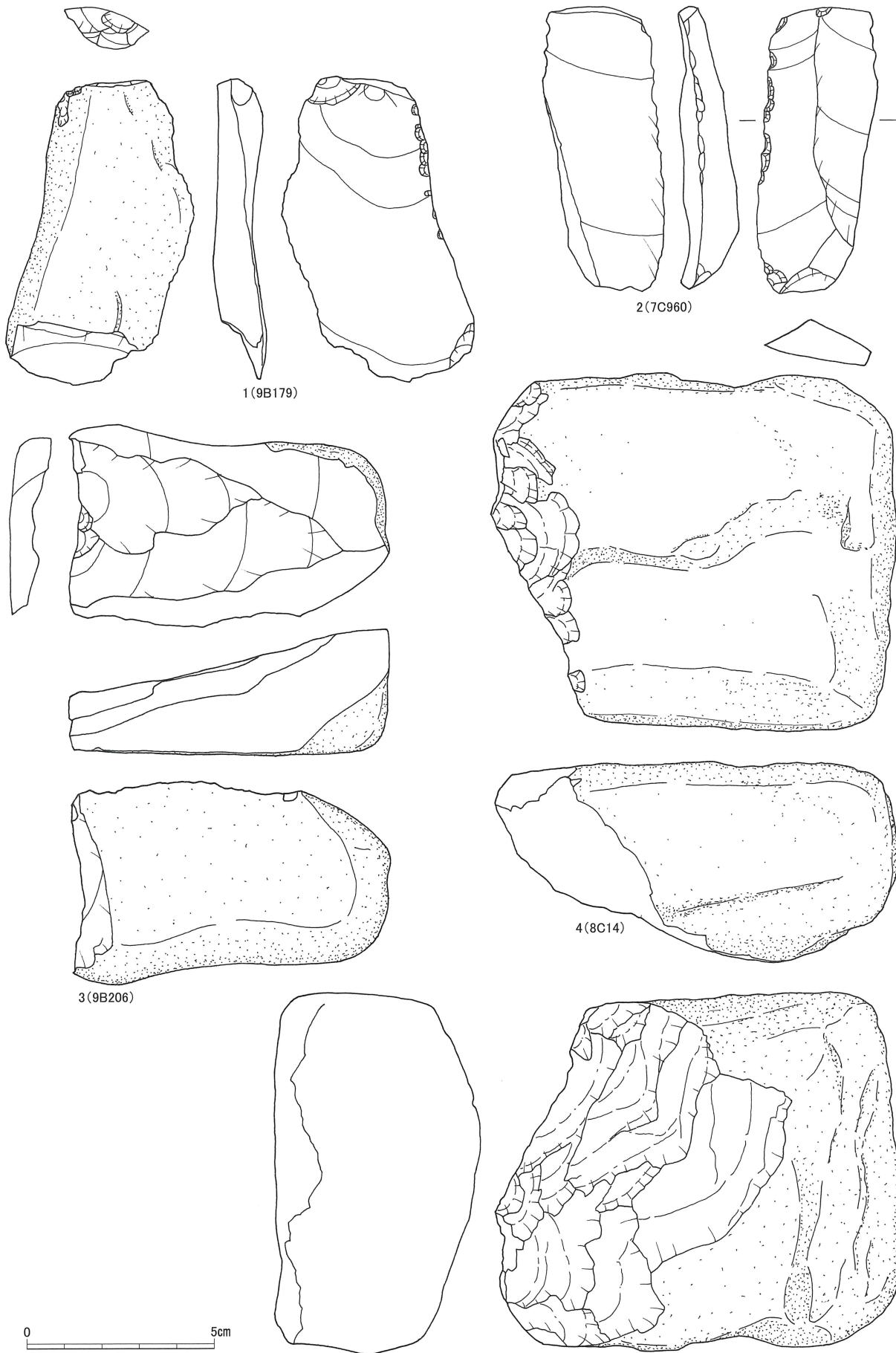
10区の調査

10区は9B区を少しだけ拡張して調査した部分で、4m×4mの区画の北端部分である。Ⅶ層から箔へ2点が出土した(10B1・10B2)。

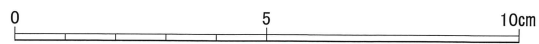
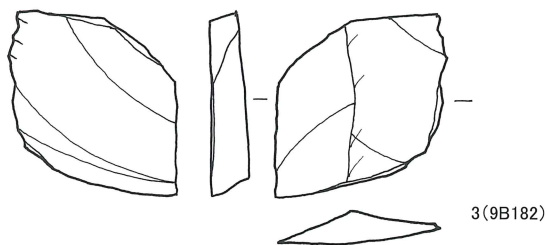
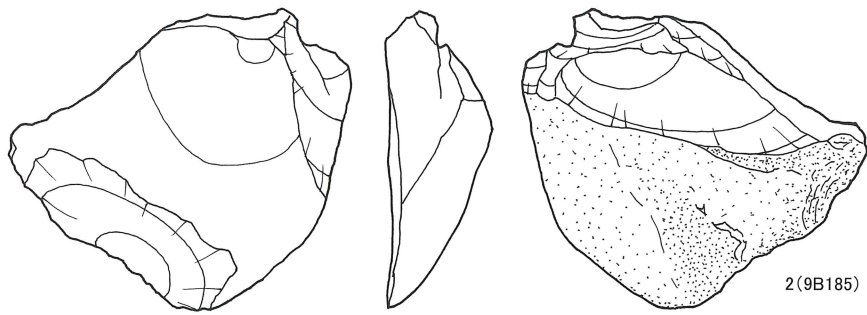
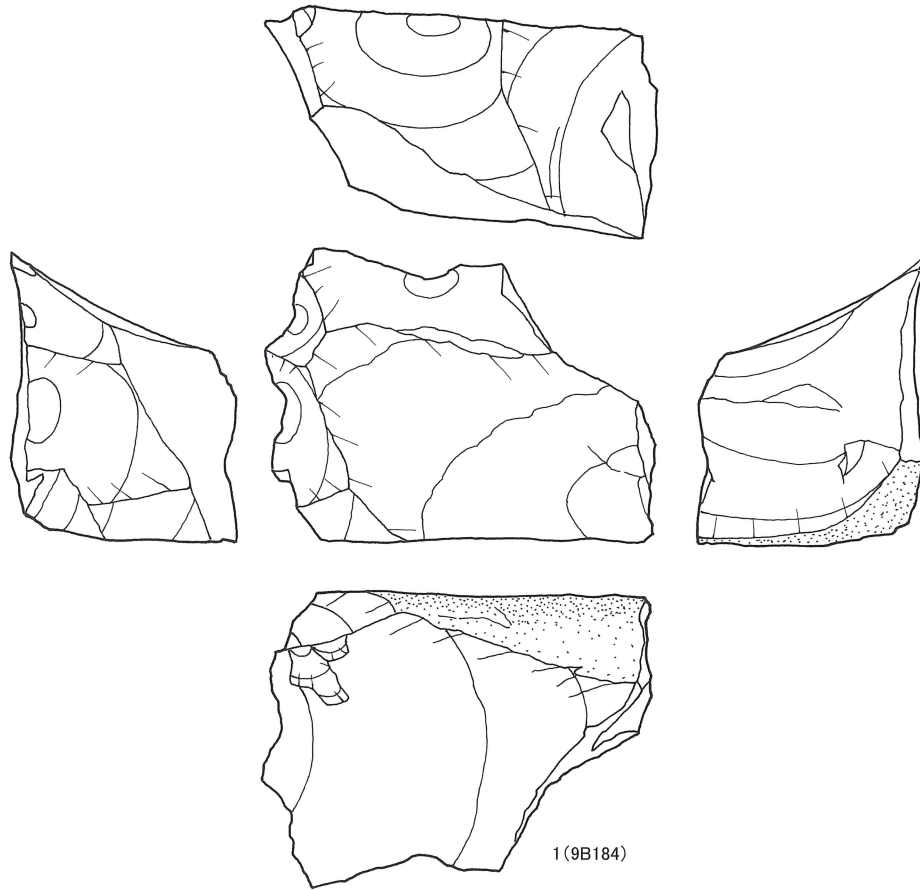
第211図1は短軸の断面が三角気味で、長軸の両端に叩打痕がある。長さ10.5cm・幅4.8cm・厚さ4.7cm・重さ335.2gである。

10区出土石器

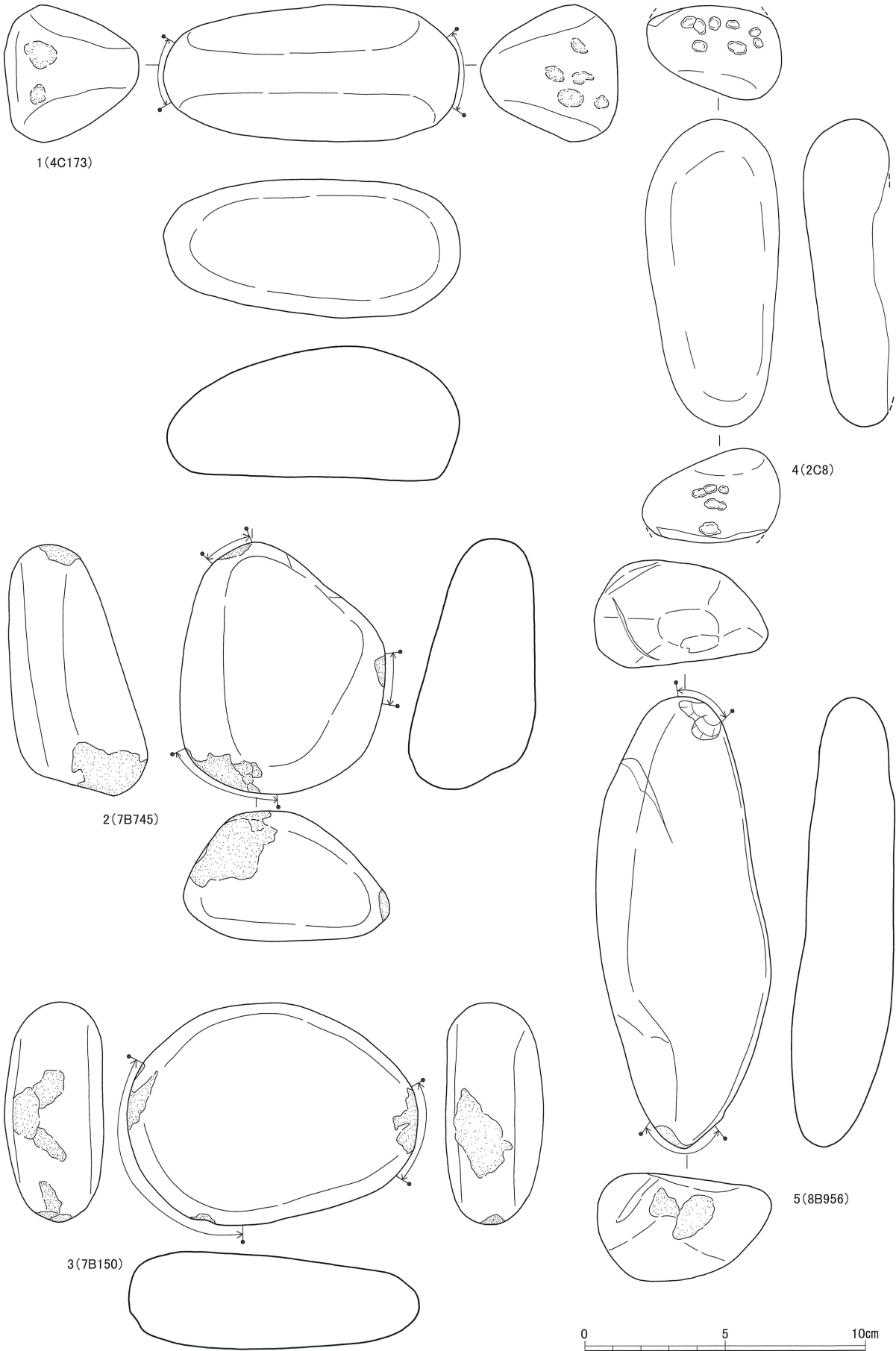
第211図2はⅢ層出土で突出部三箇所叩打痕がある(7B745)。長さ8.8cm・幅7.3cm・厚さ4.0cm・重さ378gである。



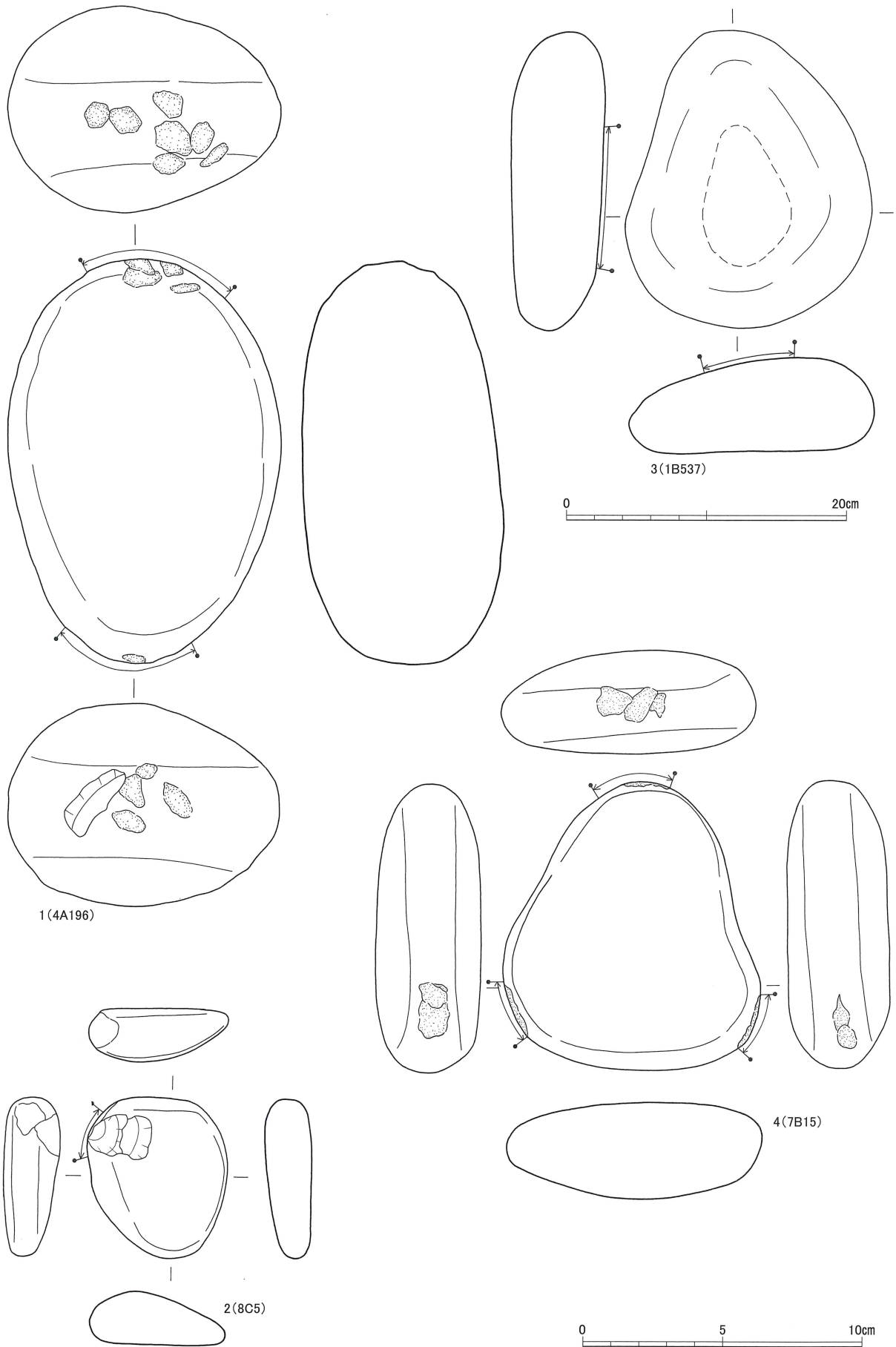
第 210-2 图 7~9区出土石器



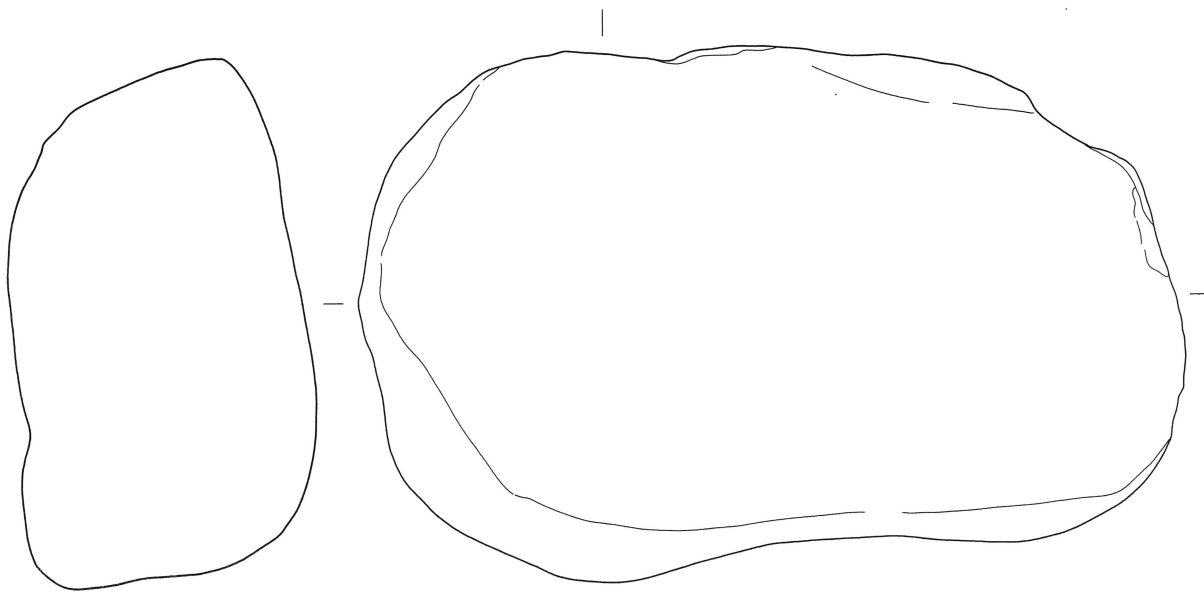
第 210-3 図 9B区Ⅶ層の石器



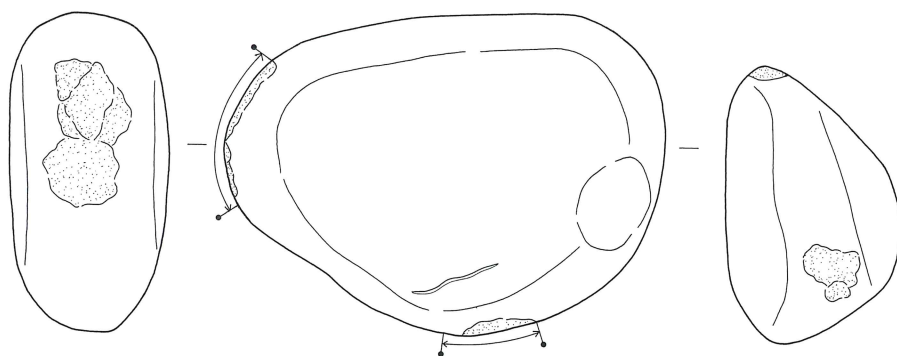
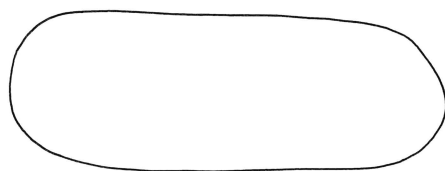
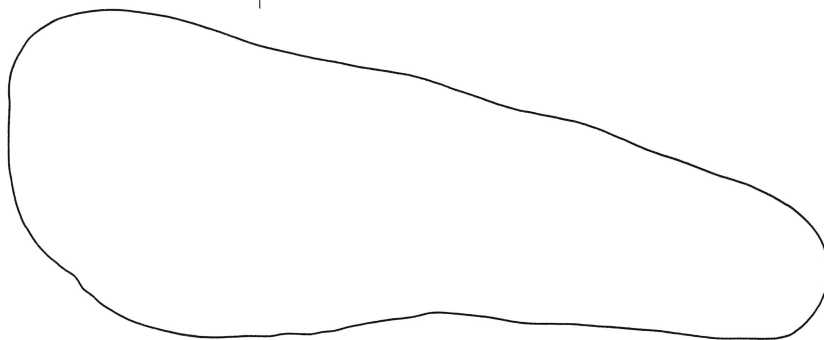
第 211 図 叩き石集成1



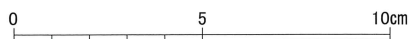
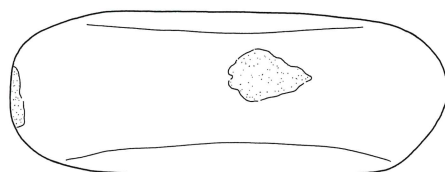
第 212 図 叩き石集成2



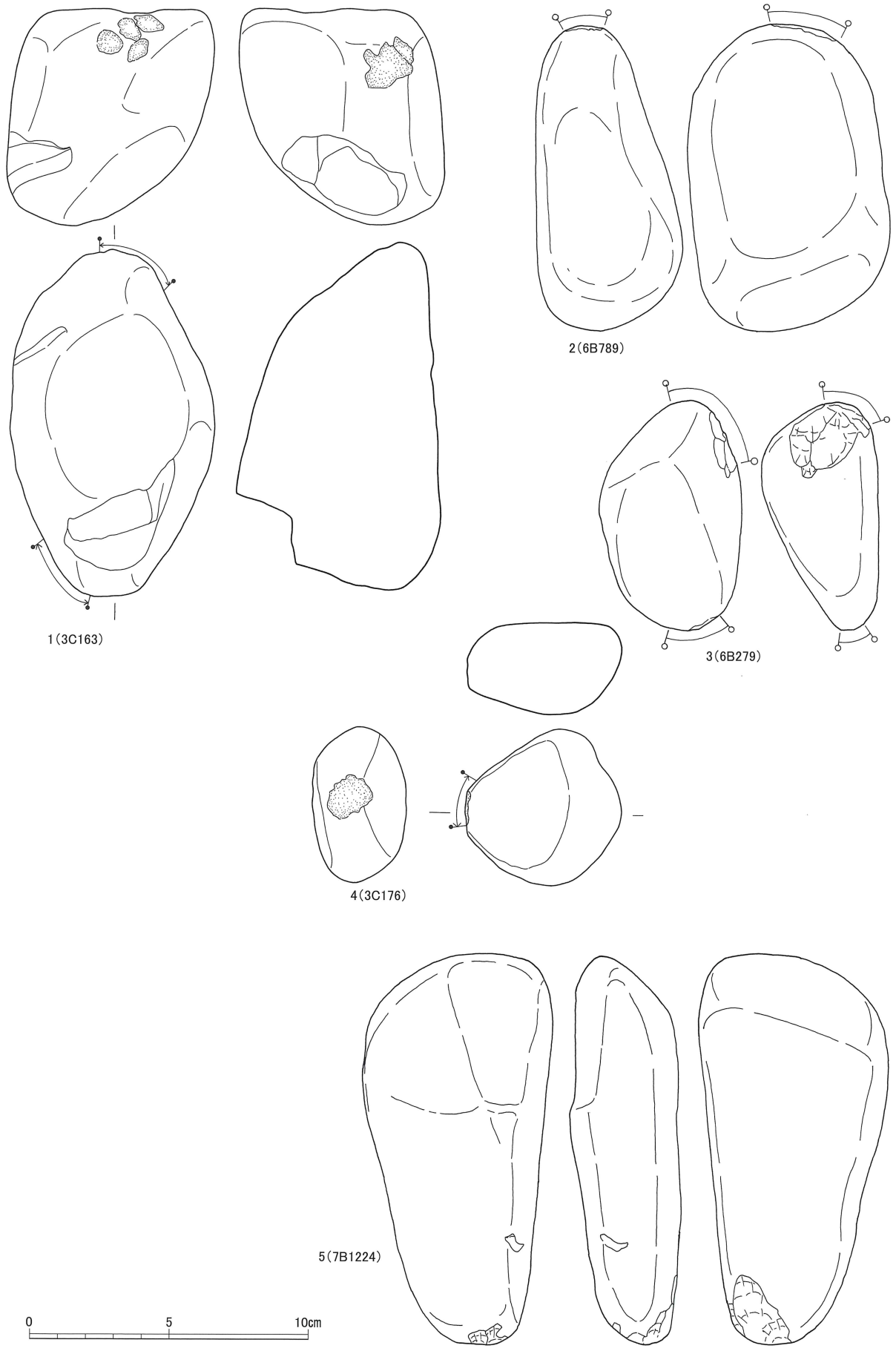
1(4C56)



2(6B698)



第 213 図 叩き石集成3



第 214 図 叩き石集成4

第211図3は7B区Ⅲ層出土の叩き石(7B150)。円礫の長軸両端、一部の側面には叩打痕がある。長さ10.3cm・幅7.8cm・厚さ3.3cm・重さ410gである。

第211図4は2C区Ⅱ層から出土した叩き石である。長軸の両端に叩打痕がある。片面は剥落している。長さ10.8cm・幅4.7cm・厚さ5.3cm・重さ232gである。

第212図1は厚みのある円礫でⅤ層から出土した(4A196)。長軸の両端に叩打痕がある。長さ14.9cm・幅9.8cm・厚さ7.2cm・重さ1,290gである。

第212図4は7B区Ⅳ層出土(7B153)。平面形が三角で、三つの突出部に叩打痕がある。長さ10.2cm・幅9.1cm・厚さ3.5cm・重さ480gである。

第213図1は使用痕跡はみとめられないが、通常よりも大きい礫である。台石か? 長さ22.0cm・幅14.2cm・厚さ8.7cm・重さ3,500gである。

第213図2は6B区のⅤ層から出土(6B698)した叩き石である。長軸の片方の端部と側面の突出部に叩打痕がある。長さ11.6cm・幅8.5cm・厚さ4.1cm・重さ640gである。

第214図1は3C区のⅣ層から出土した(3C163)。長軸の両端に叩打痕がある。長さ12.3cm・幅7.3cm・厚さ7.3cm・重さ860gである。

第214図2は6B区のⅤ層から出土した叩き石である(6B789)。一方が厚く、他方が薄くなった薄い方の端部に叩打痕が残る。長さ10.9cm・幅7.2cm・厚さ5.3cm・重さ580gである。

第214図3は6B区のⅣ層から出土した(6B279)。鶏の玉子くらいの大きさで、両端に叩打痕をもつ。長さ8.2cm・幅5.1cm・厚さ4.2cm・重さ197.9gである。

第214図4は3C区のⅢ層から出土した(3C176)。鶏の玉子くらいの大きさで、尖った一端に叩打痕をもつ。長さ5.6cm・幅5.5cm・厚さ3.3cm・重さ116.5gである。

第214図5は7B区Ⅲ層から出土した(7B1224)。長さ13.9cm・幅6.8cm・厚さ4.0cm・重さ520gの円礫の細い方の先端を対象物を叩くのに使い、その衝撃が残されている。